

法律カ日ニ因テ計算スルキ事件ノ起リタル日ハ法律ノ望ム所ノ距離ノ中ニ含蓄セサル可ラサルヤ否ヤヲ知ント欲セハ、若シ法律カ分又ハ秒ニ因テ計算シタルキハ分又ハ秒ニ付キ其答ハ如何ナルヤヲ問ハサル可ラス、抑問題ノ呈出スル諸般ノ場合ニ於テ明確ニ真正ノ解釋ヲ認知シ明示スルノ要訣ハ則チ茲ニ存ス

(一八六二號) 借犯罪ハ犯者ヲシテ公訴權ニ服セシムル所ノ不利益ナル法律上ノ位地ヲ生シ、又期滿免除ハ之レト反對ノ意義ヲ以テ此位地ヲ脱セシムル所ノ放免ノ期限ヲ生ス、依テ茲ニ二箇ノ思考、即チ相抵觸スル所ノ二箇ノ力、即チ公訴權ヲ生セシムル所ノ犯罪ト、之ヲ消滅セシムル所ノ期滿免除ノ時間トアルヲ以テ論理上放免ノ期限ニ付キ犯罪ノ分秒又ハ時ヲ計算スルヲ得ルトセハ二箇ノ反對ノ者ヲ加算スルニアラスヤ、而シテ斯ル極點ニアリテ此解釋ヲ採用スル人アリヤ、如何(一)

(二) 予ハ其例トシテ千八百五十二年ノ設定ニ係ル埃太利現行刑法ヲ援引スヘシ(千八百七十四年十一月七日埃太利國司法卿ハ新刑法草案ヲ提出シタリ) 此千八百五十二年ノ刑法以前ノ千八百三年ノ刑法ハ通常ノ規則ニ從ヒ公訴期滿免除ノ期限ヲ犯罪ノ日ヨリ起算シタリキ、然ルニ千八百五十二年ノ刑法ハ此規定ヲ變更シ重罪又ハ輕罪ヲ犯シタル即時ヨリ起算ストナセリ(重罪ニ付テハ第二百二十七條、輕罪及ヒ違警罪ニ付テハ第五百三十

一條) 是レ所謂極點ノ場合ナリトス、然レモ刑法ノ文字ニ因テ犯罪ノ時ハ期滿免除ノ期限中ニ算入セサル可ラスト云フ人アリヤ

但シ埃太利刑法ノ精神ハ無形的ノ即時、即チ量積ナキ想像上ノ條線ノ如ク繼續ナキ數學上ノ即時ヲ想像シタルカ如シト雖モ、斯ノ如キ無形的ノ事ハ實際ニ於テ生ス可ラサル者トス、何トナレハ世界ノ實際中ニアラサルコトナレハ也、故ニ斯人如キ實例ヲ呈スル所ノ刑事訴訟ハ決シテ一モアラサルヘシ、時ニ長短アリト雖モ犯罪ニハ常ニ必ス其時間アルモノトス、借犯人カ罪ヲ犯シ居ル間ハ期滿免除ノ思考ハ生スルコトヲ得ス、此レ人ノ皆繼續犯ノ場合ニ於テ云フ所ナリ、是ニ由テ之ヲ觀レハ期滿免除ハ犯罪ヲ遂クル最終ノ所爲及ヒ此最終ノ所爲ノ終極ニ於テ始メテ生スルモノトス、例ヘハ十二時四十八分ニ犯罪ノ遂ケタルモノトセハ期滿免除ハ此最終ノ分ノ終リヨリ始マリ、其前ノ時間ハ皆計算セズ、是故ニ埃太利刑法ノ規定タル其意思ハ甚タ寬ナリト雖モ、實際ニ於テ屢、解ス可ラサルノ困難ヲ生シ其弊ヲ見ハスニ至ルナリ、公訴ナクシテ二十年、十年又ハ五年(是レ埃太利刑法期滿免除ノ期限ナリ)ノ經過シタル後、適切ニ犯罪カ四十八分四十九分又ハ五十分ニ犯シタルコト又一時二時又ハ三時ニ犯シタルコトヲ證明セサル可ラス、而シテ僅カニ一分ヲ爭ヒ期滿免除ノ得ラレタルヤ、又ハ得ラレサルヤヲ問ハサル可ラス、此極端ノ場合ニ於テハ裁判ハ



或ハ判知ス可ラス、或ハ實行スル能ハス、或ハ專擅ニ爲スモノトス、是レ期滿免除ノ日ニ因テ計算スル方法ハ最モ明瞭ニ又最モ計算シ易キヲ以テ採用セラレサル可ラサル所以ナリ、

千八百七十三年ノ埃太利刑法ハ其第六條ニ於テ期滿免除ノ開始ノ日ヲ期限内ニ計算ス可ラサルコトヲ規定シ、論理的ノ學說ニ復シタリ

儲、犯罪ノ時又ハ即時ニ付キ、之ヲ計算セサルキハ、犯罪ノ日ニ付キテモ亦之ヲ計算スルヲ得サルモノトス、何ントナレハ若シ法律カ期滿免除ニ付キ又ハ分ニ因テ計算スト定メタルキハ犯罪ノ時又ハ分ハ犯罪ノ日ト同一ノ位地ニアレハ也、而シテ放免ニ要スル所ノ犯罪ノ距離ハ犯罪ヨリ計算スヘキ者ナレハ犯罪其物ハ明カニ計算中ニ入レサルナリ、法律ハ同一ノ日ノ中ニ部分ヲ分ツコトナキヲ以テ之レカ距離ノ測量ヲナスヘキハ此最近ノ部分ノ極端、即チ將來ニ向フ所ノ外部ノ線ヨリ後、即チ此日ノ終リヨリスヘクシテ、其中央若クハ其初メヨリス可ラス、何ントナレハ犯人モ亦犯罪ノ日ノ中ニアルヲ以テナリ、日、時、分、即時ハ各長短ノ別アリト雖モ、其生スル所ノ問題ニ至リテハ常ニ同一ナリトス、而シテ其解釋モ亦同一ナラサルヘカラス、法學者タル者ハ之ヲ講究スル利益ノ漸次増加スルカ爲メニ其眼ノ嚮マサランコトヲ要ス

我輩ハ常ニ右同一ノ要訣ニ依テ法律上ノ種々ノ場合ニ事件ノ生シタル日ヲ其期限内ニ算入スルト否ラサルトノ問題ヲ解スルコトヲ得ヘシ、(一)但シ公訴權ノ期滿免除ニ付テハ我輩カ論シ來リタル所ヲ以テ充分ナリトス

(二)是故ニ我刑法第二十三條ニ於テ重罪ノ刑ニ付キ(有期刑ノ期限ハ處刑ノ宣告ノ確定シタル日ヨリ起算ス)トノ規定ハ處刑ノ宣告ノ確定シタル日カ刑ノ期限内ニ算入セサル可ラストナス、何ントナレハ若シ法律カ時又タ分ニ因リ計算スヘキ者ト爲シタリシナラハ處刑ノ宣告ノ確定シタル時又ハ分ハ論理上必ス刑ノ期限内ニ算入セサル可ラサレハナリ此場合ニ於テハ我輩ハ此ニ二箇ノ反對ノ者ヲ加算セスシテ同一ナル二箇ノ者ヲ加算スルナリ、何ントナレハ法律上規定セラレタル期限ノ刑ノ効ノ生スルハ確定シタル宣告ノ瞬間ヨリスレハナリ、例ヘハ懲役十年ニ處セラレタル者ニ之ヲ適用セヨ、是レ固ヨリ法律ハ處刑ノ宣告カ確定シタル時ニ未決拘留中ニ在テ官署ノ威權ノ下ニアル人ヲ想像ス、否ラサレハ則チ欠席裁判又ハ囚徒逃走ノ場合ナリトス、又同シク單ニ監視五年ニ處セラレタル人ニ之ヲ適用セヨ、此場合ニ於テハ此人カ未決拘留ノ位地ニアルコトヲ要セス、何ントナレハ單ニ權利ヲ剝奪スルノ刑ニ係レハナリ

訴訟ノ路ニ依リ一箇ノ所爲(裁判又ハ命令)即チ人力不當ナリトスル所ノ一箇ノ所爲ヲ抗



擧スル爲メニ與ヘラレタル或ル期限ニ就テハ、二ツノ意思即チ二ツノ力ノ相抵觸スルコトハ寔ニ明瞭ナリトス、一方ヨリスレハ抗擧セラル、所爲、又ハ法律カ書類ノ送達ヨリ起算スルルハ此送達ノ所爲、他ノ一方ヨリスレハ抗擧ノ所爲即チ之ニ付キ或ル期限ノ與ヘラレタル抗擧ノ所爲是レナリ、若シ法律カ時又ハ分ニ因テ此期限ヲ計算セシナラハ、論理上抗擧ノ期限内ニ抗擧スヘキ裁判若クハ知リ得タル書類送達ノ時又ハ分ヲ算入スルコトヲ得ルヤ、是レ二箇ノ反對ノモノヲ加算スルニアラスシテ何ソヤ、是故ニ法律カ此期限ヲ日ニ因テ計算セシナラハ裁判又ハ送達ノ日ハ期限内ニ算入ス可ラス、我輩ハ此解釋ヲ民事原告人又ハ檢察官ニ就テモ右ト同一ナル位地ニアル諸般ノ場合ニ適用スヘシ、故障ニ就テハ治罪法第五百一一條第八十七條及ヒ第三百五十六條公訴ニ就テハ第三百三十五條第三百七十四條第二百三條及ヒ第二百五條上告ニ就テハ第二百九十六條第三百七十三條ヲ參觀スヘシ而シテ法律カ時ニ或ハ裁判ノ日ノ後(第二百三條)又ハ次ノ五日中(第二百九十六條)又ハ全三日間(第二百七十三條)等ノ語ヲ用キテ明言シタルモ其明言シタルト否ヤトニ關セズ、同一ノ解釋ナリトス、即チ此論理ヲ顛倒シテ適用スヘシ

右ト同シク與ヘラレタル命令ト此命令ヲ執行スルノ期限トニ於テ相分ル、二ツノ思考アルニアラスヤ、即チ命令ヲ執行スル爲メニ與ヘラレタル期限内ニ此命令ノ與ヘラレタル時自ラヲ算入スルハ不道理ナラスヤ、然ラハ則チ若シ法律カ日ノ部分ヲ採用スルコトナク日ニ因テ計算スル者トセハ命令ノ日ハ期限内ニ算入スヘカラス、我輩ハ出產ノ三日内ニ出產ノ申告ヲ爲スヘキ法律上ノ命令ニ此解釋ヲ適用スヘシ(刑法第三百四十六條ニ依テ刑事上ノ制裁ヲ受クヘキ民法第五十五條)及ヒ欠席裁判ニ關スル命令ニモ亦之ヲ適用スヘシ(治罪法第四百六十五條)

治罪法第四百二十五條ハ右ト同一ナル推理ノ機會ヲ與ヘタリ

事實上物、ノ自然ノ力ニヨリ最モ屢、生スル場合ハ二箇ノ思考ノ間ニ抵觸アルカ若クハ少ナクモ離隔アルモノニシテ隨テ事件ノ生シタル日ハ期限内ニ算入ス可ラサル場合ナリトス、之ニ反スル場合ハ甚タ稀レナリ、然レモ我輩ハ遠カラズ囚徒逃走ノ場合ニ於ル刑ノ期滿免除ニ於テ一箇ノ新ナル場合ヲ看出スヘシ(一八九九號參觀)

(一八六三號)我治罪法ハ左ノ語ヲ用キ(重罪ヲ犯シタル日ヨリ起算シ滿十年ノ後、違警罪ヲ犯シタル日ヨリ起算シ滿一年ノ後)第六百三十七條及ヒ第六百四十條ト云ヒタルハ毫モ學問上ノ解釋ニ反スルコトナシ、故ニ此解釋ヲ適用セサル可ラサル爲メニハ唯是レノミニテ既ニ足レリトス

所謂日ヨリ起算ストノ語ハ立法者カ別ニ説明ヲ與フルコトナクシテ之ヲ用キタル所ハ孰レノ



場合ト雖モ皆不確實ニシテ兩様ノ意義ニ解シ得ラル、者トス、前段説キ來リタル所ハ則チ其不確實ナル所以ヲ證スルナリ是レ其測量スヘキ者ハ日ノ距離ニ依レハナリ我輩ハ自カラ眞實ナリト認ムル解釋ノ爲メニ前段ノ挿註ニ於テ見タル如ク此語ハ我治罪法中ニ最モ屢此問題ニ係ル所ノ日カ期限内ニ算入ス可ラサル場合ニ用ヰラレタルヲ以テ我輩ノ理由ト爲スコトヲ欲セス、蓋シ此語ヲ反對ノ意味ニ用ヰラレタル或ル例ヲ以テ其不確實ナルコトヲ觀ルニ足ルナリ故ニ此ノ如ク區別アルヲ以テ各場合ヲ考究シ法理ト論理トノ命スル所ニ從ヒ此語ノ意味如何ンヲ論決セサル可ラス、

マンガン氏ハ人ノ敢テ抵抗スヘカラサル方法トシテ左ノ言ヲナセリ、曰ク(治罪法第六百三十七條及ヒ第六百四十條ニ公訴權ハ重罪又ハ輕罪ヲ犯シタル日ヨリ起算シ期滿免除ヲ得トアルハ犯罪ノ翌日ヨリスルニ非サレハ起算セスト云ヒタルニアラサルコト疑ヒヲ容レス)(一)ト、是レ問題ヲ以テ問題ヲ解シタルモノニテ同論ヲ覆説シタルニ過キス、何トナレハ此問題タル治罪法第六百三十七條第六百四十條ニ於テヨリ起算ストアル語ハ如何ナル意味ナルヤヲ知ルニアレハナリ、若シ家屋又ハ河川ヨリ某ノ距離ヲ測量スト云フキハ氏ト雖モ亦家屋ノ全部河川ノ全面ヲ此中ニ算入セサル可ラスト云フコトヲ欲セサルハ蓋シ疑ヒヲ容レス(二)(一)マンガン氏著公訴權論第二卷第三百十九號參觀

(二)大審院ハ我輩カ下ニ援引スル所ノ千八百六十五年ノ判決ニテ此所謂輕罪ヲ犯シタル日ヨリ起算ストノ語ヲ以テ此犯罪ノ日ハ明確ニ期限内ヨリ除棄セサル可ラスト決定シ、氏ト反對ノ理由ヲ擧ケタリ

我輩ハ刑事ニ於テハ、夫ノ疑義アルキハ被告人ノ便利ナル方法ニ解釋ス可シト云ヘル普通ノ思考ニ付キ感覺ヲ受クルコト少ナシト明言セン、我輩ハ此諺ニ如何ナル價值ヲ附セサル可ラサルヤ、蓋シ孰レニモ決定スルノ理由ナク兩様ニ解ス可クシテ到底判決ス可ラサル場合ニ適用スヘキ諺ニシテ最終ノ裨助第二流ノ方法ニ過キサルコトヲ知ルナリ(一六三三號參觀)然ルニ今此問題ニ就テハ決定ヲ導ク所ノ道理ハ同一ナル各場合ニ於テ總テノ法律ト相符合ス、然ラハ則チ猶豫スルコトナク之ニ從ハサル可ラサルナリ  
我輩カ此証明ニ付キ此ノ如ク固執シタル所以ハ反對ノ議論アルカ爲メニ避ク可ラサルコト信シタルニ由ルナリ、我輩ニ於テハマンガン氏及ヒフオースタン、エリー氏ノ如キ最モ至當ノ勢力ヲ有スル刑法學者ノ反對ノ説アリテ、我輩ニ於テモ外國ニ在テモ信用セラル、ナリ、然レハ人ノ此議論ニ從ハンコトヲ豫防スル爲メニ確實ニシテ且ツ一般ノ方法ヲ以テ眞實ノ原則ヲ設クルコトハ避ク可ラサルコトナリ、  
予ノ知ル所ニ依レハ我裁判例ハ此問題ニ付キ普通ノ重罪又ハ輕罪ニ於テ未ダ生シタルコト



ラス、實二十年又ハ三年ノ期滿免除ハ實際ニ生スルノ機會アルコト甚ク稀レナリ、然レモ特別ナル短期ノ期滿免除即チ一月若クハ三月ノ期滿免除ニ就テハ一日ノ差ハ最モ屢大關係アリテ決定スヘキ目的トナル(獵獸犯則森林犯則)明カニ例外タル正文ナキ上ハ其原則タル常ニ同一ナリトス、然レモ議論ノ學者間ニ異ナルカ如ク裁判例モ亦時ニヨリテ變更シ且ツ異別アリ大審院ハ獵獸犯則事件ニ付キ千八百四十五年一月十日ノ(ベナール事件)ニテ犯罪ノ日ヲ除クノ理由ヲ以テ判決セリ、而シテ千八百六十五年二月二日ノ檢察官ノ論決ニ反シテ下シタル新裁判ヲ以テ此裁判例ヲ維持シタリ、實ニ法理ハ則チ茲ニ存セリ、乃チ最早他ノ變更ヲ要スルコトナク一般ニ行ハル、ノ價值アリ我諸裁判所ニ於テハ皆此裁判例ニ依ラサル可ラス

(二八六四號) 公訴權期滿免除ノ期限ノ終リノ日ニ就テハ毫モ疑ヒノ存スルコトナク何人ト雖モ皆最終ノ日ノ終リニ於テ期滿免除ヲ得ルコトヲ認メタリ

(二八六五號) 繼續犯ノ場合ニ付キ、其有形的ノ繼續ニ係ルト無形的ノ繼續ニ係ルトヲ問ハス(七四三號及ヒ次號七五八號及ヒ次號參觀)毫モ困難ヲ生スルコトナシ、此場合ニ於テハ一罪ニ過キサルカ故ニ期滿免除ノ期限ヲ起算スルハ此一罪ニ含蓄スル所ノ最終ノ所爲ノ終リタル日ヨリス(七四八號參觀)

(二八六六號) 慣行犯ニ就テハ繼續犯ト同シク其所爲總テ相連結ス、故ニ慣行スル所ノ數所爲ヲ各獨立セシムルハ犯罪ヲ構成セス(七六一號參觀)我輩ハ獨立セシメタル數所爲ノ各別ニ期滿免除ヲ得ヘカヲサルハ之レカ爲メナリト云ハス、是レ我治罪法第六百三十七條ノ文辭ヨリ生スル一理由ニ在ルヘシ、然レモ我輩ハ一般ノ學理ニ從テ推理ヲ爲シテ欲ス、夫レ時ナル者ハ寔ニ明確ニ此區分シタル各元素ニ對シテ活動シ人ヲシテ之ヲ遺忘セシムルコトニ導ク、我輩ハ各新所爲カ總テノ前所爲ヲ呼ビ起シ再ヒ其紀念ヲ生セシムルコトハ則チ眞實ナリト雖モ再ヒ前所爲ヲ蘇生セシムルトハ云ハサルナリ、然レモ裁判官ノ爲メニナスヘキ問題ハ慣行ナリヤ否ヤヲ知ルニアリトス、是レ被告人ノ所爲ニ依テ發スル所ノ瑕瑾又ハ無形的ノ疾病ノ問題ナリ、又裁判官ハ此問題ニ付キ明瞭ナラシメンカ爲メニ被告人ノ生計ニ糊リ其平素ノ行狀如何ヲ觀察セサル可ラス、若シ裁判官カ被告人ノ多年ノ所爲中終始繼續セシテ各獨立シタル所爲ノ甚ク相遠キニアラサレハ發見セサルハ此所爲タル慣行ノ問題ニ付キ如何ナル勢力ヲモ有セサル可ラスト謂フ可シ、但シ法律ハ此點ニ付キ裁判官ノ考定ニ一任ス、而シテ此問題タル特ニ無形的ニ係ルカ故ニ裁判官カ被告人ノ慣行ナルヤ否ヤヲ判定スルハ其數所爲ヲ蒐集シ且ツ證明シタル總體ノ事實ニ對シ一ニ良心ノ指示スル所ニ從フヘキノミ、被告人ハ獨立ナル數所爲ニ各別ニ適用スヘキ期滿免除ヲ舉ケ來リテ論辨



スルヲ得サルナリ(七六四號參觀)

若シ法律カ慣行ト云ハスシテ單ニ第二又ハ第三ノ所爲ヲ某ノ刑ニテ罰スヘシト云ヒシナラハ、我輩ハ恐ラクハ他ノ方法ヲ以テ之ヲ論定スヘシ、何ニトナレハ茲ニ判定スヘキハ慣行ノ無形的ノ問題ニアラスシテ第一ノ所爲ト第二第三ノ所爲トノ成立ノ問題ナレハナリ、但シ此場合ニ於テモ亦成文法上ヨリ視レハ第六百二十七條ノ文辭ヨリシテ其各部分ニ對シ期滿免除アリトノ理由ヲ生シ得ルモノトス、然レモ我輩ハ我法律中ニ於テ未タ斯ノ如キ場合ノ例アルヲ知ラサルナリ、

一八六七號) 數人共犯ニ就テハ唯單一ノ犯罪アルノミ、隨テ犯罪構造ノ主タル罪ヲ犯シタル日ヨリ起算スヘキ單一ノ公訴權ノ期滿免除アルノミ、凡ソ共犯人ハ正犯タルト從犯タルヲ問ハス、又加功ノ時ノ如何ニ關セス犯罪ノ單一ノ中ニ包含スル上ハ亦單一ノ期滿免除ノ中ニ包含スルモノナリ

我法律ハ共犯人ノ數中ニ列シタル所ノ重罪又ハ輕罪ヲ犯シテ奪取シタル物件ノ寄藏者ニ對シテハ(二二二〇號參觀) 既ニ共同犯人ト看做スヲ以テ、寄藏ノ時ノ如何シニ關セス其期滿免除ハ常ニ主タル重罪又ハ輕罪ノ日ニ溯リテ起算スヘク特ニ寄藏者ニ對スル期滿免除アラサルノ結果ヲ生セリ、若シ之レニ反シテ寄藏罪ハ第一ノ犯罪ノ機會ニ乘シテ犯シタル者ニテ

寄藏固有ノ有罪的タル原理アリテ更ニ一箇ノ新犯罪ヲ認ムル所ノ學問的ノ論ニ從フハ二箇ノ期滿免除即チ一旦重罪輕罪ヲ犯シタル上ハ復タ寄藏ニ關係ヲ及ホサル所ノ期滿免除ト主タル犯罪ノ期滿免除ヨリハ短期ニスヘキモ寄藏ノ日ヨリ起算セサル可ラサル所ノ寄藏罪其物ノ期滿免除トヲ區別セサルヘカラス、此解釋ハ我成文法中ニ於テ犯罪人ノ藏匿及ヒ死骸ノ隱匿ノ二箇ノ場合ニ適用セサル可ラス、蓋シ我法律ハ此二箇ノ犯罪ヲ共犯トナサスシテ一箇ノ輕罪トシテ罰スルヲ以テナリ(二三〇九號參觀)

(一八六八號) 公訴ノ期滿免除ハ重罪輕罪又ハ違警罪ヲ犯シタル日ヨリ起算スト云ヘル規則ハ我特別法中ニ於テ一二ノ例外アリ、我輩ハ其例トシテ被告人ノ調書中ニ指名セラレタルト否ラサルトニ從ヒ期滿免除ノ期限ニ長短アリテ輕罪又ハ違警罪犯ノ證明セラレタル日ヨリ其期限ヲ起算スル所ノ森林法第百八十五條及ヒ河川漁魚ニ關スル千八百二十九年四月十五日法律第六十二條ヲ舉クヘシ、又議員撰舉ノ件ニ付キ犯シタル重罪又ハ輕罪ニ對シ撰舉ノ結果ノ公布ノ日ヨリ期滿免除ヲ起算スル所ノ千八百五十二年二月二日ノ布告第五十條ヲ示スヘシ、是等ノ法ニ於テ期滿免除ノ期限ハ甚タ短クシテ其場合ニ因リ一月、三月、或ハ四月ナリトス(一)

(二) 千八百二十七年七月三十一日ノ森林法第百八十五條(森林事件ニ關スル輕罪及ヒ違



警罪ノ賠償ニ付テノ訴權ハ若シ被告人カ調書中ニ指名セラレタルキハ輕罪及ヒ違警罪ノ證明セラレタル日ヨリ起算シ、三月ヲ以テ期滿免除トナス、之ニ反シテ其指名セラレサル場合ニ於テハ期滿免除ノ期限ハ其證明セラレタル日ヨリ六月ナリトス云々

河川漁魚ニ關スル千八百二十九年四月十五日ノ法律第六十二條ハ前段ト同一ノ規定ニシテ唯其異ナル所ハ期限ノ一月又ハ三月ニ減縮セル點ナリトス

千八百五十七年六月九日ノ陸軍刑法ハ不服從又ハ脱營ノ輕罪トナス所ノ服務欠勤ノ繼續犯即チ千八百五十五年五月二十六日ノ法ニ從ヒ軍人カ旗下ニ服務スルヲ得サル年齢四十七歳ニ至ラサレハ終ラサル所ノ服務欠勤ヲ不服從又ハ脱營ノ罪ト同ク論シ此罪ニ對シテハ四十七歳ノ年齢ヨリ期滿免除ノ期限ヲ起算ス、是ヲ以テ該刑法第四百四十四條ハ公訴又ハ刑ノ期滿免除ニ付テハ治罪法ノ處分ニ循據スル旨ヲ定メタル後左ノ文ヲ加ヘタリ云ク  
 (第百八十四條、)、、然レモ不服從又ハ脱營ニ就テノ公訴期滿免除ハ脱營者又ハ不服從者カ四十七歳ノ年齢ニ達シタル日ニアラサレハ其經過ヲ開始セス 脱營者又ハ不服從者カ逮捕セラレタルキハ如何ナル時ト雖モ政府ニ對シ尙ホ務メニ服スヘキノ期ヲ全フセシカ爲メニ陸軍卿ノ處置ニ從フヘシ)

服務ノ期ハ當今ハ千八百七十二年七月二十七日ノ法ニテ改正セラレタリ、然レモ其主義

ニ至リテハ常ニ同一ナリトス

(一八六九號)第四ノ結果、公訴權ノ期滿免除ハ民事上ノ期滿免除、即チ期滿免除ヲ妨ケンカ爲メニ爲ス所ノ裁判所呼出シ、定式ノ督促、財産差押ノ方法ニアラサレハ中斷スルヲ得サル所ノ民事期滿免除(民法第二百二十四條及ヒ第二百四十五條參觀)ト異ニシテ、公訴ノ諸般ノ所爲即チ犯者ナリト信スル人ヲ裁判所ニ引致スル諸般ノ所爲ニ因テ中斷セラレ、ノミナラス、且ツ總テノ治罪ノ所爲、例セハ臨檢、死屍發掘、家宅搜索、物件差押、証人訊問ノ如キ證據ノ元素ヲ搜索蒐集スル所ノ司法官ヲシテ犯罪ノ証ヲ得ル爲メニスル諸般ノ所爲ニ因テ中斷セラレ、加之眞箇ノ犯者ニ對シテ施シタル所爲カ期滿免除ヲ中斷スルノミナラス、無罪者又ハ何人ニ對シ又ハ夫ノ治罪ノ手續上屢施ス所ノ犯人ノ覺知セサルモノニ對シ施シタル所爲モ亦期滿免除ヲ中斷スルモノトス、其理由タル是等ノ所爲ヲ施シタルキハ裁判上犯罪ノ紀念ヲ蓄ヘ隨テ犯罪必罰ノ示例ノ要用ヲ存スルニ由ル(治罪法第六百三十七條及ヒ第六百四十條參觀)

我法律ハ違警罪事件ニ付テハ特別ニ之レカ規定ヲナセリ、即チ其事件ノ量度ノ少ナキト其紀念ノ消滅ノ早キトノ理由ヨリシテ法律ハ其裁判ノ年内ニ與ヘラレシヨリ要シタリ、否ラサルキハ期滿免除ヲ得ルモノトス(第六百四十條)是故ニ此場合ニ於テハ唯豫審又ハ公訴ノ



手續アリタルノミニテハ未タ以テ期滿免除ノ中斷ヲ爲スヲ得ス、必スヤ是等ノ手續ニ繼ヒテ裁判アルヲ要ス

(二八七〇號) 期滿免除中斷ノ法律上ノ効力ハ、既ニ經過シタルモノト分離シ既ニ經過シタルモノヲ破毀スルニアルコトハ皆人ノ知ル所ナリ、是故ニ從來經過シタル時日ハ無用ノ者トナリテ期滿免除期限ノ中ニ算入スルコトヲ得ス、且起算ノ新點ヲナシ最終ノ中斷ノ日ヨリ起算シ新タニ將來ニ向ツテ經過ヲ始ムル者トス、此中斷ノ法ハ民法ニ於テハ人皆全ク認許シ且ツ實際ナク適用セラル、然レモ我治罪法ハ中斷ノ語ヲ用ササルコトヲ注目スヘシ、即チ重罪又ハ輕罪ヲ犯シタル日ヨリ起算シ十年又ハ三年ノ間ニ豫審若クハ公訴ノ手續アリテ未タ裁判アラザリシ片ハ其手續ヲ爲シタル最終ノ日ヨリ起算シ滿十年又ハ三年ノ後ニアラザレハ期滿免除ヲ得スト云フニ止マリタリ(第六百三十七條及ヒ第六百三十八條參觀)故ニ中斷ノ結果ト看做シテ民法ヨリ刑法ニ其思考及ヒ結果ト與ニ中斷ノ詞ヲ移シタルハ學問上ノ説ナリトス、

(二八七一號) 是レヨリシテ裁判上一ノ巨大ナル困難ヲ來シタリ、民法ニ於ル中斷ノ適用ハ實際ナキ者トス、即チ中斷ノ各手續ヲ期滿免除ノ全ク經過シテラサル前ニ(何ントナレハ若シ全ク經過シテラ既ニ期滿免除ヲ得タル片ハ最早之ヲ破毀スルコトヲ得ザレハナリ)爲シ

タル片ハ此手續タル際限ナク繼續シ且ツ際限ナク更ニ再ヒ期滿免除ノ進行ヲ始ムルモノトス、夫レ此ノ如キ結果ハ刑法ニ於テ許容シ得ヘキ者ナルヤ

治罪法ノ正文ニ於テハ之ヲ許容セス、即チ期滿免除ノ起算點ヲ變更シ更ニ再ヒ其經過ヲ始ムルノ効力ハ重罪又ハ輕罪ヲ犯シタル日ヨリ初メノ十年又ハ三年ノ間ニ中斷ノ手續ヲ施シタルモノナルヲ要ス、故ニ此初メノ期限ヲ經過シタル後ハ豫審及ヒ公訴ノ手續ハ縱令暫時ノ間ニ屢施爲スルモ第六百三十七條ノ明文ニ從フ片ハ此効力アラサルナリ、是ヲ以テ最終ニ施シタル豫審又ハ公訴ノ手續ニ依テ期滿免除ノ期限ヲ最モ長ク延ハスコトヲ得ルハ二倍ノ期限即チ重罪ニ付テハ二十年輕罪ニ付テハ六年ナリトス此延期ハ尙未タ足ラストナスヤ、此法ハ此治罪法ノミナラス千七百九十一年ノ刑法及ヒ共和紀元第四年二月ノ刑法ノ法ナリキ(一)乃チ人ノ際限ナク期限ヲ延ハスコトヲ得ルト爲スハ民法ニ於テ起ル所ノ中斷ノ思考ヲ刑法ニ入ル、カ故ノミ、此ノ如キ結果ハ刑事期滿免除ノ基本タル思考ニ反スルニアラスヤ、且民法ニ於テハ際限ナキ中斷ノ法ヲ大ニ矯正スルノ法アルコトヲ注意スヘシ即チ刑法ニアラサル所ノ訴訟消滅是レナリ、尙且ツ此ノ如ク際限ナキ方法ヲ以テ時刻ノ効力ヲ破毀シ得ルト云フ辭柄カ簡單ナル豫審ノ手續ニ屬スルコトヲ注意スヘシ、我輩ハ此辭柄ニ對シ正文ト一致スル所ノ法理ヲ有スルカ故ニ此辭柄ヲ排斥スルニ猶豫セサルヘシ、之ニ反スル所ノ學說



ハ我邦ニ在テハ未タ信用ヲ博セスト雖モ白耳義刑法學者ノ中ニ於テ大ニ勢力ヲ得タリ(二)我輩ハ期滿免除ノ件ニ付テハ宜シク民法ヨリ刑法ニ入ル所ノ思考ニ心ヲ留ムヘシ

(一)但シ是等ノ法律ハ期滿免除ノ期限ヲ犯罪成立ノ認めラレ又ハ証セラレタル日ヨリ起算シタリ此期限ハ今ノ法ヨリ大ニ短シ即チ絶ヘテ公訴ノナカリシキハ三年若シ公訴ノ起リシキハ六年ナリキ(一八五七號及ヒ其挿註ニ舉ケタル諸條ヲ參觀スヘシ)

(二)千八百四十八年ブリュクスセル刊行ウッソ、オールベック氏著刑事期滿免除論第六十四葉以下參觀 千八百四十九年ブリュクスセル刊行リエージニ控訴院評定官クースチュリエー氏著刑事期滿免除論第十八號參觀 千八百六十一年ガン刊行ガン大學教師オース氏著刑法講義第二板第五百九十三號參觀

(二八七二號)人カ刑事期滿免除ニ適用スル所ノ中止ノ思考モ亦民法ヨリ刑法ニ入リタル數中ニアリトス、中斷ト中止トノ大ナル差異ハ中止ハ期滿免除ノ經過ヲ斷絶セス、既ニ經過シタル部分ト分離セス、起算ノ點ヲ變更セサルト是レ也、故ニ中止ハ其中止中ノ時間ヲ期滿免除ノ期限内ニ計算セサル所ノ一時ノ妨害ナリトス、而シテ其妨害ノ罷ムヤ期滿免除ハ最初ト同一ノ起算點ニテ再ヒ經過ヲ爲ス隨テ中止以前ノ時間ハ中止以後ノ時間ト加算ス、唯中止中ノ時間ヲ扣除スルニ過キス此ノ如キ思考ハ公訴權ノ期滿免除ニ許容シ得ヘキ者ナル

ヤ、

此思考タル民法ニ於テハ左ノ諺ニ基ケリ、曰ク(自ラ事ヲ行フノカナキ者ニ對シテハ期滿効ハ經過セス)ト、而シテ其期滿免除ハ或ハ債主ノ催促等ヲ爲サスシテ放擲セルヨリ引致セル義務免脱ノ推測、或ハ一般ノ安全ノ利益ノ爲メニ此放擲ニ科シタル民事上ノ一刑トナスカ故ニ此諺即チ中止ハ充分ニ其理由アリトス、然レモ刑法ニ於テハ毫モ此ノ如キナシ、故ニ強ヒテ同一視セントスル所ノ不當ヲ避ケサル可ラス、刑事ニ於テハ檢察官ノ放棄ヲ罰シ又ハ放棄ヨリ免除ノ推測ヲ引致スルノ問題ニアラスシテ時間ニ因テ生シタル犯罪消滅ノ効果ヲ受クルノ必要アリテ存ス、然ラハ則チ中止ノ如何ナル原因ヲモ茲ニ許容スルヲ得サルナリ

(二八七三號)唯此一般ノ法理アルノミナラス、我成文法ニ於テモ亦毫モ中止ノ一語タモ云ハサルナリ、然レハ中止ヲ刑法ニテ云ハントセハ更ニ發明セサルヘカラス 何人ト雖モ皆中止ハ事實上ノ妨害ノ場合、例ヘハ戰爭内亂避ク可ラサル證據物又ハ調書ノ紛失ノ場合ニ適用ス可ラサルヲ認ム、人誤テ此階級中ニ被告人ノ精神病ヲ入ル、依テ是レヨリシテ解釋區々ニ分レテ相合一セサルニ至レリ、抑精神病ハ一箇ノ事實ナリ、之レカ爲メニ公訴ヲ中止スルノ義務ハ法律ニアリ然レハ此場合ニハ有刑上ノ妨害ナクシテ法律上ノ



妨害アリトス(一七五三號以下參觀)

被告人ノ精神病ヨリ出ル妨害ハ我邦ノ學者ハ或ハ事實上ノ妨害ナリト云ヒ或ハ法律上ノ妨害ナリト云ヒテ互ニ分離スルノミナラス、頗ル困難ヲナセリ、我裁判例モ亦同シク然リトナス、學者及ヒ裁判官ノ精神タル夫論理法ノ命スカ如クナル所ノ自ラ事ヲ行フノ力ナキ者ニ對シテハ期滿免除ハ經過セスト云ヘル民法上ノ格言ノ爲メニ掣肘セラル、ヲ免ル、ヲ得サルナリ、故ニ時ニ或ハ之ヲ認可セス、又時ニ或ハ之ヲ引用セリ、且之ヲ排斥スト云フト雖モ尙此格言ニ基キテ推理ヲナセリ、而シテ刑事期滿免除ノ單一ニシテ且眞實ナル理由ヲ撰取スルコトヲ得ス、夫レ刑事期滿免除ノ理由ハ此問題ニ係ル格言ノ理由ト全ク異ナリ、又人ハ此理由ヲ唱フルト雖モ徹底貫通セスシテ其結果ニ於テハ之ヲ拒絕セリ、又最終ニ此ノ如キ者アリ、其効果ニ於テハ充分ニ一致セスシテ奇様ニモ民法ト刑法トノ思考ノ混合ヲ以テ中斷ノ効ヲ中止ノ効ニ連結セシメタリ、

(二八七四號)此迷岐ノ路ヲ脱スル單一ノ方法ハ論理法ナリトス、即チ刑事期滿免除ノ基本タル原則ヲ置キ且偏倚スルコトナク徹底貫通スル所ノ屈折スヘカラサル論理法ナリトス、凡ソ犯罪ノ日又ハ最終ノ日ヨリ以來豫審又ハ公訴ノ手續ナク、違警罪ニ就テハ裁判ナク、法律ニ於テ要スル所ノ時間經過シ、隨テ公衆ノ紀念ヲ忘失スルニヨリ社會ノ處罰ノ利益ヲ失却

シ社會ノ刑罰權ヲ消滅セシメタルキハ此結果ヲ來シタル原因ノ如何ンヲ問ハス即チ檢察官ノ懈怠ナルト義務ニ負キタルトヲ分タス又事實上若クハ法律上ノ妨害ナルニ關セス公訴權ハ既ニ已ニ成立タサルモノトス、

我輩ハ猶豫スルコトナク此解釋ヲ以テ公訴權既ニ成立テ唯其施行中ニ於テ中止セラレタル場合(被告人ノ精神病、開會中ノ代議士ノ身位)ニ適用スルノミナラス(一七五二號以下參觀)且公訴權ノ成立其物ニ於テ中止セラレタル場合(幼者ヲ略取誘拐シタル後婚姻シタル者、外國ニ於テ犯シタル重罪、姦通ノ罪及ヒ公訴カ被害者ノ告訴アルニアラサレハ起ラサル總テノ犯罪)ニモ適用スヘシ(一六七二號以下參觀)我輩ハ此公訴權ノ成立チ自ラニ於テ中止セラレタル場合ニ於テ身分滅却ノ罪又ハ昔時參事院若クハ元老院ノ允可ヲ受クルニアラサレハ起訴スルヲ得サリシ所ノ位地ニアル者ニ付テモ絶ヘテ例外ヲナサ、ルナリ(一六七號以下一六八〇號一六八三號以下參觀)又我輩ハ刑事裁判所カ豫審民事ノ問題ノ行政官長又ハ行政裁判所若クハ民事裁判所ニ於テ判決アルヲ俟ツカ爲メ中止スル所ノ義務アル者ニ付テモ亦例外ヲナサ、ルナリ(一)縱令此豫審判決ヲ俟ツカ爲メニ我輩カ曩ニ舉示シタル稀有ナル妨害ノ事件ヨリシテ竟ニ公訴權ノ消滅ヲ致スモ毫モ之レカ爲メニ躊躇スヘキ謂レナシ、何ントナレハ此消滅ハ期滿免除ニ要スル時間ノ後ニアラサレハ決シテ之レアラサレハ也、但シ



是等ノ官署ハ自ラ事務調達ノ爲メ且刑事裁判所ニ於テ其職務ヲ充タスニ付キ公訴權消滅ノ時ニ到ラサルカ爲メ久シキニ彌ラスシテ裁判スヘキハ固ヨリ其處ナリトス(二)

(一) 此例外ハ日耳曼刑法第六十九條ニ於テ左ノ如ク規定セラレタルアリ(刑事豫審ノ開始又ハ公訴カ他ノ訴訟手續ヨリ關スル豫審民事ノ問題ノ決定ニ屬スルキハ期滿免除ハ此訴訟手續ノ終結スルマテ中止スルモノトス)

(二) 反對ノ論ハ實際ニ於テ勢力アリ(千八百五十一年五月七日及ヒ千八百六十七年十二月十一日ノ大審院判決)大審院ノ千八百五十一年ノ判決ノ理由ハ刑事裁判所ハ豫審民事問題判決ノ爲メニ其期限ヲ定ムルモ無益ナルヘシ何ントナレハ此期限ヲ定ムト雖モ其問題ヲ受ケタル官署ニアリテハ毫モ限内ニ判決スヘキノ義務アルニアラサレハ也ト云フニアリ

加之、我輩ハ人ノ信スルカ如ク危險ノ大ナラサルコトヲ示サンカ爲メ注目セシムヘキ者アリ、即チ豫審ノ要用ナル手續ハ常ニ施行スルコト、又檢察官カ順ヲ追ヒテ公ケニ必要ナル被告人ノ交付ヲ求メ、呼出ノ允可ヲ求メ、豫審判決ノ急速ヲ求ムル如キ之ヲ必要ナリト信セハ固執シテ公ケニ反覆請求スルヲ得ルノ手續ニシテ、是等ノ爲メニ訴訟ノ路ニ入ルニハ被告人ヲ管轄廳ニ引致シ此管轄廳ヲシテ事件ヲ調査セシムルノ手續ヲナセハ之ヲ期滿免除ヲ中斷ス

ル豫審又ハ公訴ノ手續ト看做サ、ル可ラサルコト、又呼出ノ允可ヲ請求シ或ハ豫審民事ノ問題ニ付キ行政裁判所又ハ民事裁判所ニ於テ爲ス所ノ判決ハ刑事訴訟ノ裁判ニ避ケ難キ條件若クハ豫審民事裁判ハ刑事訴訟其物ニ連結スル者ト思考セサル可ラス、且是亦中斷ノ手續ヨリ出ルコト是ナリ、故ニ期滿免除ニ因テ公訴權ノ消滅スルニハ是等ノ管轄廳ノ活動ガ中止シ事實上此訴訟ヲ繼續セシムル何等ノ手續モアルコトナリ、而シテ最終ノ中止日ヨリ期滿免除ニ要スル所ノ時間ヲ經過シタルコトヲ想像セサル可ラス、刑事裁判所ニ於テハ訴訟消滅ナシ依テ之ニ代フルニ少ナクモ期滿免除ナル者アリ

(二八七五號) 第五ノ結果、期滿免除ハ其性質上我輩カ奧太利刑法ニ於テ觀ル如キ種類ノ制限ヲ受ケサル者トス、其制限トハ犯罪カ犯罪ヨリ生ゼル何等ノ利益ヲモ保有セサルコト、可及的損害ヲ賠償シタルコト、奧太利國管外ニ逃走セサルコト、期滿免除ニ要スル期限内ニ他ノ如何ナル重罪又ハ輕罪ヲモ犯サ、ルコト(奧太利現行刑法第二百二十九條及ヒ第五百三十一條ニ掲クル所ニシテ千八百三年ノ法ナリ)是レ也、抑々此條件ノ完全シタルト否ラサルトハ時間ノ働ニ如何ナルコトヲナスヤ、民事ノ損害ヲ賠償シ又ハ賠償セサルコト、管外ニ逃走シタルコト、新ニ罪ヲ犯シタルコトハ時間ノ働ニ如何ナル影響チ及ホスヘキヤ、如何ニシテ新犯罪カ社會ノ既ニ遺忘シタル犯罪ニ對シ再ヒ公訴權ヲ生セシムルヤ、又如何ニシテ新犯罪ハ再ヒ犯罪ノ



紀念及ヒ証明ノ方法處罰ノ利益ヲ生セシムルヤ、或ハ期滿免除ヲ以テ特赦ノ如ク取扱ヒ得ルモノト想像スルヤ、特赦ハ之ヲ與フル者ニ於テ與フルト與ヘサルトノ自由ヲ有スルカ故ニ、之ニ此ノ如キ或ル制限ヲ附スルモ亦其理由ナキニアラス、然レモ期滿免除ニ就テハ政府又ハ立法者ハ時間ノ進行ヲ中止シ又ハナキ者トスルノ理由ヲ有スルヤ、如何我治罪法ニ於テ此ノ如キ制限ヲナサ、リシハ大ニ道理アル者トス

(一八七六號)第六ノ結果 (最終ニ)刑事期滿免除ハ社會ノ爲メニハ刑罰權ノ消滅ヲ來スニヨリ公法ノ部ニ屬スルコト是レナリ、且ツ此性質ハ公訴權ノ他ノ諸般ノ消滅ノ原因ニ就テモ亦然リトナス、而シテ人ノ特ニ刑事期滿免除ニ就テ此性質ニ注目スルハ民事期滿免除ト全ク異ナルヲ以テナリ、裁判官ハ刑事期滿免除ニ就テハ職權ヲ以テ其規則ヲ遵奉セサル可ラス、故ニ訴訟ノ如何ナル點ニ於テ之ヲ認メタルニ論ナク、即チ最終ノ點ニ於テスルモ大審院ニ於テスルモ、常ニ其効力ヲ生セサル可ラス、蓋シ社會ハ刑罰權ヲ有セサルカ故ニ宣告スヘキノ刑茲ニ存セサレハナリ、

(一八七七號)期滿免除ハ法律上ノ問題ニ係リ、訴訟手續上ノ問題ニ非ス、人或ハ民法ニ於テ義務ノ消滅ニ係ル期滿免除ヲ訴訟法ニ入シコトヲ圖ル者アルヤ、如何、蓋シ此ノ如キ者ナカルヘシ、然ラハ則チ我治罪法中刑事期滿免除ノ掲クルアルカ爲メニ決シテ誤迷ニ陷ル可ラサルナリ此眞理ヨリ出ル所ノ結果トシテ期滿免除ヲ規定シタル種々ノ法律ニ於テ其抵觸スル所ハ我輩カ既ニ第五百八十六號以下數號ニ陳述シタル所ニ從ヒ最モ犯人ニ利益アル法律ヲ適用セサル可ラス、我裁判例ハ此點ニ付キ全ク確定シタリ

(一八七八號)治罪法ハ此點ニ付キ共和紀元第四年二月ソ刑法ノ迷誤ヲ繼キ期滿免除ニ關シテ私訴權ノ命脈ヲ公訴權ノ命脈ニ配合セシメタリ、即チ期滿免除ハ公訴權私訴權並ニ同一ナリトス

此規定ハ羅馬法學者ノ論定ト舊時ノ歐洲刑法學者ノ多數及ヒ我邦ノ舊裁判所ノ多數ノ論定トニ反シ、而シテ最終ニ巴黎ノ舊裁判所ノ實行上ニ勝ヲ得タル所ノ學說ノ遺傳ナリトス、其之ヲ配合シ過贊シタル者ノ精神ニ勢力ヲ及ホシタルノ思考ハ犯罪ヨリ生スル損害賠償ノ訴權ハ犯罪ニ附屬スルモノナリ、故ニ其一ニシテ消滅シタルキハ(從ハ主ニ屬ス)(一)ト云ヘル法律上ノ格言ニ從ヒ其他モ亦消滅スト云フニアリ、若シ此格言ヲ其諸般ノ結果ニ推及セント欲スルキハ此格言ノ人ヲ誤ル幾何クナルヤハ既ニ人ノ知ル所ニシテ此格言ニ因テ適當ナル論決ヲ看ルハ實ニ難シトス、又最モ價值ヲ有スル注目スヘキ一理由ハ一タヒ公訴權ノ期滿免除トナリタル後、尙民事原告人ニ許スニ損害賠償ノ訴權ヲ以テセハ社會ハ既ニ犯罪ヲ罰スルノ勢力ヲ有セサルニ再ヒ重罪輕罪又ハ違警罪ノ紀念ヲ起サシメ且裁判上其成立ヲ証



明セシメ而シテ尙之ヲ罰セサルノ結果ヲ來スヲ許スニ至ルト云フニアリ、然レモ此理由モ亦自ラ其缺所ナクンハアラス、此理由ニ依ルモ刑事期滿免除ガ私訴權ノ消滅ニ適用スヘキ諸般ノ場合ヲ明カニスルコトヲ得ス、人或ハ左ノ説ヲ爲シ以テ此理由ヲ修飾セントナセリ、曰ク、犯者ニ於テ公訴ノ起ラサルカ爲メ刑事裁判ニ免レタルト、處刑ノ宣告後更ニ期滿免除ノ期限ノ經過シタルトヲ問ハス、刑事期滿免除ノ期限ノ經過シタル後ハ復タ之ヲ精査シ且ツ之ヲ搖起スヘキ辨論ヲ許スコトヲ得スト、(最終ニ)最モ近時ノ説ニ係ル一理由アリ、即チ此私訴權ノ消滅期限ヲ刑事期滿免除ノ期限ト同一ニナスノ方法ニ依ルキハ被害者ハ必ス常ニ注意シテ其犯罪人ヲ捜査シ証明スルコトヲ怠ラサルヘシ、是レ其犯罪人ヲ罰スルニ於テ最モ黽勉ナル補助人ヲ與フルノ利益アリト云フニアリ、之ヲ要スルニ我輩ハ此數理由中ニ於テ確實ニシテ唯一箇ノミニテ足ル所ノ善良ナル道理ヲ視サルナリ、是レ他ナシ元來性質上分離スヘキモノヲ結合シテ熱心ニ其理由ヲ附會スルニ過キサルヲ以テナリ

(一) ジューズ著佛蘭西刑事裁判論第一卷第六百一葉參觀

(二八七九號) 實ニ區別アル二箇ノ權利、及ヒ實ニ殊異ナル理由ニ基キタル二箇ノ期滿免除ヲ以テ此ノ如ク同一視スルニ付テハ奇怪ノ結果ヲ生スルモノトス、即チ人アリ刑法ノ規定セサル過失ニ因テ予カ家ヲ燒燬シタリト想像セン、予ハ此人ニ對シ損害賠償ノ訴訟ヲ起ス

ニ付キ三十年ノ期限ヲ有ス、然ルニ此人ハ故サラニ予カ家ニ放火シタリトセハ予ハ唯其十年ノ期限ヲ有スルノミ、又此人ハ刑法第四百五十八條ノ輕罪ノ刑ヲ受クヘキ過失ニ因テ予カ家ヲ燒燬シタリトセハ予ハ僅ニ其三年ノ期限ヲ有スルニ過キス、若シ違警罪ニ因テ生シタル損害ナルキハ一年ノ期限ニシテ且ツ此一年間ニ裁判アルヲ要ス、民事原告人が注意シテ犯罪人ヲ捜査シ証明スルコトニ黽勉ストノ理由ハ此ノ如キ期限ノ變更ニ付テハ眞ニ其理アルヲ視サルナリ、但シ我輩ハ羅馬法ヨリ傳來シ且ツ人ノ謹守スル所ノ三十年ノ長キ期限、其他之ニ類スル期限ノ存スルヲ理由トシテ之ヲ難スルニアラス、夫レ今日ニ在テハ事件モ利益モ人モ思想ノ交通モ昔時ノ如ク徐々トシテ進行セス、是レ既ニ近世社會ノ狀況ト並行セサルノ期限ナリトス、唯吾々ノ精神ハ基本ノ實ニ全ク異ナル二箇ノ期滿免除ヲ以テ同一ノ規則ニ服從セシムルコトハ満足セサル所ナリ、

我治罪法第六百二十七條及ヒ第六百四十條ハ私訴ト公訴トノ期滿免除ノ期限ノ同一ナルコト、其正文上既ニ甚タ明白ニシテ疑議ヲ容レント欲スルモ得可ラサルナリ、而シテ是レ唯被害者カ公訴ニ附帶シテ刑事裁判所ニ訴フル時ノミナラス別ニ民事裁判所ニ訴フルキト雖モ亦然リトナス、蓋シ一タビ公訴權ノ消滅シタル上ハ私訴ハ公訴ニ附帶シテ刑事裁判所ニ起スヲ得サルコトハ固ヨリ言フ俟タス、然レハ此場合ニ於テハ民事裁判所ニ訴ヘサル可ラス、然



ルニ總テ同一ノ期滿免除ノ中ニ包含シタルヲ觀レハ別ニ民事裁判所ニ訴ヘタルキト雖モ亦同一ナリトス

此公訴私訴期滿免除ノ同一ハ既ニ正文アルヲ以テ之ニ從ハサルヲ得スト雖モ此正文ノ外ニ擴充スルコトヲ得ス、而シテ之ヲ適用スルニ方リテハ此ノ如ク明白ナル區別アルニ箇ノ思考ノ間ニ彷徨スルヲ以テ實際上無數ノ困難ヲ生ス、此困難ヲ解ク所ノ重モナル思考ハ即チ私訴權ハ刑事ノ點ヨリ觀レハ其語ノ公訴權ノ語ト相連結スルニ由リ單ニ治罪法第一條ノ文辭ヨリシテ犯罪ニ原因セル損害賠償ノ訴權ノミヲ適用スヘキモノトス、是ヲ以テ其源ヲ犯罪ニ基カシメスシテ既ニ成立テタル一箇ノ權利、例ヘハ所有權ノ回復ニ於ル訴權ニ基ク訴訟ハ通常ノ期滿免除ニ從フ是レ大審院ノ定ムル原則ナリ(千八百六十七年八月二十七日ノ判決)大審院ノ判スル所ニ依レハ治罪法ノ規定シタル期滿免除ハ唯特ニ重罪輕罪又ハ違警罪ニ基ク所ノ私訴權ニノミ適用スヘク、犯罪ノ外ナル契約又ハ民法ニ基ク所ノ訴權ニハ適用ス可ラストナリ、而シテ此判決ノ件ハ委任ヲ濫用シテ受取ル可ラサル葡萄酒ヲ受取リタル代理人ニ對シ三年ノ期滿免除ハ代理ノ訴權ニ適用ス可ラスト判決シタルニアリ

棄權

和解、大赦、願下

(二八八〇號) 最終ニ講究スヘキ第三ノ思考、即チ權利拋棄ノ思考ニ就テハ、何者ト雖モ賠償ノ訴權ヲ有スル被害者ガ、其己レニ屬スル所ノ他ノ諸般ノ權利ニ就テ爲スカ如ク、無償又ハ和解ニ因テ棄權ヲ爲スコト妨クルコトナシ、公訴ヲ起スノ權力被害者ニ屬スル特別ノ場合(二六九三號以下參觀)ヲ除クノ外、棄權即チ此私益ニ關スル和解ハ毫モ刑罰權ノ成立ニ影響ヲ及ホスコトナキハ言フ俟タサルナリ、蓋シ公訴權ハ社會ニ屬スルヲ以テナリ(一) 此訴權ニ關スル規則ハ如何ナル者ナルヤヲ知ラサルヘカラス

(一) 治罪法第四條(私訴權ノ拋棄ハ公訴權ノ施行ヲ停止シ又ハ中止スルコトヲ得ス)

(二八八一號) 惡事ヲ爲シタル有罪者又ハ嫌疑者タル一定ノ人ニ對シ公訴權ノ拋棄ヲナスハ是レ則チ此人ニ對シ裁判所事務ノ活動ヲ止ムルニ外ナラス、蓋シ各人ニ許與スルニ此棄權ヲ以テシ而シテ既ニ罪惡ノ事例アリ、尙之ニ加フルニ此惡事ヲ幫助スル惡法律ノ例ヲ以テスルモノナリ、是レ夫ノ刑ニ不平等アルノミナラス、犯罪ヲ証明シ犯人ヲ搜索シ有罪ヲ申告スルノ權利ニ至ルマテ不平等ヲ爲スモノトス、刑法ノ理論ニ於テ何人ト雖モ此ノ如キ事ヲ許與スルヲ以テ理由アリトナスコトヲ得サルヘシ、故ニ社會ハ其人ノ如何ナルニ論ナク其名義ヲ以テ此ノ如キ事ヲ許與シ得ルノ權ヲ委任セス即チ法律若クハ一國ノ首長其他如何ナル官吏ニモ委任セサルナリ、何ントナレハ刑法ハ公法ニ屬シ棄權ハ私法ニ係レハナリ



我成文法ニ於テ今日行フ所ハ即チ是レナリ、吾々ハ最早夫ノ舊立君政府ノ特別赦免書(原語  
レットル、ダボリシヨン、パルチキユリエール)ヲ認メサルナリ、我輩ハ檢察官カ求刑ヲ拋棄シタ  
リト云フハ檢察官ヲ放免又ハ免訴ノ論決ヲナシタリト云フニ同シトナス、但シ檢察官ハ公  
訴權ヲ施行スルコトヲ委任セラレテ之ヲ拋棄スルコトヲ委任セラレス、是ヲ以テ其論告ノ如何  
ニ拘ハラス必ス其裁判ヲ與ヘサル可ラス、而シテ處刑ノ裁判ヲ與フルヲ得ヘキナリ(一)

(二) 曩ニ擧示シタル(一六七三號挿註)千八百七十三年ノ埃太利刑法ハ此ノ如クナラス此  
刑法(第四十八條及ヒ第四十九條)ノ文辭ニ依レハ檢察官ハ公訴權ヲ拋棄スルコトヲ得但シ  
此場合ニ於テ民事原告人ハ更ニ公訴權ヲ行フコトヲ得而シテ檢察官ハ其施行ヲ監視シ或ハ  
自ラ再ヒ公訴ヲ爲スコトヲ得

(二八八二號)然レモ初メニ二箇ノ行政官署ノ爲メニ此例外ヲ設ケラレタリ、即チ國庫ニ歸  
スヘキ租税ノ徵收ヲ確實ニスル爲メ、唯政府ノ會計上ノ利益ノミニ關スル目的ニ因テ罰ス  
ヘキ所爲トナシタル事件ニ對シ關接税ト海關税トノ兩官署ノ爲メニ此例外ヲ設ケラレタル  
ナリ、近來此例外ハ之レト同一ノ位地ニアラサルモ少ナクモ類似ノ位地ニ於ル他ノ官署ニ  
對シテ擴充セラレタリ、而シテ此例外タル關接税及ヒ海關税ノ官署ニ適用スルニ付キ法律  
ノ明文アルニアラス、唯決議又ハ命令(一)ニ載ズル所ニシテ實際行政上及ヒ裁判所ノ認可シ

タル所ナリトス、又此例外ハ關接税及ヒ海關税ノ官署カ公訴ヲ起スノ權ヲ委任セラレタル  
所ノ會計上ノ利益ニ關スル輕罪又ハ違警罪ニ付キ和解ヲ爲スノ權利ヲ認メタリ、但シ關接  
税ノ官署ハ沒収又ハ罰金ナル財産上ノ刑ノ場合ニノミ和解ヲ爲スノ權利アリトナス、是レ  
皆人ノ異議ヲ容レサル所ナリ、海關税ノ官署ニ付テハ決議ノ正文ヨリシテ禁錮又ハ其他ノ  
体刑ノ場合ニモ之ヲ擴充スルノ口實ヲ生セシメタリ

(二) 關接税ノ官署ニ就テハ收税支配ノ組織ニ關スル共和紀元第十二年七月五日ノ決議第  
二十三條及ヒ關接税支配規則ニ關スル千八百二十一年一月三日ノ命令第十條 海關税ノ  
官署ニ就テハ共和紀元第十年十二月十四日ノ決議及ヒ千八百十六年十一月二十七日ノ命  
令並ニ海關税組織ニ關スル千八百二十二年一月三十日ノ命令第十條

其後和解ノ權利ハ又左ノ二箇ノ官署ニ屬セリ、千八百五十六年六月四日七月六日ノ法ニ因  
テ其第九條ニ記セル犯罪ニ關シ驛遞官署(一)森林法ノ種々ノ規定ヲ變更シタル千八百五十  
九年六月十八日十一月十九日ノ法ニ因テ森林官署ニ屬シタリ、該法ノ改正第百五十九條ノ  
正文ニ依レハ森林事件ニ於ケル輕罪及ヒ違警罪ノ公訴ニ付キ和解ヲ爲スノ權ハ、棄權ノ點  
ヨリ之ヲ視レハ、財産上ノ刑ト其他ノ刑トヲ問ハズ、一般ノ刑ノ場合ニ擴充セラル、者トス  
(二) 森林官署カ訴訟費用、手數、淹滯、其他ノ不都合ナクシテ宥恕シ得ヘキ輕罪又ハ違警罪ヲ



簡易ニ處分スルヲ許サレタル權能ヲ使用シタルノ數ハ漸次増加シタリ、即チ千八百六十年ニ於テハ一萬三千二百二十六ニシテ、千八百六十九年ニ於テハ二萬七千三百八十三トナリタリ(六五六號參觀)

(一) 有價物ノ郵便遞送ニ關スル千八百五十九年六月四日七月六日ノ法第九條(左ニ記載シタル者ハ五十フランク以上五百フランク以下ノ罰金ニ處ス

第一、書翰中ニ金銀、寶石類其他貴重ナル物件ヲ封入シタルキ

第二、有價物ノ封入ヲ記載セス、又ハ本法第一條及ヒ第三條ニ記載シタル程式ニ從ハサル書翰ニ本法第一條ニ列記シタル有價物ヲ封入シタルキ、

公訴權ハ郵便官署ノ請求ニ因テ施行セラルヘシ、但シ該官署ハ和解ヲ爲スノ權ヲ有ス(然レモ此規則ハ最モ重キ輕罪ノ場合、即チ本法第五條ニ記載シタル禁錮及ヒ罰金ヲ以テ罰スヘキ詐僞ノ申告ニ就テハ之ヲ適用セス

(二) 森林法第五十九條(千八百五十九年六月十八日十一月十九日ノ法ニ因テ追加セラレタル末項)(森林官署ハ森林取扱法ノ管轄スル森林ニ於テ犯シタル森林件ノ輕罪及ヒ違警罪ノ公訴ニ付キ本案裁判前和解ヲ爲スヲ得、本案裁判ノ後ハ財産上ノ刑及ヒ賠償ノ場合ニアラサレハ和解ヲ爲スヲ得ス)

(二八八三號) 公訴權ノ拋棄ハ人ニ對スル恩惠トシテ許與スルヲ得スト雖モ、或ル事件ニ對シ其事件ノ如何ヲ問ハス又此事件ニ付キ犯人ノ數ノ多少ヲ論セス社會ノ利益上ヨリシテ棄權ヲ勸誘シ又ハ之ヲ要求スルコトナキニアラス、此場合ニ於ケル此處分ハ人ニ對スルニテラヌシテ事件其物ニ對スルナリ、故ニ法學者ハ此處分ハ人ニ對スルノ性質ヲ有セスシテ物ニ對スルノ性質ヲ有スト云ヘリ、此處分ノ正當ナル道理ハ社會刑罰權ノ基礎ヨリ生ス、實ニ犯罪事件ノ本人ハ如何ナル者ナルモ社會公衆ノ利益ハ此事件ノ處刑ヲ要求セシヨリハ、反テ其事件ノ忘却セラレンコトヲ望ミ、且ツ裁判手續ノ之ニ繼續セサランコトヲ欲スルノ情狀及ヒ事項ノ在ル有ルニ於テハ、社會刑罰權ノ基礎タルニ原因ノ一ノ虧缺スルノミナラス、尙且ツ既ニ處刑セラレタル犯人ヲ宥免スルノ時機生スルコトアルヘシ、是レ刑罰權茲ニ消滅スルナリ、革命ノ國事重罪輕罪事件又ハ世運ノ變遷、黨派ノ和合、或ハ鎮靜ノ場合ニ於テ屢々此處分ヲ看ルコトアリ、又此場合ニ比スレハ少ナシト雖モ情狀ニヨリ政府ノ會計上ノ利益ニノミ關スル所ノ輕罪違警罪又ハ全國並ビニ地方警察上ノ命令若クハ禁止ニノミ關スル所ノ輕罪違警罪又ハ或ル集合體ノ懲戒處分、特ニ軍人ノ懲戒處分ニノミ關スル所ノ輕罪違警罪ニ付キ此處分ヲ施スコトアリ

(二八八四號) 希臘人ハ大赦ニ關スル許多ノ實例并ヒニ其思想ヲ恰好ニ發揮スル所ノ一語



即チ「アムニステイ」(遺忘ニ置ク)ノ語ヲ吾人ニ傳ヘタリ、又羅馬人ハ此語ニ比スレテ不適當ニシテ且ツ他ノ多クノ場合ニ適用シタル一語ヲ有シタリキ「アボリション」ノ語即チ是レナリ、我舊王政府ノ時ニ於テ所謂「レットル」ド、マボリションセテラール」ノ書面ニ用サレタル此羅馬語ヨリ傳來シタルモノナリ、

譯者曰ク「レットル」トハ昔狀ヲ云ヒ「アボリション」トハ廢止ヲ云ヒ「セテラール」トハ一般ニ云フ、故ニ「レットル」ド、アボリションセテラール」トハ一般ノ赦狀ヲ云フナリ、

大赦(アムニステイ)ハ其事件ニ有スル所ノ諸般ノ刑事上ノ結果ニ關シテハ、一般ノ官署ニ對スル其遺忘センコトヲ命スル者トス、大赦ハ其事件ヲ廢止スト云ヒ又ハ取消スト云フハ不適當ナリ、凡ソ如何ナル人ト雖モ決シテ既ニアリタル事件ヲ廢止セ又ハ取消スル威力ヲ有スル者アラサルナリ、大赦ハ人ノ紀念ニモ尙且ツ其遺忘センコトヲ命令スルヲ得ス、何ントナレハ縱令命令スルモ素ヨリ其効能アラサレハナリ、唯大赦ハ人民ニ對シテハ社會ノ遺忘シタルモノヲ以テ亦同シク遺忘センコトヲ望ム、即チ其事件ノ生シメ又ハ生スルノ機會ヲ與ヘ各ル所ノ警戒心、怨恨、忿怒、憤激ヲ忘失センコトヲ勸誘スルノミ、但シ大赦ヲ爲スト雖モ損害賠償ニ付キ民事ノ訴權及ヒ是レヨリ生スル諸般ノ民事上ノ權利ハ依然トシテ存スルナリ、

大赦ハ事件ニ適用シ人ニ適用セス、是ヲ以テ其人ハ本國人ナルト外國人ナルトヲ問ハズ又

本國人ノ身分ヲ失ヒ放逐セラレタル者ナルニ關セス、皆之レカ區別ヲナスコトナシ、是レ大赦ハ事件ヲ遺忘スルニアリ、故ニ之ニ關係スル人ノ如何ヲ論スルコトナキナリ、

然レモ政府ハ時ニ或ハ例外ヲ以テ人ニ對シ大赦ヲ布告スルコトアリ、此例外ハ大赦ノ固有ノ性質ニ反スルモノニシテ決シテ善良ナリトシテ允認セラレサルナリ、是レ實ニ人心ヲ満足セスト雖モ然レモ人定法律ノ威權ハ爭フ可ラス、蓋シ情狀ニ從ヒ斟酌スヘキ行政上ノ一處置ナリトス、

(三八八四號)ニ社會ハ其名ヲ以テ大赦ヲ命令スルノ威權ヲ何人ニ任スヘキヤ、此解釋ハ各國ノ政事上ノ組織ニ從ツテ各異ナルモノトス、我邦ニ於テ大赦ノ權ハ昔時ハ立法ノ全權ヲ有セル所ノ國王ノ施行セリ、其後中間法ノ時代ニハ代議院之ヲ施行セリ、千八百十四年及ヒ千八百三十年ノ憲法ニアリテハ其正文上唯國王ニ特赦ノ權ヲ附シタルノミナルヲ以テ大赦ノ權ハ何人ニ屬スルニ至リテハ議論一定セザリキ、千八百五十二年ノ憲法第七條ハ再セ同ノ不明瞭ヲ生セシメタリシカ竟ニ千八百五十二年十二月二十五日ノ帝國官制ニヨリテ其困難ヲ排除シ明カニ大赦ヲ與フルノ權ヲ帝ニ屬シ、メタリ、方今千八百七十六年六月十七日ノ法ニヨリ特赦ノ權ヲ共和政府ノ大統領ニ屬シ、大赦ハ法律ニ依ルニアラサレハ之ヲ與フルヲ得サルコトヲ明言シタリ(一)



(一) 特赦ノ施行及ヒ大赦ニ關スル千八百七十一年六月十七日ノ法第一條ニ曰ク

(大赦ハ法律ニ依ルニアラサレハ之ヲ與フルコトヲ得ス)

(一八八五號) 姦通ノ公訴ニ於テハ常ニ夫婦ノ間ニ私和ヲ爲スコトヲ得、而シテ告訴人ノ願下  
アルキハ其告訴ニヨリ既ニ公訴ノ起リタルキ若クハ其施行ノ始マリタルキト雖モ、訴訟ヲ  
停止シ訴權ヲ消滅ス、是レ專ラ親屬ノ利益及ヒ之レカ爲メ互ニ反目セル夫婦ノ生活上ノ利  
益ヲ之ニ管スル性質ニ適合スルモノトス、此方法ハ婦ニ對シテモ亦此夫ニ於ルト同一ニモ  
サル可ラス(一六九四號參觀我法律ハ此點ニ付キ夫又ハ婦ニ就テモ一ノ規定スル所ナシ、但  
シ我刑法第三百三十七條ニ姦通罪ノ爲メ婦ノ處刑セラレタル後ニ於テ尙ホ夫ハ再ヒ其婦  
ヲ娶ルコトヲ諾シ而シテ此處刑ヲ停止スルノ權ヲ與フルキ理由トシテ我學者ノ說ハ我裁判例  
ト同一ニシテ推理ノ法ニ依リ確定裁判前即チ訴訟中ニ夫ニ許シタル告訴願下ハ以テ訴訟ヲ  
終結シ公訴權ヲ消滅スト決定シヨリ、此決定ハ我輩カ曩ニ述ヘタル所ノ道理(一六九五號及  
七一六九九號參觀)ニ依リ大審院ニ於テ千八百七十二一年六月八日ニ與ヘタル判決ノ如ク姦  
夫ニ對シテモ亦自ラ同一ナリトス、但シ此決定ハ婦ノ願下ノ場合ニ擴充セラレズ、何トナ  
レハ第三百三十七條ハ特ニ唯夫ノミニ付キ規定シタルハナリ、訴訟中夫ノ死去シタルキハ  
如何トイフニ若シ夫ノ繼續セテ生活セシナラハ或ハ私和スルコトナキニアラサリシナラント

云フノ理由ヨリシテ右ト同一ノ結果ヲ之ニ附セントスルノ說アリ、此說ハ猶豫ナク排斥セ  
ラル可ラス、實ニ公訴權ノ一タヒ生シタル上ハ之ヲ消滅シ得ルハ想像上ノ事項ノ上ニアラ  
ズシテ証明セラレタル私和及ヒ願下ノ事實ノ上ニアリトス(千八百六十三年六月六日ノ大  
審院ノ判決ハ此意義ニ依リタリ)

(一八八六號) 我輩カ夫ノ願下ニ付キ述ヘタル所ハ姦通罪ノ公訴ニ於テ施行スル所ノ奇様ナ  
ル原因ト我成文法ニアリテ刑法第三百三十七條ヨリ來ル理由トニ基クモノナルヲ以テ特ニ  
嚴格ニ此場合ニノミ適用スヘキモノトス、我輩ハ法律ヲ以テ特ニ命令スルニアラサルヨリ  
ハ右ノ解釋ヲ以テ有夫姦罪ト同ク公訴權ノ成立ヲ被害者ノ告訴ニ屬スル所ノ他ノ諸般ノ輕  
罪(一七〇〇號以下參觀)ニ擴充スルコトヲ肯ンセス、夫レ此被害者ハ告訴ヲナサスシテ公訴權  
成立ノ條件ヲシテ其効ヲ生セシムルコトヲ妨クルノ自由アリ、又嘗テ爲シタル和解若クハ私  
和ノ事實ヲ以テ告訴ヲ受理ス可ラサルモノトナスコトモ亦之レアリ(一七〇七號一七一六號  
一七四七號參觀)ト雖モ、一タヒ法ニ依テ告訴アリタルキハ公訴權即チ茲ニ生ス、是レ未必條  
件ノ附加セル權利ニシテ今ヤ條件ノ完成ニヨリ確定物トナリタル一權利ナリ、而シテ此權  
利ハ社會ニ屬ス、既ニ然リ復タ告訴人ノ精神若クハ意思ニ浮ヒ出ル所ノ無常ノ變遷ヲ想像  
スルノ要アラサルナリ、我輩ハ今被害者ノ私和和解又ハ願下ヲ爲シタルハ熟慮決定シタルモ



クニテ其理由タル甚ク嚴正ナリト想像セシ、然レモ是レ尙ホ關係人中ノコニテ法律ヲ特ニ命スルアルニアラサルヨリハ未タ以テ社會ノ權利ヲ破毀スルノ勢力アラサルモノトス

(二)但シ我輩ハ曩ニ佛蘭西ト英吉利トノ間ノ海魚漁獲ニ關スル法ニ於テ全ク此特別ナル例外規定ノ一ヲ擧ケ而シテ其例外ノ理由ヲ指示シタリキ(一七四〇號挿註參觀)

(三)千八百七十三年ノ煥太利法典ノ如ク或ル犯罪ニ付キ一己人ノ求刑者ヲ許ス所ノ刑事訴訟ノ方法ニ於テハ之ニ異ナリトス

(一八八七號)我輩ハ護送者又ハ看守者ノ懈怠ニ因テ囚徒ヲ逃走セシタル罪ニ係ル刑法第二百四十七條ニ於テ(一七六六號參觀)其惡結果ノ賠償セラレタリト云フ理由ヨリテ法律自身ガ爲ス所ノ公訴權拋棄ノ一種類アルヲ看ル、實ニ此條ニ規定セル期限及ヒ條件ニ於テ逃走ノ囚徒カ逮捕セラレ又ハ自訴シタルヨリカ懈怠ヲ被告者タル護送者又ハ看守者ニ對スル裁判ノ前ニアルキハ其公訴權ハ消滅スルモノトス、故ニ公訴ヲ受ケタル裁判所ハ其事實ノ証明セラレタルキハ復タ訴訟ノ繼續スヘキモノニアラサルコトヲ判決セサル可ラス、又未ダ公訴ノ起ラザリシキハ公訴ヲ起ス可ラス(第二百四十七條ノ正文ノアル所ノ挿註ニ共ニ二六五三號ヲ參觀セヨ)

(二八八八號)之ヲ要スルニ期滿免除ヲ除クノ外、公訴權私訴權ノ成立ハ各獨立ニシテ相拘

ル所ナキモノトス即チ一箇ハ存在シテ繼續スルキナリトモ一箇ハ消滅シ得ヘキナリトス

第二節 刑事執行權又ハ民事執行權ノ消滅

(二八八九號)處罰ノ結果ナル執行權ニ關シ講究スヘキモノハ公訴權ノ消滅ニ關スル下同ノ事項、即チ我輩カ訴權ニ關シ其效果ヲ陳述シ來リタル所ノ死去、時間、棄權ノ三者ナリトス

(二八九〇號)講究ノ初メニ當リ、既ニ立テタル區別ニ從ヒ有形的ノ執行ニ因テ始メテ其効ヲ生スル所ノ刑ト、處罰ノ確定スルヤ否ヤ唯法律ノ單獨ノ威力ノミニ因テ直チニ其効ヲ生スル所ノ刑トノ二階級トナサル可ラス、而シテ第一ノ階級中ニハ一般ノ体刑及ヒ我輩カ示シタル他ノ刑アリ、第二ノ階級中ニハ重モニ權利ノ失墜ヨリ出ル所ノ刑アリトス(二七四七號參觀)我輩ハ此區別ニ則トリ刑事處罰ニ關スル所ノ講究ヲナサル可ラス

執行ノ思考、即チ裁判ノ效果ヲ生セシムルコトハ、其最モ廣濶ノ意義ニ取ルルハ一般ノ刑ニ該當スルモノトス、然レモ施爲スヘキ執行權即チ處罰ヲシテ其効ヲ生セシムル爲メニ施行スルキ有形的ノ所爲ナル最モ狹隘ノ意義ニ取ルルハ、第一ノ階級ノ刑ニテラカレハ該當地ナシモノトス、而シテ是レ、三箇ノ事項即チ死去、時間、棄權ハ此二階級ノ何レニ關シテモ同様ニ論去スヘシ

被刑關ノ死去



(二八九一號) 被刑者ノ死去ハ以テ諸般ノ体刑ヲ終結セシム、又被刑者ノ身分又ハ法律上ノ能力ニ關スル權利ヲ剝奪スルノ刑ニ付テモ亦議論ノ生スルコトナシ、但シ財産ニ關スル刑(沒收又ハ罰金)ノ効果ハ存在シ相續人ニ對シテ其執行ヲ爲スモノトス、其理由ハ沒收罰金ノ刑ノ効果ハ其處罰ノ確定シタル時ニ於テ自然ニ生スルヲ以テ被刑者ノ生存中ヨリ既ニ已ニ存在スト云フニアリ、乃チ此時ヨリシテ政府ハ沒收シタル物件ノ所有者トナリ科シタル罰金ノ債主トナル(一六二七號參觀)餘ス所ノ手續ハ唯被刑者ノ財産ニ對シ之カ引渡ヲ得ルガ爲メ、又ハ償却ヲ得ルカ爲メノ一手續ニ過キサルノミ、民事執行權ニ關シテハ被刑者ノ死去ニ因テ妨害セラル、コトナキハ固ヨリ言フ俟タスシテ明カナリ、何トナレハ民事訴權ノ施行ハ被刑者ノ相續人ニ對シテ尙之ヲ爲スコトヲ得ルモノナレハナリ(治罪法第二條參觀)

時間ノ效

期滿免除

(二八九二號) 回復ス可ラサルモノトナリタル處罰、隨テ執行スヘキモノトナリタル處罰ノ後、刑ノ執行アルコトナクシテ經過シタル時間ハ、法律上ノ辭トシテ採用セラレタル刑之期滿免除ト名クル所ノ期滿免除ヲ生スルモノトス、此熟語ハ法律ノ正文及ヒ一般ノ慣用ニ於テ認メラレタリト雖モ、本是レ唯語辭ヲ簡短ニスルカ爲メニノミ出タルモノニシテ之ヲ明瞭

ニ法律上ノ完全ナル思考ニ適合セシメ意義ト相適セシムルハ甚タ困難ナルヲ以テ、此熟語ノ爲メニ其意義ヲ誤ラレサランコトヲ要ス、刑法上ノ期滿效トハ免除ノ期滿效ニ外ナラサルコトヲ忘ルヘカラス、又免除ノ期滿效ハ或ル一權利ノ消滅ノ外ハ一モ他ノ效果ヲ有セサルコトヲ忘ル可ラス、夫レ必要ノ時間中施行セラレサルニ依リ消滅スルモノハ刑事ノ執行權ナリ、是レ即チ刑之期滿免除ト名クル所ノ者ノ真正ナル意義ナリトス、人或ハ之ヲ明カニセサルヨリ虛偽ニシテ且ツ不確實ナル論決ノ中ニ迷フコトアリ

(二八九三號) 此期滿免除ノ理由ハ惡事ノ紀念及ヒ處罰ノ紀念カ犯罪必罰ノ示例ノ必要ヲ消滅セシメタルノ時ニ至リテ既ニ遲延シタル刑ノ執行ヲ爲スハ社會ノ利益アラサルニ由ルノミ、其之ヲ証明スルハ社會刑罰權ノ基礎ニ基クモノトス(一八五三號參觀) 刑之期滿免除ノ意義ハ右ノ如ク適切ニ論定セラレ、而シテ其眞實ノ基本タル理由此ノ如ク明認セラレタル上ハ、之レカ一般ノ規則ハ左ノ結果ニ因テ生スル者トス

(二八九四號) 第一ノ結果、必要ノ時間中施行セラレサルニヨリ消滅スル所ノ權利ハ執行權ナルヲ以テ、身分又ハ能力ニ關スル權利ノ失墜ノ如キ有形上ノ執行ヲ以テ効果ヲ生セシムルノ必要ナク被刑者ガ法律ノ威力ト回復ス可ラサルモノトナリタル裁判ノ單獨ノ事實トニ因テ直チニ蒙ル刑ニアリテハ此期滿免除ヲ受クルコトヲ得ス、是レ人カ此種ノ刑ハ不得期



満免除(アンプレスキリアチーブル)ナリト云ヒテ説明スル所ノモノナリ。是ヲ以テ若シ事實  
 上被刑者カ之ヲ免レタリト想像スルモ毫モ其益ナシ、例ヘハ剝奪公權ヲ受ケタル者アリ、或  
 ル處ニ居住シ而シテ遂ニ其處刑セラレタルトテ隱スヲ得テ其處刑ノ爲メニ失ヒタル各權  
 利ヲ施行スヘキ機會毎ニ内密ニ之ヲ施行シテ二十年又ハ其時間ノ如何ニ問ハズ完全  
 ナル權利ノ中ニ生活シタリトスルモ是レ期滿免除ヲ得タルニアラサルナリ、茲ニ貴重ナル  
 一理由アリテ借用シタル身分ヲ有セル時間ノ如何ニ長シト雖モ其失ヒタル權利ヲ回復スル  
 ヲ妨ク、即チ其理由ハ此場合ニ於テ被刑者カ免除ノ期滿效ヲ主張スルヲ得サルト是レナ  
 ヲ、何ントナレハ剝奪公權ヲ裁判カ回復ス可ラサルモノトナルヤ即チ直チニ其刑ヲ蒙ル  
 ハナリ、然レハ被刑者ハ所得ノ期滿效ヲ主張セン歟、人ノ身分ナル者ハ期滿效ニ因テ得ル  
 ナク又失フコトナキハ原則ナリトス、是故ニ民法ニ於テ刑之期滿免除トナリタル者ノ准死ノ  
 消滅セサルコトヲ明カニ規定シタルナリ(第三十二條)然レモ一般ノ純理的ノ原則ニ反シ監視  
 六期滿免除ヲ得ヘシト主張スル者アリシカ、千八百七十四年ノ法ハ明カニ監視六期滿免除  
 ヲ得可ラサルコトヲ規定シ以テ之レカ困難ヲ免除シタリ、但シ此法ハ諸般ノ無期ノ監視ヲ并  
 ラシメシカ爲メニ無期刑ノ期滿免除ノ場合ニ於テ監視ノ期限ヲ二十年ニ制限シタリ(第四  
 十九條參觀)

罰金及ヒ特別沒收ハ其債主權ノ發生又ハ所有權ノ移轉ニ關スル法律上ノ効果ハ確定裁判ノ  
 一事實ニ因テ無形ノニ生シ、是時ヨリシテ財産ニ係ル所ノ刑ナリトス、然レモ及シヨリシ  
 テ罰金ノ徵取又ハ沒收物ノ所持ヲナシカ爲メニ強制ノ有形的ナル執行ニテ權利ヲ生ス  
 而シテ元來財産ニ及フ所ノ處罰ノ權利ナレモ其原因ノ刑事ヨリ出ルカ爲メニ刑事期滿免除  
 ノ法ニ從ヒ民事期滿免除ノ法ニ從ハサルナリ  
 (二八九五號)第二ノ結果、此節ニ論スル紀念ハ現ニアリタル訴訟ト處刑ノ爲メ成ル所ノ書  
 類トニヨリ最モ永遠ニ繼續スヘキヲ以テ此期滿免除ノ時間ハ公訴權ノ期滿免除ノ時間ヨリ  
 永カラサル可ラス  
 我治罪法ハ十ヲ以テ算定スル方法ノ慣習ヨリ出タル一例外ヲ除クノ外、刑之期滿免除ノ時  
 間ヲ公訴ノ期滿免除ノ時間ヨリ一倍長ク規定シタリ、即チ重罪輕罪違警罪ニ因テ二十年、五  
 年、二年ト爲セリ(一)  
 (一)治罪法第六百三十五條(重罪事件ニ於テ爲シタル上等又ハ下等裁判所シ裁判書ニ載セ  
 タル刑ハ其裁判書ノ日附ヨリ起算シ滿二十年ヲ以テ期滿免除ニヨリ消滅スルコトス、  
 然レモ刑ヲ言渡サレタル者ハ其重罪ノ爲メ身体又ハ財産ニ害ヲ受テタル者若クハ其者  
 ノ直係ノ相續人ノ居ル所ノ州内ニ居住スルコトヲ得ス)



政府ハ刑ヲ言渡シタル者ニ對シ其住所ノ地ヲ指定スルコトヲ得可シ

第六百三十六條(輕罪事件ニ於テ爲シタル上等又ハ下等裁判所ノ裁判書ニ載セタル刑ハ其終審ニテ爲シタル裁判書ノ日附ヨリ起算シ滿五年ヲ以テ期滿免除ニ依リ消滅スルモノトス、又始審裁判所ヨリ宣告シタル刑ニ關シテハ控訴ノ方法ヲ以テ駁撃スルコトヲ得サルニ至リシ日ヨリ起算シ滿五年ヲ以テ期滿免除ニ依リ消滅スルモノトス)

第六百三十九條(違警罪ニ付キ爲シタル裁判書ニ載セタル刑ハ終審ニ於ル上等又ハ下等裁判所ノ裁判ニ依リ宣告シタル刑ニ付テハ其裁判ノ日ヨリ起算シ滿二年ノ後ニ期滿免除ニ依リ消滅スルモノトス、又始審裁判所ヨリ宣告シタル刑ニ關シテハ控訴ノ方法ヲ以テ駁撃スルコトヲ得サルニ至リシ日ヨリ起算シ滿二年ノ後ニ期滿免除ニ依リ消滅スルモノトス)

(二八九六號)茲ニ生スル期滿免除ノ問題ハ、刑ナルニ由リ、又最モ確的ニ云ヘハ、期滿免除ニ依リ消滅スルモノハ刑ヲ執行スルノ權利ナルニ由リ、論理法ニ於テハ期滿免除ノ時間ヲ定ムルカ爲メニ基礎トナル所ノ者ハ執行ノ爲メニ生スル所ノ刑、即チ裁判ニ因テ成リタル所ノ刑ナルヲ欲スルナリ、抑、此場合ハ公訴權期滿免除ノ場合ニ異ナリ、裁判書ニ載セラレタル刑ノ輕重ニ應シ社會ノ執行權利及ヒ其利益モ亦同一ノ輕重ナラサルヘカラス、一ハ他ノ一

ヲ超過スルコトヲ得サルヤ明カナリ、是ヲ以テ我輩ハ今此場合ニ於テハ嘗テ公訴權ニ付キ第千八百五十六號ニ爲シタル所ノ區別ヲナサ、ルナリ、刑ノ減輕ヲ定メタル理由ノ如何ニ關セズ、即チ純粹ノ事實ノ有罪ノ度ニ係ルモ(犯罪構造ノ元素ノ變更加重情狀ノ拋棄宥減輕ノ適用)單ニ各人ニ屬スル有罪ノ度ニ係ルモ(酌量減輕ノ適用)我輩ハ之ヲ問ハズ、唯宣告セラレタル刑カ重罪ノ數中ニアルキハ二十年ノ期滿免除ヲ適用シ、若シ輕罪ノ數中ニアルキハ五年ノ期滿免除ヲ適用シ若シ其刑ノ違警罪タルニ過キサレキハ二年ノ期滿免除ヲ適用スヘシ、刑ノ輕重ニヨリ爲シタル此階級中ニ一般ノ刑ニ共通スヘキ刑又ハ共通ノ處分ナル罰金、特別沒收、榜示公告、新聞廣告ヲ含蓄スルコトヲ得ス、法律ニ於テ違警罪ノ罰金ト輕罪ノ罰金トノ額ヲ定メタルニ重罪ト輕罪トノ場合ニ於テハ毫モ之ヲ規定セス然レモ之レカ解釋ヲナスハ總テ容易ナリトス、即チ期滿免除ノ期限ハ附加又ハ併科ノ刑ノ連結セル主刑ノ順序ニ從ヒテ計算スヘシ

我裁判例ハ一般ノ法理ニ適合スル所ノ前段ノ解釋ヲ認メス、我治罪法第六百三十五條及ヒ第六百三十六條ノ文辭ニ(重罪事件ニ於テ爲シタル上等又ハ下等裁判所ノ裁判書ニ載セタル刑云々輕罪事件ニ於テ爲シタル上等又ハ下等裁判所ノ裁判書ニ載セタル刑云々)トアルヨリシテ我裁判例ニ於テハ期滿免除ノ期限ヲ定ムヘキモノハ宣告シタル刑ニアラスシテ裁



判セラレタル事件ノ法律上ノ名稱ニアリト決定セサル可ラスト信シタリ、隨テ宥恕減輕ニ基キタル減輕又酌量減輕ニ基キタル減輕ニモ關係スルコトナシ(一八五六號參觀(一))

○(二)我輩ハ此ノ如キ法律ノ正文ヲ循守スルヲ以テ必要トナサス、我刑法ノ文辭其物ニ從ヒ重罪事件ニ於テノ刑トハ全ク我輩カ重罪ノ刑ト稱スル所ノ者ナルコト(刑法第六條第七條及ヒ第八條)及ヒ輕罪事件ニ於テノ刑トハ全ク我輩カ輕罪ノ刑ト稱スル所ノモノナルコト

(第九條)ヲ注目セシムヘシ、隨テ是ヨリシテ宣告セラレタル刑カ法律ニ指示シタル順序ニ從ツテ減下スルヤ其刑ハ即チ早既ニ重罪事件若クハ輕罪事件ニアラサルコトハ嚴明ニ刑法

ノ文辭及ヒ其列記ノ文章中ヨリ出ルモノトス、我輩ヲ以テ之ヲ觀レハ或ハ未タ全ク反對(說ヲ擊破スルコト能ハスト雖モ少クモ斯言ニ依テ以テ人カ屢大ニ此法文ニ屬セシムル如

キ深遠ノ意味ヲ有セサルコトヲ証明スルヲ得ヘシ

(二八九七號)第三ノ結果、刑之期滿免除ハ論理上、處刑ノ裁判ノ回復ス可ラサルモノトカハタズ時ヨリ開始セサルヘカラス、何トナレハ此時ヨリ始メテ執行權生ジ且時間ノ進動カ此執行權ヲ消滅スルノ運行ヲ始ムレハナリ

我治罪法ハ此ノ如ク推理ノ命スル所ノ甚ダ簡單ナル論理ノ外ニ出テ我實際ノ裁判例ヲ鑑雜ナラシメ及ヒ解釋ノ困難ニ陷イレタリ、治罪法ノ方法ハ第六百三十五條第六百三十六條及

ト第六百二十七條ニ依レハ左ノ如クナリトス終審裁判ニ就テハ(重罪事件ニ係ルト(一)輕罪事件若クハ違警罪事件ニ係ルト)ヲ問ハス(刑之期滿免除ハ其裁判書ノ日時ヨリ起算ス是ヲ以テ我法律ハ期滿免除ノ計算中ニ上告期限ノ時日ヲ算入スルヤ否ヤハ固ヨリ關スルコトナシ)而シテ其期限ハ處刑カ未タ回復スヘカラサルモノトナラサルカ故ニ終審裁判カ未タ執行スヘカラサルモノナレバ期滿免除ハ未タ其生セサル所ノ執行權ニ對シテ開始ス是レ被刑者ニアリテハ甚ダ利益アリト雖モ然レハ論理ニ適セサルモノトス、控訴ヲ爲シ得ヘキ裁判ニ就テハ(輕罪事件ニ係ルト違警罪事件ニ係ルト)ヲ問ハス(期滿免除ハ此裁判カ控訴ノ方法ヲ以テ抗擊スルヲ得サルニ至リシ日ヨリ起算ス、此場合ニ於テハ上告ニ付キ問題ノ生ズルコトナシ、何トナレハ此種ノ上告ハ許サレサルヲ以テナリ、我實際ノ裁判例ハ欠席裁判隨テ故障ヲ爲シ得ヘキ終審裁判ニ關シ又ハ上告アリタル中ノ訴訟ニ關シ採用スヘキ規則ニ付キ疑義ノ中ニアリ、實ニ治罪法ハ此場合ニ付キ一モ規定スル所ナシ、若シ單ニ正條ノ文辭ノミニ從フニハ此控訴ノ方法アルト又ハ控訴ヲ爲シタルトニ拘ハラズ期滿免除ハ常ニ終審裁判ノ日ヨリ起算スヘキモノトス、然レハ此ノ如キ論決ハ採用スヘキヤ、茲ニ區別ヲナサザルヘカラサルヤ、又ハ全ク排斥セサルヘカラサルヤ、是レ我治罪法カ唯法律ノ論理ニ因テ示シタ時期即チ處刑ノ回復ス可ラサルモノトナリ、隨テ執行權ノ生シタル所ノ期限ノ外ニ出テ



タルカ故ニ存スル所ノ困難ナリトス

所謂裁判ノ日時ヨリ起算ストノ正條ノ語ハ、若シ裁判書ニ其裁判ヲ與ヘタル時子ヲ載セタリトセハ此時子ハ期滿免除ノ起算點ナルコトヲ云ヒタルカ如シ、然レモ一方ヨリスレハ、期滿免除ハ日ニヨリテ計算スルコト又一方ヨリスレハ裁判書ニハ日子ヲ載スルコトノ規定アルニヨリ此語ハ日ヨリ起算スト云フト同シク看做サルヘカラス

(二)第六百二十五條ニ重罪事件ニ就テノ裁判ニ付キトアリ此語ハ特別ノ裁判所例ヘハ軍法會議ノ如キ者ニアラサレハ關セサル所ナリ

(二八九八號) 若シ自由ヲ剝奪スルニ係ル刑ニ處セラレタル者既ニ此刑ノ一部分ヲ受ケタル後ニ逃走シタルキハ、其殘餘ノ刑ニ對スル期滿免除ハ其逃走ノ日ヨリ開始スルモノトス、其理由ハ法律ハ此點ニ付キ明言セスト雖モ、元來、執行權ハ時子ノ進行ノ效果ノ爲ニ其施行止メラレタル瞬間ヨリ遺忘セラル、者ナレハナリ

(二八九九號)「ディエヌ、ア、クヲ(日、ソレヨリ、)、」ノ問題ハ公訴ノ期滿免除ニ就テ起リタルカ如ク刑ノ期滿免除ニ就テモ亦起ルモノトス、而シテ公訴ノ期滿免除ニ係ル論法ハ之ヲ刑ノ期滿免除ニ係ル解釋ニ適用スヘシ此適用ヤ測量家カ美麗ナル解釋ト呼フ所ノ解釋ヲ提示スヘシ、

予ハ最初ニ裁判ノ日ヨリ起算スト云ヘル單一ノ問題ヲ提出スヘシ、即チ 刑ヲ宣告スル所ノ裁判ト之ヲ免脱セシムル所ノ期滿免除トハ反對ノ意義ニ屬スルニ箇ノ勢力ナリトス、故ニ之ヲ双方ニ加算スルハ論理法ニ適モサルナリ、若シ法律カ時又ハ分ニ因リ計算スヘキモノナレハ論理上裁判ノアリタル時又ハ分ヲ此裁判ニ對スル期滿免除ノ期限内ニ算入スルコトヲ得ルヤ否ヤ、其之ヲ算入スルコトヲ得サルヤ明カナリ、然ラハ則チ法律ハ日ニヨリテ計算シタルカ故ニ裁判ノ日ハ期滿免除ノ期限内ニ算入スルコトヲ得サルナリ、予ハ次ニ被刑者カ期限内逃走シタルコトヲ想像スヘシ、刑ノ執行ハ此逃走ノ時ヨリ中止セラレ期滿免除ハ其時ヨリ開始ス、逃走ノ時ト期滿免除ヲナスノ時トハ一ハ他ノ一ヲ生セシムル同一ノ意義ニ屬スルニ箇ノカニシテ同一ノ目的ニ進ム所ノモノナリ、故ニ論理法ハ此二箇ノカノ加算セラレシコトヲ要求ス、試ミニ時又ハ分ニ因テ之ヲ計算スルモノトセヨ勢必ニ逃走ノ時又ハ分ハ期滿免除ノ期限内ニ算入スト云ハサルヲ得ス是レ即チ被刑者カ刑ノ執行ヲ逃レタル所ノ第一ノ所爲ナリ然ラハ則チ法律カ日ニ因テ計算スルモノナラハ逃走ノ日ハ必ス期滿免除ノ期限内ニ算入スヘキナリ、裁判ノ日ト之ニ對スル期滿免除トハ反對ノ意義ナリ、逃走ノ日ト之ニ對スル期滿免除トハ同一ノ意義ナリ、即チ一箇ノ論法ニシテ彼是相通スル所ノ推理法ニヨリテ此錯雜ノ問題ヲ



裁斷シ之ヲ明白カラシメ且ツ其反對ヨリシテ偶然出テタル樂ト共ニ最モ抵抗スヘカラサ  
 証明カク出タル此反對、此同一ハ測量家カ測量上ノ解釋ニ於テ遭遇セシコトヲ欲スル所  
 所謂美麗ナル解釋ナリトス、  
 我輩今此論題ヲ終ランニ臨ミ一言セシ、我輩カ此論題ニ付キ述ベタル所ニ於テハ  
 事件カ實際上ツ適用ニ於ル要ヨリハ學問上ノ原則ノ爲ニスルニアリ夫レ實際ニ  
 於テハ誰カ能ク一般ノ重罪輕罪事件ニ付キ其二十年、十年、五年ノ最終ノ日ニ公訴又ハ刑  
 執行ヲ受クヘキ不幸ノ位置ニアル者ニ對シテ時又ハ日若クハ夜ノ不確實ナル部分ヲ爭ハ  
 シトスル者アラザキ、是ヲ以テ我裁判所ノ記録中ニ於テ未タ曾テ此例ヲ見サルナリ、但々至  
 テ稀ナリト雖モ其例ノ生スルハ短期ノ特別ナル期滿免除ニ對スルハアリトス、然レト  
 雖モ我輩カ舉示シタル所ノ此論法ハ獨リ期滿免除ノ場合ニ適用スルノミニアラス、一ノ期  
 限ヲ計算スルニ付キ起算ノ點ヲナス所ノ日ハ其計算ノ内ニ算入スルキヤ否ヤヲ知ルヲ要ス  
 ル所ノ法律上ノ諸般ノ場合ニ普ク適用スルキナリ、人若シ測量學者カ測量ノ問題ヲ研究ス  
 ルニ付キ屢其量數ヲ變更スルカ如ク、問題ニ係ル事件ヲ變更スルハ測量學者ノ爲ス所ト  
 同シテ問題ニ係ル事件ノ各變更ニ就テ要スル所ノ解釋ノ同一ニ出ルヲ看ルヘシ、則チ從來  
 我輩カ述ヘタル所ノ解釋ノ總テ實際上重モナル要ヨリトス所ノモノハ此各場合ニ普ク適用

スル性質ヲ有スルニアリトス  
 (一九〇〇號) 第四ノ結果、刑ノ執行ニ在テハ單ニ刑事裁判ヲ實行スルノ問題ニ係リ、夫ノ  
 証憑ヲ搜索シ公訴ヲ提起スル等其他凡テ公訴權ノ施行ニ屬スルモノハ其問題ニアラサルヲ  
 以テ、一般ノ原則トシテ刑ノ期滿免除ヲ中斷スルノ手續ヲ見ルコトナシ、夫レ相當ノ期限内ニ  
 公衆ニ顯示スルノ必要ナルモノハ刑ノ實行其物ノ例ナリトス、若シ其期限ニシテ已ニ經過  
 シタルモノハ公衆ニ顯示スルノ必要アラサルヲ以テ茲ニ其必要ヲ消失シタルモノナリ、刑ノ  
 期滿免除ニ因テ影響セラル、所ノモノハ刑ノ執行權ナルヲ以テ此期滿免除ノ經過ヲ防遏ス  
 ルモノハ則チ唯刑ノ執行權ノ施行、即チ實際之ヲ執行スルヲ所爲アル而已、而シテ此所爲ハ  
 刑ノ期滿免除ノ未タ全ク經過シテラサル前ニ於テセサルヘカラズ、  
 我治罪法ハ此點ニ付キ一モ規定シタル所ナシ、而シテ此規定ナキハ即チ我輩カ上ニ舉ル所  
 ノ原則ヲ適用スルニ充分ノ理由アルモノトス  
 (一九〇一號) 是ヲ以テ逃走シタル死刑ノ被罰者逮捕セラレタリトセンカ、既ニ刑ヲ執行ス  
 ヘキヲ命令アラタリトセンカ、更ニ又斷頭臺ノ建立セラレタリトセンカ、其他諸般ノ處分カ  
 未タ二十年ノ經過セザル以前ニ施行セラレタリトセンカ、皆刑ノ期滿免除ヲ妨クル効益  
 アラサルモノトス、若シ二十年ノ經過セサル以前ニ死刑ノ執行アラサルキハ期滿免除ヲ得



自由ヲ剝奪スルノ一刑ニ處セラレタル者、逃走シテ搜索ノ命令アリタリトセンカ、逮捕ノ命令アリタリトセンカ、既ニ憲兵其他公方カ搜索ヲ爲シタリトセンカ、更ニ其家屋ヲ圍繞セリトセンカ、又既ニ其家屋ヲ搜索セリトセンカ、其他諸般ノ手續アリタリトセンカ、皆刑ノ期滿免除ヲ妨クルノ効益アラサルモノトス、若シ必要ナル期限ノ經過以前ニ被刑者ノ身体ヲ捕縛セサルハ刑ノ期滿免除ヲ得ヘシ、但シ我輩ノ意見ヲ以テスレハ刑事裁判ヲ執行スルノ目的ヲ以テ期限ノ經過セサル以前ニ行ヒタル捕縛ハ期滿免除ノ經過ヲ停止スルニ充分ナリトス、何トナレハ元來唯自由ヲ剝奪スルノミノ刑ニ係ルカ故ニ特ニ被刑者ノ入ルヘキ監獄、即チ徒刑場、中央獄舎、城塞、府縣監獄、其他此被刑者カ刑ヲ行フヘキ獄舎ニ拘引セラル、ヲ要セサレハナリ、

刑ノ名義ヲ以テ命セラレタル貼示、又ハ新聞掲載ノ準備整ヒタリトセンカ、即チ貼札ハ既ニ印刷セラレ、掲載スヘキ書ハ既ニ新聞社ニ送達セラレタリトセンカ、是亦期滿免除ヲ妨クルノ効益アラサルナリ、若シ必要ノ期限中ニ壁上ニ貼示セラレス、新聞紙ニ掲載セラレサルハ期滿免除ヲ得ヘシ、

(一九〇二號) 財産ニ及フノ刑ニ關シテハ唯確定裁判ノ單獨ノ効力ノミニ因テ負債自ラ創生

シ、所有權自ラ移轉シ、且確定裁判ノ後此刑ハ相續人ノ負擔ニ歸スルノ結果ヲ生スルヨリシテ、論理上、裁判執行ノ爲メニ施ス所ノ諸般ノ手續ハ單ニ民法ニ依テ支配セラレサル可ラスト決定スルノ理由アルモノトス、然レモ此手續ノ原因ノ、刑事上ヨリ出ルヲ以テ期滿免除ノ期限ニ關シテ適用スヘキモノハ刑ノ期滿免除是レナリトス(一八九四號參觀)然ラハ則チ他ノ規則ニ關シテモ亦刑ノ期滿免除ヲ適用スヘシ、是ヲ以テ罰金ノ場合ニ於テ其期滿免除ノ經過ヲ妨クルニハ其期限前ニ執行ノ一所爲、即チ辨濟、動産又ハ不動産ノ差押、民事禁錮等ヲカルヘカラス、差押又ハ民事禁錮ヲ爲ス以前ノ手續タル督促、命令其他訴訟ノ手續ハ皆期滿免除ヲ妨クルノ効アラサルモノトス、大審院ハ千八百三十五年六月十七日ノ棄却裁判ニ付キ此意義ヲ以テ判決シタリ

一九〇三號) 以上ノ諸般ノ場合ニ於テ、期滿免除ハ刑ノ實行ノ創始ニ因テ其經過ヲ停止ス、即チ刑事執行權ハ期滿免除ノ期限ノ未タ經過シ了ラサル中ニ施行セラレタルニ因テ維持セラレ、モノトス、且ツ若シ其執行ニシテ僅カニ一部分ニ止マルハ其殘餘ニ對シテハ期滿免除ノ停止セサルニハ特ニ注目セサルヘカラス、是ヲ以テ罰金及ヒ禁錮ニ處シタル場合ニ於テ唯禁錮九期滿免除ノ期限以前ニ執行セラレ而シテ罰金ハ執行セラレサリシハ罰金ニ付テハ期滿免除ヲ得ヘキモノトス、之ニ反シテ唯罰金カ期滿免除ノ期限前ニ執行セラレ禁錮



又執行セラレサシキモ亦同シ、又刑ノ名義ヲ以テ命セラレタル貼示新聞掲載ヲ付テモ亦同シ之ヲ一言スレバ刑ノ執行アリタルハ其執行アリタル部分ニ付キ期滿免除ノ進行ヲ停止シ、其殘餘ニ付テハ常ニ期滿免除ノ經過ヲ爲スモノトス

(二九〇四號) 茲ニ疑義ヲ生スヘキ錯雜ナル一問題アリ、即チ刑ノ實行ニ着手スルニ因テ期滿免除ヲ停止スル所ノ執行ノ所爲ハ夫ノ所謂ル法律上期滿免除ノ中斷ノ効力ヲ生スルヤ、辭ヲ變ヘテ之ヲ言ヘハ、此執行ノ所爲ハ既往ト將來トノ時間ヲ分離シ既往ノ時間ヲシテ總テ無効ナラシメ、更ニ起算點ヲ執行ノ所爲アリタル日ニ置キ新ニ期限ヲ創生セシムルノ結果ヲ有スルヤ、人若シ實際ヲ通視セハ斯ノ如キ問題ノ生スル場合ニハ自ラ定限アルコトヲ知ルヘシ、實ニ問題ニ係ル所ハ刑ノ執行ノ所爲其物ナリ、故ニ若シ此所爲ヲ盡了シ目的既ニ完全シタルハ刑罰ハ茲ニ施シタルモノナレハ最早右ノ點ニ付キ論スヘキコトナシ、然レバ再々進行ヲ始ムル所ノ期滿免除ニシテ此期滿免除ニ與テヘキ期限ノ問題ノ生スルニ付キ此執行ノ所爲ニシテ盡了セス、或ル方法ニテ此所爲自ラ停止シ遂ニ刑ノ一部分ノ執行ヲ行ハズルコトヲ想像セサルヘカラス、我輩ハ此場合ニ於テ二箇ノ適用ノ生スルコトヲ看ル、即チ其一ハ自由ヲ剝奪スルノ刑ニ關シ他ノ一ハ罰金ニ關スルモノトス

(二九〇五號) 自由ヲ剝奪スルニ係ルノ刑ニ付テハ、逃走シタル被刑者ヲ捕縛セラレ且ツ刑

ノ執行既ニ始マリ而シテ此刑ノ未ダ全ク盡了セサル以前ニ脱獄シタルコトヲ想像セサルヘカラス、我輩ノ意見ヲ以テスレバ此脱獄ノ日ヨリ新タニ期限ヲ起算シ、新タナル期滿免除ノ創生スルモノトス、(一八九八號參觀)但シ期滿免除ノ新起算點ヲ成ス所ノ者ハ其就捕ニ付テスシテ其脱獄ナリトス、脱獄シテ就捕ノ後受クヘキ殘餘ノ刑ニ付テモ猶ホ夫ノ一般ニ裁判宣告書ニ載スル所ノ日附ヨリ起算スルノ法ニ循ヒテ其期滿免除起算ノ點ハ裁判宣告書ニ載スル所ノ日附ニアリト云フノ論者アリ是レ一ニ第六百三十五條、第六百三十六條及ヒ第六百三十九條ノ文辭ニ拘泥スルノ弊ニ坐スルナリ、元來此數條ハ單ニ刑ノ執行ヲ逃レタル者ニ對シ規定シタルモノニシテ此逃走者捕縛ノ場合ノ爲メニ規定シタルモノニアラス、抑此論者ハ其議論ノ遂ニ如何ナル結果ヲ成スヤヲ察セス、若シ此議論ニ從ハバ、無期ノ一刑ニ處セラレタル者、例ヘハ無期徒刑ニ處セラレタル者處刑宣告ノ二十年一日後ニ逃走シタル者ハ官ハ最早之ヲ捕縛スルノ權利ヲ有セスト云ハサル可ラサルノ結果ヲ生スヘシ、何ントナレハ此計算法ニ依ルハ刑ノ執行ノ殘餘即チ捕縛以後ニ關シテハ既ニ期滿免除ヲ得ルコトナリ、此論法ハ此ノ如キ議論ノ不適實ナルコトヲ證明スルニ掌ヲ指ス、如キ明白ナル奇怪ナル點ヲ擧テ以テ直チニ攻撃スルノ方法ナリトス

(二九〇六號) 罰金ニ關シテハ罰金徵收ノ爲メニ執行セラレタル財産差押ハ罰金ノ金額ヨリ



少ナキ金額ナリシヲ想像セサルヘカラス、我輩ノ意見ヲ以テスレハ此一部分ノ辨償ニヨ  
リ其殘餘ニ付キ新クニ期滿免除ノ創生ズルモノトス、實ニ第六百三十五條第六百三十七條  
及ヒ第六百三十九條ヲ引用セントスル所ノ勢力ハ此諸條カ此場合ノ爲メニ規定セラレタル  
ニアラサルモノヲ茲ニ引用スルニ由リ既ニ前段ニ於テ擊破セラレタリトセハ、今此場合ニ  
於テモ亦唯此理由ニ依テ擊破セラレヘシ

(一九〇七號) 期滿免除ノ中止ニ付テハ、我輩ハ公訴權ノ期滿免除ニ付テ認メサルカ如ク刑  
ノ期滿免除ニ付テモ亦之ヲ認メサルナリ、(一八七二號以下參觀) 故ニ例ヘハ逮捕セラレタル  
所ノ逃走シタル死刑被罰者ノ果シテ其被罰者ニ相違ナキヤ否ヤヲ證明セシムルノ必要アル  
場合ノ如キハ(治罪法第五百十八條以下參觀) 此証明ニ關スル手續ハ以テ期滿免除ノ經過ヲ  
妨ケサルナリ

(一九〇八號) 第五ノ結果、刑ノ期滿免除ハ其性質其物ニヨリ法律上自然ニ生スル所ノ身分  
ノ失墜即チ不能力ニ適用セラレサル者ナルカ故ニ(一八九四號參觀) 此被罰者ハ期滿免除ニ  
因テ有形的ノ執行ヲ要スル刑ヲ逃レタリト雖モ其處斷ヨリ出ル所ノ身分ノ失墜、權利ノ剝  
奪ハ依然トシテ存在スルモノトス、但シ有形的ノ刑ト共ニ進退スル所ノ禁治産ハ此限ニテ  
ラス、重罪ノ刑ニ係ルルハ第六百三十五條(一八九五號插註參觀) ハ被罰者ニ對シ特別ノ位置

ヲ與ヘタリ

(一九〇九號) 第六ノ結果、刑ノ期滿免除ト名クルモノ、効果ハ刑ノ執行權ノ消滅ニ外ナラ  
ズ、此期滿免除ハ社會ヲシテ曾テ被告人ニ對シテ宣告シタル刑ヲ施行スルノ權利ヲ終了セ  
シムルカ故ニ、諸般ノ執行ヲ司ル官權ハ此期滿免除ニ因テ停止セサル可ラス、被罰者ハ何時  
ニテモ總テノ場合ニ於テ此期滿免除ヲ引用スルノ要アリトセハ管轄裁判所ニ之ヲ申供スル  
ヲ得ヘシ、且ツ管轄裁判所ハ被罰者ノ申供ナキハ自ラ之ヲ補足スルノ義務アリトス、是  
以テ人ノ刑ノ期滿免除ハ公訴ノ期滿免除ト同シク之ヲ公法ナリト説明スル所以ノモノナリ  
(一八七六號參觀)

(一九一〇號) 我輩ハ最終ニ既ニ公訴期滿免除ニ付キ云ヒタルモノヲ此刑ノ期滿免除ニ付テ  
モ亦之ヲ復説スヘシ、即チ屢連續シテ公布セラレタル法律中互ニ抵觸アル場合ニ於テ適用  
スヘキモノハ最モ寬ナル法律ナルヲ是レナリ、何トナレハ、刑ノ期滿免除ハ刑罰權ニ關係ス  
ル所ノ規則ニシテ手續ニ關係スル所ノ規則ニアラサレハナリ(一八七七號參觀)

(一九一一號) 治罪法ニ規定セル一般ノ規則ノ外ニ特別ナル短期ノ期滿免除アリ、此期滿免  
除ニ付テハ各其特別ノ法ニ從ハサル可ラス、是レ我輩カ既ニ公訴ノ特別ナル期滿免除ニ關  
シ注意セシメタル所ノ者ニ同シ(一八五五號參觀)



一九二一號第二) 私訴權執行ノ權利ハ私訴權其物トハ異ニシテ一タヒ其處斷ノ宣告セラレ  
タル上ハ公訴權ト獨立分離シ其期滿免除ハ一ニ民法ノ規則ニ依テ支配セラレル(シ)治罪法  
(第六百四十二條參觀)

棄權即チ權利ノ拋棄ノ效果

(一九二二號) 有形的ノ執行ヲ要スル所ノ刑ト有形的ノ執行ヲ要スルヲ久法律ノ單獨ノ威  
力ニ因テ生スル所ノ刑ト問ハス、刑事處斷ヨリ出ル權利ニ付キ社會ノ名ヲ以テ爲テ所  
拋棄ノ思考ニ關シテハ種々ノ規則アルモノトス、即チ大赦モ復テ此規則ノ中ニアリ、特赦、和  
解、復權モ亦同シ、夫レ赦(グラーセス)ノ語ハ一般ノ意義即チ恩惠ノ一所爲ノ意義、辭ヲ變ヘテ  
之ヲ言ヘハ、之ヲ受クル者モ之ヲ與フル者モ共ニ愉快ヲ感ズトイフ意義ヲ有スル所ニシテ  
其最終大ナル範圍ニ於テハ社會ノ刑罰權ニ關スル諸般ノ拋棄ニ之ヲ當行スルコトヲ得可シ、  
然レ此語ハ慣用上專ラ狹隘ナル一箇ノ意義ヲ有ス我輩ハ下ニ之ヲ定メシメ申出ス  
大赦 (一九二二號) 大赦トイフ者ハ大赦ヲ爲シタル事件ニ關シテハ將來ニ向ヒテ諸般ノ訴訟手續  
即チ刑事公訴ノ手續ヲ停止スルト同時ニ又此同一ノ事件ニ付キ宣告セラレタル刑事處斷又  
効果ヲ失却セシム、何ントナレハ裁判上此事件ハ全ク遺忘ニ置カレタレハナリ、是ヲ以テ体

刑ハ消滅シテ復テ執行スルコトヲ得ス、權利ノ失墜即チ人ノ身分及ヒ能力ニ關スル權利ノ剝  
奪ハ茲ニ終了ス、乃チ唯存スル所ノモノハ第三者ノ既得權ヲ成ス所ノ効果ナシ(一九二四號  
參觀)

(一九二三號第二) 大赦ハ民事執行ノ權利ヲ消滅セシメス、夫ノ大赦ニ制限ナク絕對的ニ効  
果ヲ生セシムル所ノ千七百九十三年八月十二日ノ法ノ如キ立法上ノ規則ハ學問上ノ駁撃ヲ  
受クルハ實ニ至當ナリトス

特赦

(一九二四號) 有形的ノ刑ノ執行權ニ關シ、又ハ裁判ヨリ直チニ生スル所ノ權利ノ失墜若ク  
ハ不能力ニ關シ或ル被刑者ニ對シ特別ニ爲ス可キ所ノ棄權ニ付テハ、純粹ノ學問上ヨリス  
レハ如何カ之ヲ論定ス可キヤ、公訴權ニ付テハ多クノ理由アリテ斯ノ如キ人ニ就テ爲テ所  
ノ恩典ヲ斥ケシメタリシカ之ト同一ノ理由ハ執行權及ヒ裁判ヨリ直チニ生スル法律上ノ効  
果ニ付テモ斯クノ如キノ恩典ヲ斥ケシムヘキヤ、又ハ之ニ反シ刑罰ノ純理的ノ元則上、別ニ  
理由ノアルアリテ執行權ノ所有者タル社會ハ斯クノ如ク人ニ就テ棄權ヲ爲スノ權力ヲ其諸  
官廳ノ一ニ與ヘ得ルモノナルヤ、  
(一九二五號) 有形的ノ刑ノ執行ニ付キ棄權スルノ權力ト權利ノ失墜ヲ取消スル權力トハ假



令ヒ相連結スルモノナリト雖モ固ヨリ同一ノモノニ非ス、即チ其一ハ單ニ爲ス可キ執行ヲ爲サ、ルニ係リ他ノ一ハ法律ノ効果ヲ解除シ法律ニ因テ自然ニ減縮シタル被刑者ノ地位ヲ回復スルニ係ル、而シテ此有形的ノ刑ノ執行ニ付キ爲ス所ノ恩典ニハ人之ニ特赦ノ語カ今日有スル所ノ放棄モ狹隘ナル意義ニ從テ特赦(グラーセス)又ハ刑ノ減等(コンミニュタシオン、ド、ペーヌ)トノ名稱ヲ與ヘタリ、又被刑者ヲシテ其失ヒタル權利ノ享有若クハ施行ニ付キ將來完全ノ地位ニ復セシムル効果ヲ生スル恩典ニハ人之ニ復權(レ、アピリタシオン)ノ名稱ヲ與ヘタリ

是ニ由テ之ヲ觀レハ、社會ノ刑罰權ニ關スル權利ノ放棄ニ付テハ三箇ノ重モナル區別アリトス。○第一ニハ事件ノ遺忘即チ大赦是レナリ、第二ニハ適用ヲ爲ス爲メニ有形的ノ執行ヲ要スル所ノ刑ニ付キ全部若クハ幾部ノ放棄又ハ減等即チ特赦是ナリ、第三ニハ被刑者カ裁判ニ因テ失ヒタル權利ノ享有、若クハ施行ニ付キ權利ノ回復、即チ復權是ナリ、然ラハ特赦ハ專門語ノ特別ナル意義ニ於テスレハ刑ノ執行權ノ放棄ニ外ナラサルヲ知ル可キナリ、(一九一六號)十八世紀ノ哲學ハ舊政ノ下ニ行ハレタル赦狀(レットトル、ド、グラーセス)濫用ノ弊ヲ目撃シタルヨリシテ特赦ノ制度ヲ其元則上ヨリ攻撃シ之ヲ刑法ヨリ排除セント欲シタリ、實ニ千七百九十一年ノ立憲議院ハ其改定刑法ニ於テ陪審ノ制度ニ依リ處斷セラル、總

テノ重罪ニ付キ大赦ト共ニ特赦ヲ廢止シタリキ(一)又此件ニ關シテハ十八世紀哲學ノ最終ノ木鐸者ノ一人タルベンザムハ其著書中「赦ヲ行フノ權力」ト題スル一章ヲハ左ノ數語ヲ以テ約說シタリ、曰ク(若シ法律ニシテ嚴ニ過キタリトセハ赦ヲ行フノ權力ハ是レ必要ナル赦正ノ法ナリ、然レモ此救正法ハ亦一箇ノ惡物ナリトス、宜シク善良ノ法律ヲ制定シ之ヲ消滅セシムルノ威力ヲ有スル魔術ノ鞭ヲ作ル勿レ(譯者曰ク、往時魔術ヲ行フト稱スル者一箇ノ鞭ヲ使用シテ之ヲ行ヒシト傳フ即チ警諭ノ語ナリ)若シ刑ニシテ必要ナリトセハ之ヲ放棄スルコトヲ得ス若シ不必要ナリトセハ之ヲ科スルコトヲ得サルナリ)(二)

(一)千七百九十一年ノ刑法第一編第七章第十三條(刑事裁判ノ執行ヲ妨ケ又ハ中止スルニ係ル總テノ處置ノ使用及ヒ赦狀其他寬裕(レ、ミニシオン)、廢止(アポリシオン)、容赦(パルドン)刑ノ減等(コンミニュタシオン)ノ諸狀ノ使用ハ陪審ノ制度ニ依リ處斷セラル、總テノ重罪ニ付キ之ヲ廢止ス)

(二)ベンザム著刑法元則第三編中赦ヲ行フノ權力ト題スル第十章ヲ參觀ス可シ然レモ右特赦ヲ排斥スルノ論ハ學問上ノ眞理トシテハ、之ヲ記載スルコトヲ得ス、事實ノ觀察トシテ法律トニ依レハ特赦ハ却テ人類ノ刑罰ニ必要ナル補助物ナルコトヲ了知スルカ故ニ宜シク特赦ヲ至當ノ適用ヲ保ス可キ善良ナル法律上ノ組織ニ依リ其濫用ノ弊ヲ絶ツヘキノミ決シ



テ之ヲ廢ス可カラサルナリ  
 特赦ハ二箇ノ異ナリタル使用法ヲ以テ純理的ノ刑罰ニ參加スルモノトス、即チ非常若クハ  
 例外ノ使用ト、通常若クハ規則上ノ使用トニシテニツナカラ闕ク可カラサルモノナリ、  
 (二九二七號)特赦ハ其第一ノ使用法ニ於ケルヤ則チ非常ノ處分ニシテ、或ハ刑法ノ避ケ難キ  
 不完全或ハ人類裁判ノ避ケ難キ不完全ヨリ生シ得ル所ノ例外ノ場合ニ付キ其不完全ヲ補フ  
 爲ニ用サラル、請フ茲ニ之ヲ説明セン○特赦ハ刑法ノ不完全ヲ補フ、何ントナレハ最モ善良  
 ニ制定セラレタル法律ニ於テスラ法律ハ固ヨリ普通ニ生スル所ノ事ニ就キ想像ヲ以テ其規  
 則ヲ編纂スルニ過ギサルカ故ニ、從テ事實ノ特殊ナルコト、關係人ノ普通ナラサルコト、其他事  
 公私ニ係ル情狀等ノ理由ヨリシテ、豫想ス可カラス若クハ豫想シ得サル所ノ非常ナル場合  
 ナルニ於テハ、法律ハ自ラ其欠典ヲ顯ハスコトアレハナリ、既ニ善良ニ制定セラレタル法律ニ  
 於テスラ尙ホ然リ極端ノ刑ヲ保存スル法律即チ死刑ノ如キ之ヲ維持スル者スラ其嚴刻ナル  
 効果ヲ常ニ實行スルヲ必要ト認メサル所ノ極端ノ刑ヲ保存スル法律ニ係ル時ニ於テハ、  
 然レ僅此種ノ法律ハ寧ロ之ヲ廢スルノ優レルニ若カサルナリ○又特赦ハ人類裁判ノ不完全  
 ヲ補フ、何トナレハ最モ善良ニ立テラレタル裁判所構成法ノ在ルアルモ裁判官ハ其職務上  
 法律ニ適從セサルヲ得サルヨリシテ公益上ノ觀察カ又ハ事件ノ特殊ナル情狀アル等ヨリ掛

酌シテ法ヲ適用セント欲スル所ノ普通ヲ以テ論ス可カラサル場合アルモ、法律上之ヲ爲ス  
 コトヲ得ズ、從テ遺憾ナカラ法律ヲ其儘ニ適用セサルヲ得サルノ場合アレハナリ、既ニ單純ニ  
 法律ヲ適用スル時ニ於テスラ尙ホ且ツ然リ、況ンヤ事後ニアラサレハ發覺セス又ハ生セサ  
 ル所ノ例外ノ場合、若クハ例外ノ事件ニ係ル時ニ於テハ、實ニ特赦ヲ必要ナルコトヲ知ル可  
 キナリ○余ハ此第二ノ使用法ニ係ル特赦ヲ非常特赦ト呼フ可シ  
 (二九二八號)非常特赦ヲ行フコトヲ任セラル、官ハ最モ高等ノ官ヲラサル可カラス、何トナ  
 レハ法律ノ一般ノ正文ニ拘ハラス、且ツ裁判官ノ通常ノ職制ノ上ニ在リテ其作用ヲ爲セハ  
 ナリ、即チ非常特赦ヲ行フコトハ恩惠ニ依ルニアラス、請願ニ依ルニアラス、現ニ生シ來リタル  
 場合ニ對シテ法律ノ正文若クハ一般ノ規則ニ欠漏アルコトヲ示スニ足ル可キ高尙ナル斟酌商量  
 ヲ以テ之ヲ決定スレハナリ、一言以テ之ヲ約スレハ、非常特赦ハ法律ヲ適用スルニ當リ其  
 一般ニ及フ性質ヨリ出ル短處ヲ矯正スルニアレハナリ、此論理ヨリシテ例外ノ場合ナル特  
 赦ノ理由ヲ斟酌商量スルニ當リテハ必然自由ニシテ且ツ完全ナラサル可カラズ、且ツ此種  
 類ノ特赦ヲ使用ハ極メテ稀シナラサル可カラサルナリ、故ニ此使用ヲ爲シ得ヘキハ單ニ唯  
 死刑ニ對シテノミナリトス  
 (二九二九號)特赦ハ其第二ノ使用法ニ於テハ規則ニ從テ用ヲ爲ス通常ノ處分トシテ存スル



モノニシテ、犯人ヲ罰スルト之ヲ矯正スルトノ二箇ノ主意ニ基キタル總テノ處罰方法ニハ  
避ク可カラサル一箇ノ機關ナリ、即チ被刑者ノ爲メニ未來ノ閉塞セサルコトヲ示スモノハ此  
特赦ニシテ將來生セントスル改心ノ爲メニハ希望トナリ、既ニ生シタル改心ノ爲メニハ賞  
譽トナルヘク實ニ夫ノ無期刑ニハ必須ノ補助法ナリトス、此種ノ特赦ハ規則ヲ以テ之ヲ規  
定スルヲ要シ、且ツ其規則ハ施行ト使用法ヲ一致セシメサル可ラス○余ハ此特赦ヲ通常特赦  
ト名ク可シ

(一九二〇號)我成文法ニ於テ特赦ヲ行フノ權力ハ、其刑ヲ全免スルト幾分ヲ免スルト又下  
級ノ刑ヲ以テ重キ刑ニ換フルトヲ問ハス、我輩カ既ニ示シタルカ如ク、立憲議院ニ於テ廢セ  
ラレシカ「コンシユラ」政府ノ下ニ於テ共和紀元第十年十一月十六日ノ法ニ依テ再設セラレ、  
爾後數種ノ憲法ニ依テ確認セラレ、遂ニ今日ニアリテハ或ル制限ヲ除クノ外、共和政府大統領  
領ニ屬セシメラレタリ、是レ其ノ大ニ大赦ト異ナルノ點ナリトス(一)

(二)千八百七十一年六月十七日ノ法、此法ハ既ニ前ニ之ヲ引用シタリキ

(第二條)國民議會ハ特赦ヲ爲スノ權ヲ佛蘭西共和政府行政權ノ長官タル大臣會議ノ議  
長ニ委任ス)

(第三條)然レハ特赦ハ國民議會ニ於テ求刑ヲ命シタル所ノ大臣及ヒ其他ノ官吏又ハ貴

人ニ對シテハ一箇ノ法律ヲ以テスルニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス)

(第四條)千八百七十一年三月十五日以後巴里及ヒ他ノ府縣ニ於テ今般ノ暴舉ニ附着ス  
ル事件ノ爲メニ法律上重罪ト爲ス所ノ罪アリトシテ罰セラレタル者ニ對シテハ行政權ノ  
長官ト次項ニ掲クル委員ニ依テ代表セラル、國民議會トニ於テ合同一致スルニ非サレハ  
特赦ヲ與フルヲ得サル可シ、故ニ此被刑者ノ爲ス所ノ總テノ上訴ハ司法大臣ニ依テ調査  
セラレタル後チ國民議會ノ議長ニ送付セラル可シ、此上訴ハ國民議會ニ於テ公會ヲ以テ  
行ヒタル無名投票ニ依テ命セラレタル十二人ノ調査委員ノ調査ヲ受ク可シ、行政權ノ長  
官ハ此調査委員ノ意見ニ從フニ非サレハ特赦ヲ與フルコトヲ得ス、若シ委員ト行政權ノ長  
官ト意見ヲ異ニスル時ハ處刑ノ裁判ヲ執行ス可シ)

規則ニ從テ運轉スル通常ノ處分タル特赦ノ施行ハ、其條件、及ヒ呈出、其他必要ナル程式ニ關  
シテハ數種ノ命令、決議又ハ訓令ニ依テ規定セラレタリ、而シテ特赦ノ爲メニ要スル重モナ  
ル條件ノ一ハ被刑者ニ於テ既ニ其科セラレタル刑ノ二分ノ一ヲ受ケタルコト是ナリ(一)

(二)千八百十八年二月六日ノ命令及ヒ此命令ニ繼キタル司法大臣ノ回達並ニ其以後ノ決  
議訓令特ニ千八百三十年ノ革命以後ノ決議訓令ヲ參觀ス可シ

例外ノ理由ニ基キタル非常ノ處分トシテノ特赦ノ施行ハ單ニ前段ノ規則ノ外ニアリトス、



千八百三十年以來死刑ノ宣告アリタルトキハ被刑者ヨリ特赦ニ關シ如何ナル請願ヲモ爲サ  
スト雖モ其執行ヲ中止シ特赦ノ權利ヲ施行ス可キ理アリヤ否ヤノ情狀ニ付キ意見ヲ陳ヘ訴  
訟書類ヲ司法大臣ニ送付スルヲ以テ定規ト爲シタルハ、則チ此非常ノ處分トシテ爲スヘキ  
特赦ノ主趣ニ基キタルモノニシテ前段ノ規則ノ外ニアリトス(一)

(二)千八百三十年九月二十七日ノ日付ニ係ル司法大臣ノ回達ヲ參看ス可シ

(一九二二號)赦狀ヲ認可スルコト、辭ヲ換ヘテ之ヲ言ヘハ、管轄裁判所ニ於テ赦狀ヲ調査シ且  
ツ之ニ完全ノ効ヲ與フル爲メニ施ス所ノ手續ハ舊王政ノ下ニアリテハ單ニ外形ノミノ儀式  
ニハ非サリシナリ、乃チ特赦ニ訴訟ノ性質ヲ與フル所ニシテ一個ノ嚴格ナル目的ヲ有セル  
手續ナリキ(一)然レモ今日我立憲政府ノ下ニアリテハ赦狀ノ認可ハ公示ノ方法ヲ大ニスル  
爲メノ一個ノ公式ニ過キス、故ニ單ニ死刑ノ特赦ノ場合ト例外ニ依リ此公式ヲ用フルノ要  
アリト認めラル、他ノ場合トノ爲メニ保存セラレタリ(二)

(二)千六百七十年ノ刑事ニ關スル命令第十六章第十五條以下〇ミユミユエヤール、ド、  
ウプーグラン著刑事法、律第六百七丁第十八號〇此書第三百六十九號插註參觀

(三)赦狀ヲ以テ特赦又ハ刑ノ減等ヲ行フ時ハ此赦狀ハ認可ヲ受ケサル可カラズ、而シテ此  
認可ハ千八百十年七月六日ノ布達ノ文辭ニ依レハ控訴院ノ公廷ニ於テ帳簿ニ記入スルヲ

以テ之ヲ爲スモノトス然レモ此認可ハ毫モ無効ノ制裁ヲ以テ規定セラレタルニ非サルナ  
リ〇千八百三十一年八月二十四日ノ回達ニ從ヘハ控訴院ニ於テスル赦狀認可ノ式ハ死刑  
ノ場合ト其他斯ノ如キ公式ヲ相當ナリト認ムル所ノ場合トニ非サレハ之ヲ行ハサルモノ  
トス、其他ノ總テノ場合ニ付テハ檢事長ヲシテ裁判宣告書ノ紙端ニ特赦ノアリタルコトヲ  
記載セシムル爲メ且ツ其執行ヲ監督セシムルカ爲メ司法大臣ヨリ此官吏ニ通知ヲ爲スニ  
過キサルナリ

特赦ハ民事原告人ノ權利ニ對シ毫モ影響ヲ及ホスコトヲ得サルモノトス

(一九二二號)我刑事統計表ニ依リ我國ニ於テ毎年行フ所ノ特赦ノ數ニ付キ其大略ヲ知ルコ  
トヲ得ヘシ、而シテ余カ此ニ其大略ト云フモノハ統計表ノ指示スル所完全ナラサルヲ以テナ  
リ〇非常特赦ニ付テハ、我輩ハ死刑ニ關スル特赦ニ非サレハ其數ヲ知ルコトヲ得ス〇通常特  
赦ニ付テハ我輩ハ千八百三十七年以來毎年我徒刑場、我中央監獄及ヒ我府縣獄舍ニ於テ慣  
例ノ時季ニ當リ一時ニ行フ所ノ特赦ノ表ヲ有ス、此特赦ハ或ハ刑ヲ全免スルアリ、或ハ刑ノ  
幾分ヲ免スルアリ、或ハ減等スルモノアリ〇然レモ要スルニ此表ハ徒刑場、中央監獄及ヒ府  
縣獄舍ニ於テ行フ所ノ特赦ノミニ係ルカ故ニ、徒刑ニ處セラレタル懲役ニ處セラレタル者  
及ヒ禁錮ニ處セラレタルモノニ對シテ行ヒタル特赦ノミヲ擧ゲタルモノナリ、故ニ我統計



表中現ハル、特赦ハ死刑ノ特赦ト集合特赦(原語グラーイス、コレクチャー)多數ノ被刑者ニ對シ一時ニ行フカ故ニ集合特赦ト云フ)ノ名ヲ以テ現ハル、右ノ特赦ノミニシテ其他ハ此表中ニ擧ケラレサルナリ、我輩ハ此不充分ナル記録ヨリ節略シテ左ノ二箇ノ表ヲ現出セシム可シ、則チ此表ハ特赦ノ數ノ一季ハ一季ヨリ増加シタルコトヲ示ス

死刑ニ處セラレタル者ニ對スル特赦ノ平均數(一)

百ニ付キ

從千八百二十六年  
至千八百三十年

三五

從千八百三十一年  
至千八百五十年

三七

從千八百五十一年  
至千八百六十四年

四三

徒刑場、中央監獄及ヒ府縣獄舎ニ於テ年々行ヒタル集合特赦ノ全數平均

一年間

從千八百三十七年  
至千八百五十年

七〇八

從千八百五十一年  
至千八百六十四年

九八六(二)

(一)我輩ハ既ニ前第千五百二十二號ニ於テ死刑ノ宣告ト實際ノ死刑執行トノ年々ノ數ヲ指示シタリキ若シ特赦ノ數ヲ右ノ數ヨリ推算シ來ラハ則チ中ラスト雖モ遠カラサルヲ得可シ

(二)千八百六十九年ニ於テハ此種ノ特赦ノ全數千四百三十二ニ登リタリキ

(一九二二號第二)我輩カ既ニ夫ノ公訴權ノ場合ニ於テ論シタル所ニシテ刑ノ適用ニ付テモ生スル所ノ特別ノ性質ヲ有スル諸種ノ事項ハ、刑ノ執行權ニ關スル棄權ノ論題ニモ亦相關連スルモノトス、即チ左ニ之ヲ擧ケン

第一ニハ、入關稅、間接稅、郵便及ヒ森林ノ諸官署カ裁判ノ後ニ於テ被刑者ト爲ス所ノ和解是ナリ(一八八二號參觀)新法ニ依テ改正セラレタル森林法第百五十九條ハ裁判ノ後ニ起リタル和解、即チ刑ノ適用ノ爲メニ起リタル所ノ和解ハ財産ニ及フノ刑ト財産ニ關スル賠償トヲ除クノ外、他ノ刑ニ付テ之ヲ爲スコトヲ得サル旨ヲ明カニ規定シタリ(第千八百八十二號挿註ニ引キタル此法ノ正文ヲ看ル可シ)

第二ニハ、姦通ノ爲メ罰セラレタル妻ヲ再娶スルコトヲ承諾シ姦婦ニ對シ宣告セラレタル處



刑ノ効ヲ止ムルヲ得ル本夫ノ權是ナリ(一)我輩カ既ニ第千八百八十五號ニ於テ論シタルカ如ク本夫ノ死去ヨリシテ斯ノ如キ刑ノ執行ヲ止ムルノ効力ヲ生セシムルヲ得サル可シ  
 ○本夫ヨリ姦婦ニ對シテ然ク行フ所ノ此特赦ノ種類ハ共犯人ニ其効ヲ及ボサ、ルモノトス、何トナレハ此場合ニ於テハ既ニ姦通ノ訴訟ニ關セサレハナリ即チ姦婦ト姦夫トヲ連結スル所ノ訴訟不可分ノ論ニハ係ラスシテ單ニ各被刑者ニ對シテ執行セサル可カラサル刑ニ係レハナリ

(二)刑法第三百二十七條(姦通ノ罪アリト認メラレタル婦女ハ三月ヨリ少ナカラス二年ヨリ多カラサル時間禁錮ノ刑ヲ受ク可シ、本夫ハ其婦ヲ再娶スルヲ承諾シ此處刑ノ効力ヲ止ムルヲ得)

第三ニハ、囚徒逃走ノ場合ニ於テ刑法第二百四十七條ニ記載シタル條件ノ具備シタルニ因リ懈怠ノ罪アリトセラレタル看守者若クハ護送者ニ對シテ法律自ラ爲ス所ノ刑ノ放棄是レナリ(一七六六號及ヒ一八八七號參觀)故ニ刑ニシテ既ニ宣告セラレタル時ハ其刑ハ消滅セサル可カラス

最終ニハ、浮浪ノ罪アリトシテ罰セラレタル者ニ關シテ刑法第二百七十三條ニ依リ邑會ニ於テ爲ス所ノ浮浪者引渡ノ請求是ナリ(一)

(一)刑法第二百七十三條(佛蘭西ニ於テ生レシ浪遊者ハ縱令控訴及ヒ取消ヲ爲ス可カラサル裁判官渡ヲ受ケシ後ト雖モ其生レタル邑ノ會議ヨリ其引渡ヲ得ンコトヲ請ヒ又家資分散ノ者ニ非ザレハ何者ヲ論セス其浪遊者ヲ引受ク可キ保証人トナルコトヲ得可シ  
 政府ニ於テ其引渡ノ願ヲ許シ又ハ保証人ノ旨ヲ允許シタル時ハ政府ノ命ヲ以テ其浪遊者ヲ其引渡ヲ願ヒシ邑ニ送致シ又ハ其保証人ノ願ヒニ因リ其浪遊者ノ居住ノ爲メ定メタル地ニ之ヲ送致スヘシ

復權

(一九二三號)我輩カ曩ニ第千九百十五號ニ於テ與ヘタル所ノ定義ニ從ヘハ特赦ハ唯是レ刑ノ執行權ノ放棄ニ過キササルヲ以テ確定裁判ヨリ自然ニ生スル所ニシテ右ノ執行ニ關係ナキ所ノ夫ノ權利ノ失墜又ハ不能力ヲ消滅セシムルヲ得サルモノトス、然レハ此種類ノ刑ニ付テモ亦純理的刑罰ノ元則ニ於テハ被刑者ノ爲メニ將來ノ希望ヲ開キ改悛ノ功ニ因リ他日社會ニ於テ全然其地位ヲ回復スルコトヲ得サルニ非ザルコトヲ瞥見セシメンコトヲ要ス、然ラハ則チ此地位ノ回復即チ復權ニ付キ特赦ノ規則ト異ナル所ノ他ノ一規則ヲ設ケサル可カラス  
 (一九二四號)舊時ノ刑事裁判例ハ復權ヲ左ノ二箇ノ事項ニ附着セシメタリ、即チ當時ノ法律及ヒ風俗ニ依リ處刑ノ爲メ被刑者カ被フリタル汚辱ト其結果タリシ不能力トニ附着セシ



タタリ、故ニ君主ヨリ附與スル所ノ復權狀ハ左ノ二箇ノ目的ヲ有シタリキ、即チ第一ニハ汚辱ノ票記ヲ除去スルノ目的ニシテ當時ノ常語ニ依レハ被刑者ヲ其善良ナル名分(フアーム)及ヒ名聲(ルノンメー)ニ回復スルノ目的ト第二ニハ被刑者ヲシテ其失ヒタル所ノ權利ノ享有ト施行トヲ再ヒ得セシムルノ目的是ナリ、然ルニ汚辱ヲ與フルノ刑ハ大罪人ニ科スル刑ニ限ルカ故ニ復權ヲ適用スルハ單ニ大罪人ニ對シテノミナリキ、

千七百九十一年ノ立憲議院ハ此汚辱ノ刑ト呼フ所ノ刑ヲ遺傳シ之ト共ニ復權ノ遺制ヲモ収受シタリ、然シテ剝奪公權ノ公示ヲ定規ノ公式ヲ以テ行フト爲シタルカ故ニ(一五五四號參觀)之カ反對タル復權ヲモ同ク公式ヲ以テ之ヲ行フト爲シ、之ニ民事上ノ第二ノ洗禮ト云フ名ヲ付シタリ、而シテ其公式ハ則チ左ノ如クナリキ、邑會ノ議決ニ因リ邑吏二人其官職ヲ表スル綬ヲ帶ヒ被刑者ヲ刑事裁判所ニ誘引シ之ト共ニ公廷ニ出頭シ營テ被刑者ニ對シテ宣告セラレタル所ノ裁判ヲ讀上ケタル後高聲ニ左ノ如ク陳述ヲ爲ス、曰ク(何某ハ其刑ヲ受テ其罪ヲ償ヒタリ、現時ニアリテハ其行狀ニ付キ謗ル可キノ點ナシ、我輩ハ彼レガ國ノ名義ヲ以テ彼レガ罪ノ痕跡ノ滅却セラル、コヲ請求スニト、而シテ裁判長ハ會議ヲ用フルコナク左ノ言渡ヲ爲ス曰ク(汝ノ國ノ證明ト請求トニ依リ法律ト裁判トハ汝ノ罪ノ痕跡ヲ滅却スニト)千七百九十一年ノ刑法第一編第七章第六條及ヒ第七條參觀)

千八百八年治罪法改定ノ際、復權ノ制ヲ治罪法ニ編入スルニ當リ之ヲ以テ單ニ刑ノ汚辱ノ性質ニノミ反應スルモノト爲シ、重罪ノ刑ノミニ對シテ之ヲ置キタルハ常ニ前段ニ述ヘ來リタル所ト同一ノ主意ニ基キタリシモノナリ

(一九二五號)然レモ我輩ハ其被刑者ヲ罰セントスルニ係ルト之カ刑ヲ除カントスルニ係ルトヲ分タス、總テ前段論シ來リタル所ノ事ニ付キ眞ニ立法者ノ權内ニアリテ實際裁判上ノ効ヲ生スルモノハ權利ノ失墜ト不能トニ過キズシテ、其汚辱ノ點ノ如キハ立法者ニ於テ之ヲ如何トモスル能ハサルコトヲ知ル(一六二二號以下參觀)且既ニ千八百十年ノ刑法ニ從ヘハ輕罪刑ノ宣告ハ被刑者ニ對シ終身權利ノ失墜ト不能トヲ來スノ場合アリタリ、而シテ此結果ハ千八百三十年ノ後ニ成リタル特別法ト特ニ千八百四十八年ノ革命以後ノ特別法トニ依リ最モ多キヲ加ヘタリ(一六二二號參觀)故ニ重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ其善良ノ行狀ニ依リ他日其權利ノ全体ヲ回復スル望アルモ輕罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ却テ此希望ヲ有スルコトヲ得サルノ不都合ヲ現出スルニ至タリキ、サレハ此點ニ付テノ改正ノ草按ハ既ニ千八百四十八年ノ革命前ニ成リタリシカ未タ之ヲ頒布スニ至ラスシテ革命ノ變アリタルニヨリ之ニ繼キタル假政府ハ當分ノ處分トシテ千八百四十八年四月二十二日ノ布達ヲ以テ此欠典ヲ補ヒタリ、而シテ最終ニ千八百五十二年七月三日ノ法ハ治罪法ノ諸條ニ改正ヲ加ヘ復



權ノ制度ヲ重罪ニ於ルカ如ク輕罪ノ刑ノ場合ニモ擴充セリ(一)乃チ現時ニアリテハ復權ハ單リ刑ノ汚辱ノ性質ニノミ反應スルモノニ非サルヲ看ル可キナリ

(一)治罪法第二編第七章第四節被刑者ノ復權(此一節ハ千八百五十二年七月三日六日ノ法ニ依テ改正セラレタルモノニ係ル)

(第六百十九條) 施体又ハ加辱ノ刑又ハ懲治ノ刑ヲ言渡サレシ者既ニ其刑期ノ終リシ後又ハ赦免狀皇帝ヨリ犯人ノ罪ヲ免ルル言渡書ヲ得タル後ハ復權ヲ願フコトヲ得可シ

(第六百二十條) 施体又ハ加辱ノ刑ヲ言渡サレシ者ハ其赦宥ヲ得タル日即チ刑期ノ終リシ日ヨリ五年ノ後ニ非サレハ復權ヲ願フ可カラズ

然レモ民權剝奪ノ刑ヲ言渡サレシ者ニ付テハ其言渡ヲ取消ス可カラサルニ至リシ日ヨリ其五年ノ期限ヲ算ヘ又其者禁錮ヲ言渡サレシ時ハ其禁錮ノ刑期ノ終リシ日ヨリ其期限ヲ算フヘシ

又政府ノ監察ヲ受ク可キ刑ヲ主タル刑トシテ言渡サレシ者ニ付テハ其言渡ヲ取消ス可カラサルニ至リシ日ヨリ其五年ノ期限ヲ算フヘシ

懲治刑ヲ言渡サレシ者ニ付テハ其五年ノ期限ヲ減シテ二年トス

(第六百二十一條) 施体又ハ加辱ノ刑ヲ言渡サレシ者ハ五年以來同一ノ郡中ニ住シ且其

中最終ノ二年以來同一ノ邑中ニ住スルニ非サレハ復權ヲ願フ可カラズ

懲治刑ヲ言渡サレシ者ハ三年以來同一ノ郡中ニ住シ且其中最終ノ二年以來同一ノ邑中ニ住スルニ非サレハ復權ヲ願フ可カラズ

(第六百二十二條) 既ニ刑期ノ終リシ犯人ハ復權ノ願書ヲ其郡ノ檢事ニ差出シ且左件ヲ申出ツ可シ

第一 刑ヲ言渡サレシ日附

第三 刑期ノ終リシ後第六百二十條ニ記スル期限ヨリ更ニ永キ期限ヲ經タル時ハ其刑期ノ終リシ以來住シタル地

(第六百二十三條) 又其願人ハ既ニ裁判所ノ費用并ニ其言渡サレシ罰金及償額ヲ拂フタルノ証ヲ立テ又ハ其者此等ノ金高ヲ拂フ可キ義務ノ釋放ヲ得タル証ヲ立ツ可シ

若シ其証ヲ立テサル時ハ法律上ニテ定ムル所ノ期間間禁錮ヲ受ケタルノ証金高ヲ拂ハサルニ付キ禁錮ヲ受ケタル云ヲ立テ又ハ相手方其禁錮ヲ爲スノ權ヲ拋棄シタル証ヲ立ツ可シ

又詐偽ノ倒産ニ付キ刑ニ處セラレシ者ハ借金ノ元利并ニ裁判所費用ヲ拂フタルノ証ヲ立テ又ハ此ノ金高ヲ拂フ可キ義務ノ釋放ヲ得タル証ヲ立ツ可シ

(第六百二十四條) 檢事ハ郡長ヲシテ願人住所ノ邑會議員ニ左ノ諸件ヲ証明スル爲メ會



議ヲ爲ス可キヲ命セシム可シ

第一 願人邑内ニ住シタル期限但シ何月何日ニ其邑内ニ住スルヲ始メ何月何日ニ之ヲ止メタルヤヲ詳明ナラシム可シ

第二 其邑内ニ住シタル時間ノ行狀

第三 其時間生計ヲ營ミシ方法

馬會ニテ此等ノ諸事ヲ証明スル書面ニハ復權願ノ法ニ適シタルヤ否ヲ知ル可キ爲メ特ニ之ヲ記シタル旨ヲ附記ス可シ

又檢事ハ願人ノ住シタル邑ノ長官及其縣ノ治安裁判役并ニ其郡ノ長官ノ説ヲ聽ク可シ

(第六百二十五條 檢事ハ左ノ書類ヲ受取ル可シ)

第一 刑ノ言渡書ノ寫

第二 願人ノ行狀如何ヲ證スル禁錮場ノ簿册ノ寫

檢事ハ總テノ書類ヲ己レノ見込書ト共ニ檢事長ニ送ル可シ

(第六百二十六條 復權ノ願ハ願人住居ノ地ヲ管轄スル控訴院重罪取調局ニテ之ヲ吟味ス可シ

檢事長ハ總テノ書類ヲ其控訴院ノ書記局ニ納ム可シ)

(第六百二十七條 其書類ヲ書記局ニ納メタルヨリ二月内ニ重罪取調局ニテ其願ヲ吟味

シ檢事長其申立書ヲ差出ス可シ

重罪取調局ニテハ檢事長ノ求メニ從ヒ又ハ其公務ヲ以テ更ニ改メテ其願ノ趣ヲ取調フ可キヲ言渡スヲ得可シ但シ是レカ爲メ六月以上ノ遅延ヲ生ス可カラス)

(第六百二十八條 重罪取調局ニテハ檢事長ノ申立ヲ聽キタル上ニテ其見込書ヲ記ス可シ)

(第六百二十九條 若シ重罪取調局ノ見込書ノ復權ノ願ヲ允許セサルノ説タル時ハ更ニ二年ノ後ニ非サレハ再ヒ其願ヲ爲ス可カラス)

(第六百三十條 重罪取調局ノ見込書復權ノ願ヲ允許ス可キノ説タル時ハ檢事長其見込書ト諸書類トヲ遅延ナク裁判事務宰相ニ送呈ス可シ但シ其宰相ハ嘗テ刑ヲ言渡セシ裁判所ニ相談スルヲ得可シ)

(第六百三十一條 皇帝ハ裁判事務宰相ノ申立ヲ聽キタル上ニテ復權ノ願ヲ允許シ又ハ棄却ス可シ)

(第六百三十二條 皇帝ヨリ復權ノ願ヲ允許シタル時ハ復權狀ヲ渡ス可シ)

(第六百三十三條 其復權狀ハ嘗テ見込書ヲ差出セシ控訴院ニ送ル可シ  
又嘗テ刑ヲ言渡セシ裁判所ニモ亦復權狀ノ真正ナル寫シヲ送ル可シ



○其復權狀ノ寫ハ刑ノ言渡書ノ正本ノ端ニ記入ス可シ  
(第六百二十四條 復權ヲ得タル者ハ嘗テ刑ヲ言渡サレタルニ因リ失フタル權利ヲ全ク復ス可シ)

前數條ニ記スル規則ニ循ヒ復權ヲ得タルト雖モ商法第六百十二條ニ記スル禁ヲ除去ス可カラス治罪法上ニテ復權ヲ得ルト雖モ商法上ノ禁ヲ免ルス可カラサルヲ云フ一度重罪ヲ犯シタルニ付キ刑ヲ言渡サレタル後更ニ重罪ヲ犯シ施体又ハ加辱ノ刑ヲ言渡サレタル者ハ復權ヲ得可カラス  
復權ヲ得タル後更ニ刑ヲ言渡サレタル者ハ復權ノ益ヲ得可カラス

(一九二六號) 千八百五十二年ノ法ハ治罪法ノ諸條ヲ修正シ被刑者カ其復權ヲ請願シ得ル爲メニ要スル所ノ條件ニ付キ一ノ新タナル規則ヲ制定シタリ、此法ハ先ツ如何ナル方法ニ依リ如何ナル點マテ條件ヲ満足セサル可カラサルヤヲ定メタリ、即チ第一ニハ刑ヲ言渡シタル裁判ヲ満足セシメタルヲ(第六百十九條及ヒ第六百二十條第二項第三項)第二ニハ賠償ヲ言渡シタル裁判ト訴訟費用ノ償却トヲ満足セシメタルヲ(第六百十二條)第三ニハ法律ニ定メタル條件ヲ具備シ一定ノ期限間其行狀ヲ以テ權利ヲ回復スルニ相當ナル地位ニ在ルヲヲ顯ハシタルヲ(第六百二十條第一項及ヒ末項、第六百二十一條、第六百二十四條)是ナリ○次ニ此法ハ復權請願ノ手續ヲ定メタリ(第六百二十二條以下)○又此法ハ此處分ニ關係ス可キ

官署ヲ定メタリ、即チ第一ニハ被刑者ノ爲メニ證明ヲ爲ス所ノ邑役所(第六百二十四條第二ニハ復權ノ請願ニ付キ意見ヲ述ヘ若シ其意見ニシテ被刑者ノ爲メニ不利ナル時ハ請願ヲ政府ニ進達セサルノ權アル控訴院(第六百二十六條ヨリ第六百三十條ニ至ル)第三ニハ結極復權ヲ與フ可キト否トヲ決スル所ノ政府ノ長官(第六百三十一條)一是ナリ○復權ノ効力ニ關シテハ法律ハ毫モ制限スル所ナシ、故ニ復權ヲ得タル者ハ其處刑ノ爲メ奪ハレタル所ノ權利ヲ全ク回復スルモノトス(第六百三十四條)○再犯ハ第六百三十四條ノ正文ニ從ヘハ復權ヲ妨クルモノトス、個ハ是レ被刑者ニ對シ將來ニ向テ如何ナル希望ヲモ絶ツモノニシテ嚴刻ノ處分ト云フ可キナリ

(一千八百七十年九月七日ノ布達ニ依レハ司法大臣ハ復權ニ付キ大臣會議ニ通知ヲ爲シタル上許否ヲ裁決スルノ任ヲ有シタリキ、是レ此當時行政權ノ長官アラサリシニヨルモノナリ、今日ニアリテハ治罪法ニ於テ皇帝ニ屬セシメタル所ノ職務ヲ施行スル者ハ則チ共和政府ノ大統領ナリトス、

(一九二七號) 此復權ノ制度ハ理論上ニ於テハ大ニ望ヲ囑ス可キモノナリト雖モ、實際上現時ノ適用ニ於テハ希望シタル充分ノ結果ヲ與ヘサリキ、然レ且次第ニ進歩ヲ爲サ、ルニ非ス、即チ當初ノ復權ハ其甚タ少ナカリシガ宜シク左ノ表ヲ見ル可シ



裁可セラレタル復権一箇年ノ平均數

一年間平均

從千八百二十六年	一三
至千八百三十年	一三
從千八百三十一年	三三
至千八百五十年	三三
從千八百五十一年	七七
至千八百六十四年	七七

假政府ノ千八百四十八年四月二十二日ノ布達以來、復権ノ數ヲ増加シタルモノハ此制度ヲ輕罪ノ刑ニ處セラレタル者ニモ擴メタルニ因ル、此布達ノ結果トシテ千八百四十八年ニハ復権ノ數百十四ニ登リ千八百四十九年ニハ百ニ至リタリ、然レトモ是レ尙ホ極メテ少數ナリト云ハサルヲ得ス、爾來千八百五十一年ヨリ千八百六十四年ニ至ルマテハ年々ノ平均數七十七ニ減少シタリシガ其後又大ニ増加シタリ、則チ千八百六十九年ニハ其數三百四十五ニシテ千八百七十二年ニハ四百四十ノ大數ニ登リタリ

(三九二八號)千八百六十四年三月十九日ノ法ハ復権ニ尙ホ一ノ新タナル擴張ヲ與ヘタリ懲戒處分ニ依リ退職セシメラレタル公証人、書記及ヒ司法屬公吏(ラフィシエー、ミニステリ

エル)千八百四十八年ヨリ後ノ特別法ニ依リ終身或ル權利ノ失墜又ハ不能力ニ服ス、即チ千八百五十二年二月二日憲法ニ關スル布達ニ依リ選舉人タルコトヲ得サルコト、及ヒ千八百七十二平十二月二十一日ノ法ニ依リ陪審トナルコトヲ得サルコト是レナリ、然シテ新法ノ理由説明書ニ依レハ然ク權利ヲ奪ハレタル公証人及ヒ司法屬公吏ノ數一年平均七十六ニ下ラスシテ其當時此位置ニ在ル者二十以上ニ及ヒタリト云フ、千八百六十四年ノ法ハ則チ此等ノ者ニ輕罪ノ刑ニ處セラレタル者ノ復権ニ關スル治罪法ノ規則ヲ適用シタリ(一)實ニ重罪又ハ輕罪ノ被刑者ハ其權利ヲ回復スルコトヲ得テ懲戒處分ニ依リ退職セシメラレタル者ハ却テ終身其權利ヲ回復スルコトヲ得ズトハ決シテ容ル可カラサルノコトナレハナリ(二)

(一)復権ニ關スル千八百五十二年七月三日ノ法ノ恩典ヲ公証人、書記及ヒ司法屬公吏ニ擴メタル千八百六十四年三月十九日ノ法

(第一條 退職セシメラレタル公証人、書記及ヒ司法屬公吏ハ其退職ヨリ出タル失權及ヒ不能力ヲ解除セラル、コトヲ得)

(第二條 輕罪ノ刑ニ處セラレタル者ノ復権ニ關スル治罪法ノ總テノ規則ハ第一條ニ從テ爲シタル請願ニ適用セラル可シ

治罪法第六百二十條末項ニ依テ定メラレタル三年ノ期限ハ職務ノ止ミタル日ヨリ其經過



ヲ始ム)

(二)然レモ此復権ハ實際ニ於テハ甚タ少ナシ則チ其一年平均ノ數ニ箇ニ過キス

(一九二九號)刑法上ノ復権ヲ以テ商法上ノ復権ト混同ス可カラス、即チ商法第六百十二條ノ正文ニ從ヒ商法上ノ復権ヲ得サル者ト雖モ尙ホ刑法ノ復権ヲ得ルコトヲ得、治罪法ヲ改正シタル千八百五十二年ノ法ハ此點ニ付キ明カニ規定スルノ勞ヲ取リタリ(第六百三十四條則チ刑ノ言渡ニ依テ生シタル不能力ハ消滅スト雖モ商業上ノ法律若クハ習慣ニ固有ナル不能力ハ依然トシテ繼續スルモノニシテ其區別ハ眞ニ明カナリトス、茲ニ於テモ亦刑ノ執行權ノ消滅ハ民事上ノ利益ヲ全ク遺存セシムルヲ看ル可シ

(一九三〇號)國家ノ首長ハ治罪法ニ於テ規定シタル所ノ復権ニ關スル條件ヲ遵守スルコトナク又ハ其手續ニ依ルコトナク單ニ特赦ノ方法ニ依リ處刑ヨリ出タル所ノ權利ノ失墜ヲ解除スルコトヲ得ルヤ否ヤヲ知ルノ問題ハ是レ舊時ニ於テ已ニ起サレタル所ニシテ、今尙ホ疑義ニ係ル一問題ナリトス、此問題ハ則チ他ノ一面ヨリ見レハ復権ニ二ツノ種類アルヤ否ヤ即チ其一ハ治罪法ニ依テ規定セラレタル條件ト手續トニ服スル所ニシテ他ノ一ハ之ヲ要セサル所ノ二ツノ種類アルヤ否ヤヲ問フニ歸ス、孰レノ場合ニ於ケルモ復権ヲ裁可スル者ハ固ヨリ國家ノ首長ナリ然レモ治罪法ハ之カ條件ト手續トヲ定メ尙ホ千八百五十二年ノ新法ヲ以

テ之ヲ改定シタリ、然ラハ則チ問題ハ畢竟此手續ト條件トヲ不問ニ付スルコトヲ得ルヤ否ヤヲ決スルニ係ル

此問題ニ付キ國璽局ニ於テ實際ノ規則トシテ殆ント勝ヲ制シタル所ノ議論ノ主題ニ依レハ右ニ所謂刑ノ解除ハ左ノ二ツノ場合ニ於テ單ニ特赦ノ方法ニ依リテハ之ヲ爲スコトヲ得ト云フニアリ、即チ第一ニハ權利ノ失墜カ附加刑トシテ附着スル所ノ体刑ノ執行前ニ解除ヲ爲ス場合はナリ但此解除ヲ赦狀中ニ特記シタル時ニ限ル、第二ニハ刑法ニ於テ時トシテ剝奪公權又ハ監視ヲ主刑ト爲スカ如ク主刑トシテ權利ノ失墜若クハ剝奪ヲ言渡シタル時右ノ解除ヲ爲ス場合はナリ(一六〇六號及ヒ一六〇八號參觀)

此論定ハ二ツナカラ千八百五十二年ノ復権ニ關スル法律ノ正文ニモ精神ニモ之ヲ符合セシムルニ頗ル困難ナルコトハ蔽フ可カラサルコトナリトス○先ツ第一ノ論定ハ參事院ノ千八百二十三年一月八日ノ意見ニ基キタルモノニシテ此意見ノ論定ハ總テ此問題ニ付テハ全ク誤謬ニ出タル思想ノ上ニ活動セリ、即チ刑事ニ於テハ刑ヲ言渡シタル裁判ハ決シテ執行前ニ其効ヲ生スルコトヲ得ス、從テ法律上ノ不能力モ此執行ニ依ルニ非サレハ其効ヲ生セストノ思想是ナリ、個ハ其當時ニアリテハ民法第二十六條ノ在ルアルヨリシテ准死ニ關シテハ相當ノ論ナリシモ他ノ不能力ニ關シテハ業ニ既ニ不相當ノ論ナリ、且ツ特ニ今日ニアリテハ不



能力ハ則チ法律上單純ナル効果ニシテ刑ヲ言渡シタル裁判ノ確定シタル日ヨリ自然ニ其効  
 有ストノ法律上ノ元則ハ動ス可カラサルモノニシテ如何ナル例外ヲモ有スルコト大シ(一  
 六二五號參觀)特ニ刑法第二十八條ハ總テノ重罪刑ノ附加刑タル剝奪公權ニ付キ之ヲ明記  
 シタリ、曰ク(剝奪公權ハ刑ノ言渡ノ回復ス可カラサルモノトナリタル日ヨリ之ヲ受ケシム)  
 ト故ニ其重罪刑ノ言渡ニ係ルト輕罪刑ノ言渡ニ係ルト分タス被刑者ハ固ヨリ体刑ノ執行ヲ  
 遁ル、コトヲ得ヘシト雖モ毫モ此執行ニ關係セサル所ノ法律上ノ不能力ニハ遁ル、コトヲ得ス、  
 然ラハ參事院ノ意見ノ論法ノ全ク誤謬ニ係ルコトハ今日ニアリテハ殊ニ爭フ可ラサルモノナ  
 リトス○次キニ第二ノ論定、即チ主刑トシテ科シタル權利ノ失墜ノ解除ニ關スル論定ハ、  
 我輩ヲ以テ之ヲ觀レバ、新法ヲ以テ改正シタル治罪法第六百二十條ト固ヨリ相容レサルモ  
 ノトス(一九二五號插註ニ引用シタル此條ヲ看ル可シ)○故ニ我輩ハ本問題ニ付テハ方面ヲ  
 變シテ他ノ一面ヨリ別ニ之ヲ論究セント欲スルナリ

(一九三一號)治罪法ニ於テ規定シタル所ノ復權ハ通常ニシテ且ツ制規ニ遵ヒテ爲スモノナ  
 ルカ故ニ、我輩カ非常特赦ト呼ビタルモノ、理由トナリ得ヘキ所ノ例外ノ場合(一九一七號  
 參觀)ニ對シテハ毫モ満足ヲ與ヘサルコトヲ認メサルヘカラス、是ヲ以テ實際ニ於テ法律ニ規  
 定セサル場合ヲ生シ、裁判官ハ其情狀タル例外ニ復權ヲ與フルノ必要アリトスルモ、自ラ此

例外ヲ運用スルノ威權ヲ有セサルカ故ニ、法律ノ爲メニ拘束セラレテ遺憾ナリト雖モ遂ニ  
 復權ヲ與フルコトヲ得ストセンカ、若シ此場合ニ於テ法律上ノ不能力ニ關スル者ニ付キテ此  
 例外ヲ運用スルノ權利ヲ有スル高等ノ官憲ノ全ク之レナキ時ハ特赦ニ因テ有形的ノ刑例ヘ  
 ハ流刑、禁獄、又ハ懲役ハ或ハ全ク赦免セラル、ト雖モ剝奪公權及ヒ其他ノ權利ノ失墜ニア  
 リテハ法律カ復權ヲ爲スニ付キ限定シタル時間中ハ仍ホ復權ヲ得ルニ由ナキニ至ルヘシ、  
 是レ洵ニ避ク可ラサルコトナリ、此事ハ明カニ我法律ノ一箇ノ缺典ニシテ夫ノ重罪ノ刑ニ  
 特赦ヲ禁止シタリシ所ノ憲法議院ノ執リタル主義ノ遺物ニ外ナラス、而シテ此缺典ハ權利  
 ヲ奪フノ刑例ヘハ剝奪公權ヲ主ニシテ且ツ單ナル刑トシテ言渡シタル場合ニ於テ益々明白ナ  
 リトス、此場合ニアリテハ被刑者ハ元來復權ヲ得ルニ適スル所ノ如何ナル例外ノ情狀ヲ有  
 スト雖モ到底剝奪公權ヲ免ル、コトヲ得ス、而シテ非常特赦ノ權利ハ尤モ嚴明ニ且ツ尤モ完  
 全ニ此場合ニ及フコトヲ得サルナリ、掌璽官ノ勝ヲ制シタル所ノ適用方法ハ其目的タル此二箇  
 ノ欠典ヲ補足スルニアリ然レ此方法ヲシテ既ニ其基本ヨリシテ瑕瑾アル參事院ノ意見ニ  
 連結スル所ノ推理ニ基カシム可ラス、乃チ我輩カ明カニ說明シ來リタル所ノ意義ト且ツ復  
 權セシムルノ方法ナキハ此二箇ノ場合ニ於テハ治罪法ニ規定スル所ノ復權ハ非常特赦ニ  
 對シテハ効力ヲ有セサルカ故ニ遂ニ復權ナルモノナキニ至ルト云フノ方法ニ基カシメサル



ヘカラス、此説明ハ刑法又ハ治罪法ノ諸條ト符合セシムルノ方法(是レ決シテ能ハサル所ニシテ且ツ此問題タル既ニ眞實ニアラス)ニアラスシテ夫ノ被刑者ノ利益ニ解釋スト云ヘル補足ノ方法(一六六三號參觀)ト特赦ニ關スル原則ノ支配トニ因レルナリ

且ツ我輩ハ之ヲ復權(レアビリタシヨ)トモ權利回復(レアンテグラシヨ)トモ呼ハザルヘシ、何ントナレハ、復權若クハ權利回復ト云フキハ必ス或ル時間中權利ノ失墜シ其後テ初メニ復歸シタルヲ想像セサル可ラス、是レ實ニ復權ノ本質ニシテ此効果ハ我國ニ於テハ治罪法ニ規定シタル條件ト程式トニ由ルニアラサレハ生スルヲ得サレハナリ、又夫ノ隨意ニ復權狀ヲ與ヘタル所ノ舊王政府ノ遺傳ヲ茲ニ喚起スルニモアラス、本來此ノ如キハ非常特赦ノ性質ニアラサルナリ、抑々此特赦ハ例外ノ理由ニ因テ社會カ刑事裁判ノ効果ノ全部又ハ幾部ヲ拋棄スト云フノ思考ニ基キテ然ルモノトス、是ヲ以テ此特赦カ法律上ノ不能力ノ事件ニ與ヘラレタルキハ被刑者ハ嘗テ不能力ノ刑ヲ受ケサリシモノト看做サ、ルヘカラス、然リ而シテ此思考ハ夫ノ權利ノ剝奪又ハ不能力ニ關スル刑ハ其處斷ノ回復ス可ラサルモノトナリタル日ヨリ自然ニ効果ヲ生スト云フノ思考ト和合セシムルニハ如何スヘキヤ、蓋シ非常特赦ニ解除ノ未必條件ノ効ヲ附シ而シテ其特赦ノアリタルヤ其刑ハ解除シ特赦ノ効力ハ既往ニ溯リ初メヨリ其刑ノ効果ヲ生セサリシモノト看做スノ方法ニ由ルニアラサレハ和

合セシムルヲ得サルナリ 規則ノ瑕瑾カ條件ト期限トノ上ニ影響ヲ及ボスハ即チ此處ニ於テナリトス、此特赦ハ未タ有形的ノ刑ノ執行アラサル前ニ與ヘラレ且ツ特別ニ赦狀中ニ復權ヲ記載セラレサル可ラストノ限界ハ掌櫃官ノ慣用ニヨリテ採用セラレタル所ニ係リ相當ノ調和ニシテ且ツ認承スヘキモノナリ、然レモ處斷カ單ニ權利ノ失墜ノ刑ノミヨリ全ク有形的ノ刑ノ宣告ナキハ其所謂調和ハ毫モ看ルコトヲ得ス而シテ法ノ欠典ハ全ク此ニ顯ハル、モノトス

我カ輩カ舉ケ來リタル所ノ參事院ノ意見ハ屢々權カアルモノトシテ引用セラル、而シテ此意見ノ與ヘラレタル當時ニアリテハ參事院ハ王家カ治罪法ノ規則ヲ蔑視シ且ツ舊王政府ノ慣用シタル赦狀ニ復スルヲ得ト信シタリシ所ノ提論ニ對シ其特權ニ一箇ノ限界ヲ置キタル不屈不撓ノ所爲ニシテ我新法憲ノ守護者トナリタルモノナリ、然レモ參事院ニ於テ其推理ノ基本ト爲シタル所ノ諸般ノ論法ト且ツ特赦ト復權トヲ對偶ノ語トナシタルヲ以テ基本ト爲シタル所ノ論法トハ決シテ之ヲ眞實ナリト認承ス可ラス、此論法ハ確正ナル刑法ノ學問上ニ於テ認承スルヲ得サル者甚ク多シ故ニ此論法ヲ以テ遺傳ニヨリテ格言ノ如ク流布セシムルハ迷誤ノ一原因ナリ、而シテ我輩カ此意見ノ正文ヲ挿註ニ舉ケ(一)且ツ我輩ヲ以テ之ヲ觀レハ此學問上ヨリ排斥セサル可ラサル者ヲ特ニ明舉スルノ注意ヲ取リタルハ即チ此迷誤



ノ結果ヲ防クカ爲メナリトス。我輩ハ既ニ權利ノ失墜又ハ不能力ニ關スル刑ニ與ヘタル誤  
 謬ノ起算點ヲ示シタリ更ニ終リニ臨ンテ我輩ハ人ノ信用シ且ツ屢々復誦スル所ナリト雖モ  
 其實危險ニシテ邪僻ナル左ノ配對偶ノ語ヲ示スヘシ、曰ク(赦ハ帝王ノ恩典ヨリ出テ復權ハ  
 其裁判ヨリ出ツ)ト、實ニ特赦ノ舊時即チ不良ナル刑法ノ時ニ於テ存シタルハ帝王ノ意思又  
 ハ其時ノ偶然ニ從フ所ノ傾向、仁愛、偏估ニアリ、乃チ此恩典ノ語アル所以ナリ、夫レ恩典ノ語  
 ハ左ノ意味ヲ含蓄スル者トス、曰ク(予ハ君ノ爲ス所ニ從フ、君ノ隨意ニ任ス、君ノ笑顏、君ノ  
 頭顱ノ傾向、又「クラディヤテール」ヲ救ヒタル「セザール」ノ指ノ如ク君ノ擧ケタル指ニ從フ)  
 ト、恩典ノ語ハ演說者ノ口、歴史家、道德學者又ハ詩人ノ筆ニアリテ此ノ如キ時勢ニ適用  
 セラレテ善ク感應スル所ナレド、刑法ノ純理上ノ學問ニ於テハ既ニ同一ノ感應アラズ、夫レ  
 特赦即チ社會ニ屬スル所ノ一權利ノ拋棄ヲ以テ恩惠ヨリ出テ正理ニ因リタル者ニ非ストス  
 ルルハ十八世紀ノ哲學及ヒベンザムノ所謂ル眞個ノ虛偽ナリトノ謗ヲ受クルハ當然ナリト  
 ス、故ニ特赦ト復權トノ對偶ノ語ハ人ノ之ヲ言フヲ好ムニモ係ラス此語ヨリモ危險ニシテ  
 且ツ虛偽ナルモノハ世ニアラサルナリ、特赦ハ全ク復權ト同ク人類裁判ノ不完全ナル高等  
 ノ一箇ノ補助ニ過キス、唯通常ノ場合ノミヲ規定シ其他法律ノ欠典ナル所ノ非常ノ場合ヲ  
 斟酌スルニ係ルト(一九一七號及ヒ一九一八號參觀)被刑者ノ改過遷善若クハ公益上ニ生シ

タル世運ノ變遷ヨリシテ通常ノ場合ヲ斟酌スルニ係ルト(一九一九號參觀)ヲ問ハス、特赦ノ  
 理由ノ基礎ハ總テ社會ノ正理ノ思考ナリトス。此第二ノ場合ニ於テハ有形的ニ關スル刑ニ  
 付キテハ通常特赦ヲ以テシ、權利ノ失墜ニ關スル刑ニ付キテハ復權ヲ以テス。第一ノ場合  
 ニ於テハ何種ノ刑タルヲ問ハス總テ非常特赦ヲ以テセサルヘカラス

(一九二二年二月八日付ノ參事院ノ意見ハ即チ左ノ如シ)

(法制部、會計部、及ヒ軍事部ハ大藏大臣閣下ノ請求ニヨリ掌璽官殿下ノ命令ニ付キ施体又  
 ハ加辱ノ刑ニ處セラレ其裁判執行ノ後又ハ特赦ニ因テ赦免セラレタル所ノ退職軍人ハ再  
 ヒ其恩給ヲ享有スルコトヲ許サル、爲メニハ法律上ノ復權ヲ與ヘラレサル可ラサルヤ否ヤ  
 ノ問題ヲ討論スル爲メニ集會シ、某々ヲ檢査シ且ツ討論シタル後、發議ニ係ル問題ニ付キ  
 テハ左ノ問題ヲ講究シ及ヒ解釋スルヲ以テ必要トナスコトヲ認メタリ即チ、ハ、ハ、ハ、  
 第三問 未タ處刑裁判ノ全ク執行セラレサル前ニ與ヘラレタル絶對ニシテ且ツ完全ナル  
 特赦狀ハ復權ニ代ルノ効力アリヤ  
 第四問 裁判執行ノ後ニ與ヘラレ而シテ被刑者ノ復權ニ關シ如何ナル條件ヲモ有セサル  
 所ノ赦狀ハ治罪法ノ復權ニ關スル規則ヲ循奉セサルコトヲ許スヤ  
 第五問 特ニ赦狀中ニ明記セラレタル條件ニヨリ治罪法ニ規定シタル復權ノ程式ヲ循奉



セサルヲ許スヤ

第三問ニ付キテハ刑事ニ於テハ總テ處刑ノ裁判ハ執行前ハ其効ヲ生スルヲ得サルヲ若シ裁判執行前ニ特赦ノアタヘラレタルホハ初メヨリ不能力ノ刑ヲ受ケサリシヲ隨ヒテ元來復權ハ被刑者カ實際奪ハレタル所ノ法律上ノ不能力ヲ赦スノ目的ヲ有スルニ外ナラサルニヨリ此場合ニ於テハ復權ヲ請願スルノ要アラサルヲ理由ニ由リ

第四問ニ付キテハ勅令第六十八條ハ之ニ反對セサル所ノ法ヲ維持シタルヲ治罪法ニ於テ被刑者カ裁判執行ニヨリテ受ケタル法律上ノ不能力ヲ免ル、カ爲メニ被刑者ニ許シタル所ノ復權ノ必要ハ帝王ニ特赦ヲ爲シ及ヒ刑ヲ減輕スルノ權利ヲ與フル所ノ勅令第六十七條ニ毫モ反對セサルヲ特赦ト復權トハ其實其原則ニ於テモ其効力ニ於テモ眞理上異ナルヲ特赦ハ帝王ノ恩典ヨリ出テ復權ハ其裁判ヨリ出ルヲ特赦ノ効ハ裁判ヲ消滅スルニ非スシテ唯刑ヲ已メシムルニアルヲ治罪法ノ正文ニ依レハ復權ヲ得ルノ權利ハ被刑者カ其刑ヲ受ケタル後ニ非サレハ生セサルヲ復權ノ効ハ政事上ト民事上トヲ問ハス被刑者カ受ケタル所ノ諸般ノ不能力ヲ免ル、ニアルヲ此不能力ナルモノハ法律カ社會又ハ第三者ニ對シ與ヘタル所ノ擔保トス依テ被刑者ニ與ヘタル特赦ハ第三者ノ利益ヲ爲メニ與ヘタル處斷ヲ悉ク充タスニ非サレハ此不能力ヲ免ル、ヲ得サルヲ理由ニヨリ

第五問ニ付キテハ王家ノ特權ハ勅令ニヨリテ維持セラレタル法律ノ命スル所ニシテ立法上ノ威權ニ由ルニアラサレハ免ル、ヲ得サル所ノ義務ヲ國民ニ免レシムルマテニ擴張セサルヲ理由ニヨリ

左ノ意見ナリトス

第一 施体又ハ加辱ノ刑ノ効果ニ因テ失ヒタル恩給ハ被刑者ノ復權ノ後ニアラサレハ再ヒ享有スルヲ得サルヲ

第二 此刑ノ期限間ハ被刑者ノ寡婦孤兒ニ對シテ總テ此恩給ノ補助ヲ與フルヲ得サルヲ

第三 裁判執行ノ前ニ與ヘラレタル絶對ニシテ且ツ完全ナル特赦狀ハ初メニ溯リテ法律上ノ不能力ヲ免レシメ更ニ復權ヲ要セサルヲ

第四 裁判執行ノ後ニ與ヘラレタル特赦ハ復權ノ効ナキカ故ニ復權ヲ得ント欲セハ更ニ治罪法ノ規則ニ從ヒ復權ヲ請願セサル可ラサルヲ

第五 刑ノ執行ノ後與フヘキ赦狀ニハ治罪法ニ於テ規定シタル復權ニ關スル程式ヲ遵奉セシテ直チニ復權ヲ得ルト云フヲ記載スルヲ得サルヲ是レナリ

此參事院ノ意見中圈點ヲ附シテ慎シテ適用スヘカラサル所ノ論法ハ左ノ如シ

第一 刑事ニ於テハ總テ處刑ノ裁判ハ執行前其効ヲ生スルヲ得サルヲ是レ處斷ノ回復



スヘカラサルモノトナルヤ即チ自然ニ生スル所ノ法律上ノ不能力ニ付キテハ全ク虚偽ノ説ナリトス

第二 特赦ハ帝王ノ恩典ヨリ出テ復権ハ其裁判ヨリ出ルト云フ 是レ虚偽ノ對偶語ニシテ特赦ハ純理的刑罰ニ於テハ復権ノ如ク不完全裁判ノ補助物ナラサルヘカラス

第三 特赦ノ効ハ裁判ヲ消滅スルニアラサル 是レ争フヘカラサル論法ナリ然レハ獨リ特赦ノミナラス復権ニ付キテモ亦然リトナス 特赦ノ効ハ單ニ刑ヲ已メシムルニアラズ云フコト 是レ既ニ執行ヲ初メタル刑ニ關シテハ單ニ特赦ニ付キテ然ルモノニシテ復権ニ付キテハ常ニ必ス然ルモノナリ

第四 被刑者ニ與ヘタル特赦ハ第三者ノ利益ノ爲メニ與ヘタル所ノ諸般ノ處分ヲ充タスニアラサレハ其不能力ヲ許スヲ得スト云フ 是レ不適實ナル類推ナリ第三者ノ利益ノ爲メニ與ヘタル處分ハ第三者ノ爲メニ既得權ヲ構成スルモノニシテ公權ハ以テ之ヲ處置スルコトヲ得ス之ニ反シテ刑ノ名義ヲ以テ科シタル所ノ權利ノ失墜又ハ不能力ニ付キテハ公權ハ之ヲ處置スルコトヲ得ヘキナリ

(一九三三號) 法律ノ正文ニ依レハ政府カ復権ノ程式ニ從フヲ要セスシテ自ラ其適當ナル時機ト情狀トニ依リ或ル場合ニ已メシムルノ威權ヲ有スル所ノ或ル權利ノ失墜又

ハ不能力ノ存スルハ争フヘカラサルコトナリトス、我輩ハ無期施体ノ刑ニ附加スル所ノ生存間ノ贈與若クハ遺囑ノ贈與ニヨリテ贈遺ヲ爲シ又ハ贈遺ヲ受クルノ不能力ヲ講究シタル事、及ヒ流刑若クハ徒刑ニ處セラレタル者ノ殖民地ニ於テノ位置ヲ講究シタル事ヲ見タリキ(一五五三號、一五五四號、一五五七號、一六〇〇號、一六〇一號、及ヒ一六〇五號參觀)

(一九三四號) 我輩ハ終リニ臨ミ、我輩カ檢査シ來リタル所ノ三箇ノ事項即チ被刑者ノ死去、期滿免除、及ヒ棄權ニ付キ刑事裁判ノ執行權ト民事裁判ノ執行權トノ成立ニ關シテハ完全ナル不羈獨立アルコトヲ覆説スヘシ、民事裁判ノ執行權ハ其裁判ノ効ニ因テ一旦生シタル以上ハ常ニ刑事裁判ノ執行權ト相離レテ存シ唯民法ノ規則ノミニ依テ支配セラル、(一七五〇號參觀) 治罪法ハ期滿免除ニ關シテハ特ニ之レカ明文ヲ掲ケタリ、曰ク(第六百四十二條、重罪輕罪若クハ違警罪事件ニ付キ與ヘラレタル裁判書ニ記載シタル民事處斷ニシテ回復ス可ラサルモノトナリタル者ハ民法ニ規定シタル規則ニ循ヒテ期滿免除ヲ得)ト

第二卷 刑事裁判

第一篇 構成

第一章 學理上ノ大意

第一節 緒論







## 第二節 須ラク設置スヘキ官職及ヒ之ニ伴ヒテ創設スヘキ各種ノ官廳

(一九三七號)凡ソ一事ヲ成サンガ爲ニ使用スヘキ勢力ヲ構成スル爲メニハ必ズ豫メ之ヲ以テ達スヘキ個々ノ目的ヲ定メ以テ此個々ノ目的相合シテ終ニ豫期ノ一事ニ極到スルヲ計ラザルラス然ルニ今刑事裁判構成及ヒ終極ノ目的(刑法適用)ヲ達センコトヲ司ドル官廳及ビ官吏ノ仕組ニ關シテ官職ハ前ニ述ベタル個々ノ目的ニ比スベク此官職ニ任スヘキ官廳、官吏ハ此個々ノ目的ヲ達スルニ使用スベキ勢力ノ各機關ニ較スベキヲ以テ應ニ創設スヘキ官廳ノ如何ヲ知ント欲セハ必ズ先ツ行ハシメント欲スル官職ノ如何ヲ知ラサルヘカラス、官廳ハ官職ノ爲メニ設ケラルベク官廳ノ爲メニ官職ヲ設クベカラス

(一九三八號)若シ爲シ得ベクノハ第一ニ希望スベキ目的ハ犯罪人ナカラシムルニアリ社會萬般ノ制度ハ常ニ此目的ニ由ルベキハ勿論ナレモ壓制的豫防策ハ危險ノ恐レアルヲ以テ人類ノ活動ヲ妨クルコトナリ犯罪ノ原因ヲ消滅或ハ減少セシムルノ方法ニ由ラザルベカラス(一九〇號參觀)茲ニ公權ノ一部ナル行政上ノ處分ノ間斷ナキ注意ト監督トニヨリ犯罪ヲ豫防スル一官職アリ是レ所謂ル行政警察ナルモノニシテ(六一二號以下參觀)裁判構成即チ處罰官廳ノ司ドル所ニ非ズ

(一九三九號)處罰官廳ノ職役ハ既ニ犯罪アリタル後ニ非ズシテ行フヘカラス 吾人ハ分析

觀察ノ結果トシテ諸般ノ犯罪ニ對シ終極ノ目的(刑法ノ適用)ヲ達スルニハ個々ノ四目的ヲ區別セサルヘカラルヲ知レルニ由リテ構成法ノ當否ハ第二ノ問題トシテ必ズ先ツ設置スヘキ四個ノ官職アルヲ決論ス

第一 犯罪及ヒ犯人ヲ搜索シ證據ヲ拾集シテ裁判ヲ司トル官廳ニ交付スルコト、是レ發端ノ所爲ニシテ其主タル目的ハ裁判官ヲシテ罪ヲ糾治セシムル爲メニ適切ナル諸般ノ資料方便ヲ豫備スルニアリ之ニ因テ人之ヲ治罪ノ業爲ト名ク

第二 前段ノ事了リタル上ニテ證據ノ全体ヲ辨明シ斟酌シ論議シ最終ニ決定スルコト、是レ裁判ノ業爲ナリ

第三 裁判ノ效果ヲ生セシムルコト、是レ執行ノ業爲ナリ

第四 此各種ノ業爲ヲシテ完全確實ニ成就セシメント欲セハ是等業爲ノ成就ニ注視シ是等業爲ヲ司トル官廳ヲ提醒刺衝シテ之ヲ活動セシメ兼テ此等業爲ヲ請求スルヲ以テ本務ト爲ス所ノ第四ノ業爲者ヲ設置スルコト、是レ起訴及ヒ求刑ノ官職ナリ

是ヨリシテ以上四種ノ官廳ヲ創設、組織スルノ必要生ス 即チ其官職ハ我國ニ於テ行政警察又ハ豫防警察ト呼フ者ニ對スル司法警察又ハ處罰警察ト名クル所ノ治罪ノ官廳、裁判ノ官廳即チ通常ニ所謂裁判所 執行官憲及ヒ我國ニ於テハ檢察官ト名クル起訴及ヒ求刑ノ官



憲是レナリ

(一九四〇號) 人若シ動作ヲ以テ専ラトナシ而シテ迅速臨機ヲ要スル所ノ業爲ニ付キテハ一體總括ヲ以テ必要ナル條件ト爲スヲ知ラハ各人個々各部長官ノ命令ノ下ニ執務スル官廳官吏ニ依ルノ必要ナルヲ悟ラン、執務勞役ハ命令シ得ヘシ又指揮シ得ヘシ、之ニ反シテ事物ヲ辨論決定スルヲ以テ任トスル業爲ニ付キテハ其事ノヤ、重大ニ關ルヤ自由ナル多クノ智識ヲ集メテ此決定ヲ爲スヘク決シテ上下相聯ル等級ヨリ生スル命令壓抑等ハ決シテ之ヲ用フヘカラス、人ノ持論良心ハ決シテ之ニ命令スヘカラス、此理ヨリシテ三個ノ官廳即チ治罪、執行又起訴及ヒ求刑ノ官廳ニ付キテハ各人個々ニ動作スヘキ構成法ヲ要シ裁判ノ官廳即チ裁判所ニ付キテハ集合シテ論辨決定スヘキ一體アリテ事件必要ノ度ニ隨ヒ其數ヲ増減スヘキヲ要ス裁判官ノ單一ナルハ最モ簡易ニシテ且ツ最モ迅速ヲ要スル輕小ノ事件ニ係ルハニアラサレハ適當トスヘカラス英人カ重大ナル事件ニ關シテモ單一ノ裁判官ナリト云フハ其語タル適切ニアラス、何トナレハ其裁判官ハ羅馬ノ裁判官ノ如ク議長トナリテ陪審ヲ指揮スレハナリ、之ニ加フルニ英吉利ノ重罪裁判所ノ裁判長タル判事ハ羅馬ノ裁判官カ時々己レノ顧問タル法學者ノ意見ヲ用ヒシカ如ク法律上ノ困難アルハ意見ヲ諮ハン爲ニ補助裁判官ト見做スヘキ一人ノ同僚ニ報告スルコトアリ

第三節 裁判ノ官職中ニ於ル種々ノ任務

(一九四一號) 豫審ノ事務モ常ニ障礙ナキ進行ヲ得ヘカラス時トシテハ裁判上ノ問題即チ議論シ判決スル任務ノ參加スルヲ要スル所ノ裁判上ノ問題ヲ組成スル事件ノ生スルコトアリ而シテ特ニ豫審事務ノ結了シタルハ社會ノ爲メニモ被告人ノ爲メニモ處罰權ヲ有セル裁判官ニ委スルノ前ニ於テ此人ヲ裁判ニ附スヘキヤ否ヤヲ決スル爲メニ組織シタル一個ノ裁判權ニヨリテ決定セシムルノ一層進ミタル一個ノ擔保ナリトス 是ヲ以テ此官職ノ爲メニ豫審裁判權ヲ創設セルカ上ニ公判ノ裁判權ヲ創設スルニ至ル凡ツ緻密ナル器械ハ一方ヨリ視レハ最モ勢力アリテ最モ確實ナル効果ヲ生スルノ利益ヲ有シ得ルト雖モ又他ノ一方ヨリ視レハ必然最モ大ナル時子ノ消耗ヲ要スルノ不利ヲ有スルモノトス是レ乃チ直チニ公判ノ裁判權ニ至ラスシテ其以前ノ事務中ニ於テ使用スル所ノ官廳及ヒ豫審裁判權ニ於テモ亦然リトナス然レモ刑事上ノ結果ノ重大ナル事件ニ於テハ總テノ刑事訴訟ニハ如何ニ迅速ヲ要スルニモセヨ其結果ノ重大ニ相當スヘキ擔保ヲ要シ且ツ此擔保ヲ多クスルノ必要ハ敢テ多少ノ遲滞ヲ來スヲ願ミサルナリ(一)反之刑事上必要ノ少ナキ訴訟ニ於テハ証據ノ狀況ノ許ス限リハ毎ニ社會ノ爲メニモ被告人ノ爲メニモ此前加ノ手續ニヨリテ生スル所ノ遲滞ヲ減少スルチ良トナス



(一) 此前加手續ナル擔保の必要ハ人民ニ公衆告罪ノ權利ヲ屬スル流派ニ於テモ尙ホ之ヲ感セリ即チ羅馬ニ於テハ法官ノ前加ニヨリ又英吉利ニ於テハ告罪ノ陪審ニヨリテ此必要ヲ満足セシメタリ

(一九四二號) 公判ノ裁判權ニ付キ其判決ノ職役ニ於テ更ニ他ノ一個ノ解剖ヲ現出ス實ニ此裁判權ニ付キテハ其問題タル、常ニ二重ナリトス即チ最初ニハ有罪トノ問題ニシテ次キニハ法律適用ノ問題はレナリ 凡ソ慣習ニ由レハ人此問題ヲ呼ンテ一事實ノ問題トナシ他ノ一法律ノ問題トナス事實カ第一ノ問題ヲ支配シ法律カ第二ノ問題ヲ支配スルハ素ヨリ確的ノコナリ然レモ又法律ハ必ず有罪無罪ノ問題中ニ混淆スルノミナラス時ニ或ハ最モ辨別シ難ク且ツ最モ重大的ニ混淆スルモノトス又他ノ一方ヨリ視レハ事實ハ法律ノ適用上ニ勢力ヲ及ボスモノニシテ裁判官ヲシテ各事件上ニ現出スル所ノ各人ニ關スル情況ノ細微ナル差異ニ隨ヒ刑ヲ變更スルコトヲ得セシムル爲メニ法律ノ適用ニ於テ法律カ或ル程度ヲ裁判官ニ與フル場合ニ就キテノミ論スルモ尙ホ然リトナス然ラハ則チ全然事實ト法律トヲ區別アル二個ノ問題ニ分離スルコト能ハサルヲ以テ眞實ナリトス是ニ於テカ我輩カ慣用ノ言辭ヲ排斥シ我輩カ最モ確的ナリト信スル所ノ左ノ言辭ヲ以テ之ニ代ヘント欲スル所以ヲ觀ルヘシ其言辭トハ犯罪有無ノ問題法律適用ノ問題はレナリ

(一九四三號) 然リト雖モ論理上ニ於テ既ニ無形的ノ方法ヲ以テ此ノ如ク分離シタリトスルモ之ニ實際ノ裁判構成ヲ適合セシメ公判ノ裁判權ヲ以テ二種ノ裁判官ニ分析スルヲ適當トナスヤ即チ一ハ第一ノ問題ヲ決定スルノ職役ヲ有シ他ノ一ハ第二ノ問題ヲ決定スルノ職役ヲ有スルモノニシテ人ノ常ニ言フ如キ事實ノ裁判官及ヒ法律ノ裁判官ニアラスシテ我輩ノ採用スル所ノ言辭ニ從ヒ犯罪有無ノ裁判官ト法律適用ノ裁判官トノ二種ノ裁判官ニ分析スルヲ適當トスルヤ如何

我輩ニ於テハ是ノ如キ區別ハ勿論儼然タル區別ナレドモ之ガ爲ニ二個間ニ狹隘ナル聯結アルハ亦誣ユメカラズ故ニ若シ此二個ノ問題ヲシテ最モ大ナル保證ヲ與ヘ最モ大ナル結果ヲ生スルヨリ引致シタル思考ニシテ一層緻密ナル一個ノ機關ヲ採用スルコトニ決定セシメサルニ於テハ機關ヲシテ單純ナラシメ動作ヲシテ配合宜キヲ得セシメンガ爲ニ同一ノ裁判官ヲシテ總テ二個ノ問題ヲ決セシムルヲ以テ利益アリトス此思考ハ結局總テ此ノ如キ分析ノ方法ニ於テ人民ヲシテ刑事裁判權ノ施行ニ關與セシムルヲ得ルニ至ルモノトス嗚呼是レ人民ノ政權ニ參與スルノ價值アル自由人民ノ大ナル結果ナリトス  
前段ノ推理ヨリシテ此緻密ノ機關ハ之ヲ或ル肝要ナル訴訟ニ使用スベシト雖モ刑當ニ輕カ  
ルベキ訴訟ニマデ擴充スヘカラサルコトヲ論決シ得ヘシ(一)



(一)特二千八百六十三年ノ改正後ニ於テ輕罪ニ生シタル所ノ必要的ハ最早之ヲ刑ノ梯子  
中然ク下階ニ置クヲ許サス因テ是レヨリシテ千八百七十年オルトラン氏カ議長トナリ  
治罪法ノ改正ヲ任セラレタル委員ヨリ陪審ヲ輕罪事件ニ適用スルノ草案起リタリ

第四節 各種及職中ニ於ル不抵觸及ヒ抵觸

(一九四四號)我輩カ舉ケ來リタル事務ノ四個ノ順序(豫審、裁判、執行、起訴及ヒ求刑)ノ順序  
ニシテ一旦定マリタル上ハ各々異ナリタル官廳又ハ官員ヲシテ之ヲ行ハシムルヲ適當ト  
スルヤ否ヤヲ講究スルハ裁判構成ノ事業上ニ於テ必要ナル一問題ナリ、各事務中互ニ全ク  
相抵觸スルニ由リ一廳一員ニテ兩ツナカラ合セ行フヘカラサルハ何ノ事務ナリヤ又ハ全然  
抵觸セサルモ人員ヲ異ナラシムル爲ニ大ナル擔保ヲ與フル事務ハ如何ナルモノナリヤ  
此問題ヲ講究スルハ左ノ重モナル眞理ヲ認ムルニ至ルヘシ

(二九四五號)第一ニ起訴及ヒ求刑ノ官職則チ檢察官ノ職役ニ對シテハ左ノ如シ  
此職役ハ全然裁判ノ職役ト相抵觸スルモノトス何トナレハ凡ソ人ハ一個ノ訴訟ニ付キ同時  
ニ裁判官トナリ關係人トナルヲ得サレハナリ(一)

(二)我實際ノ裁判例ニ於テ此問題ニ關スル一ノ支流ノ論カ左ノ如キ狀態ヲ以テ現出シタ  
リ即チ一法官アリ輕罪事件ニ於テ檢察官ノ職役ヲ以テ公訴ヲ指揮シタル後同一ノ裁判所

ノ裁判長ニ任セラレ其裁判長ノ身分ヲ以テ該事件ノ裁判ニ關與シタリ此二個ノ職役ハ相  
抵觸スルカ故ニ此抵觸タル、一ノ職役ヨリ他ノ職役ニ轉シタル所ノ人ニ從ハサルヤ隨ヒ  
テ一ノ無効ヲ生セサルヤ 我大審院ノ其刑事局ニ於テハ千八百六十年三月二十三日ノ案  
却ノ判決ニヨリテ相抵觸スルモノト爲シ隨ヒテ無効ヲ生スト爲シ而シテ此無効ハ控訴裁  
判官ノ面前ニ提出セサリシヲ以テ無効タルノ力ヲ失ヘリト判決シタリ 此判決 第一ノ  
部分ハ之ヲ記憶スルノ必要アリトス然レモ第二ノ部分ニ付キテハ我輩之ニ同意ヲ表スル  
一ヲ得ス何トナレハ我輩ノ意見ヲ以テスレハ刑法ニ於ル不管理ハ常ニ公安ニ關スルカ故  
ニ何時ニテモ之ヲ提出スル一ヲ得ヘク且ツ裁判官ハ職權ヲ以テ自ラ之ヲ論セサルヘカラ  
サレハナリ

又檢察官ノ職役ハ全然豫審ノ動作ト抵觸スルモノニ非ス何トナレハ各關係人ノ其証據ヲ搜  
索シ之ヲ蒐集スルハ自然ニ出レハナリ民事ニ於テ爲ス所ハ則チ此ノ如ク又昔時刑事ニ於テ  
モ亦此ノ如クナリシナリ 然レモ刑事ニ於テ証據ノ搜索ニ付キ社會ト被告人トニ關スル所  
ノ位置ノ公平ヲ確實ニスル爲メ立法者カ茲ニ論スル所ノ二個ノ職役ヲ分離シ各々職役ノ異  
ナリタル人員ヲシテ施行セシムルヲ欲スルニ於テハ是レ裁判構成ノ最モ甚タ純白ナル點  
ニ達シタルモノト謂フ可シ但シ此ノ如ク分離スルトハ最モ大ナル保証ヲ與フルノ名義ヨリ



出タルニ過キサルカ故ニ檢察官カ証據搜索ノ爲メニ動作セストイフ原則ハ司法警察官カ不在ノ爲メニ眼前ニアリテ容易ニ採集セラル、証據ヲ消滅セシムルニ至ルガ如キ急激ノ場合ニ於テハ停息スヘシ

(一九四六號)豫審事務ヲ換ヘテ言ヘハ司法警察官ノ職役ニ對シテハ左ノ如シ  
此職役ハ全然裁判ノ職役ト相抵觸スルモノニ非ズ何トナレハ裁判官ハ自ラ証據ヲ搜索シ蒐集シ現場ニ臨檢シ諸証據人ヲ取調フルヲ得ルモノトセハ其豫審ハ寧ロ之レカ爲メニ一層完全ナルヲ得ヘケレハナリ若夫レ此豫備ノ職役或ル部分ニシテ或ル特別ナル官廳ニ任セラレ、ニ至リテハ是レ事實上裁判權ノ自カラ之ヲ完行スルヲ能ハサルニ由レルノミ  
然レモ豫審事務中ニ得タル所ノ嫌疑又ハ成リタル心証カ公判廷ニマテ此事務ヲ行ヒタル者ニ伴隨シ且ツ辨護ノ自由ト公開トノ下ニ於ケル議論及ヒ對審辨論ニ由テ事件ノ面目ヲ一新スルニ拘ハラズ識ラス知ラス其精神ヲ支配スルナキヤヲ恐ル、ヨリシテ遂ニ裁判構成カ一層大ナル保證ノ名義ノ下ニ豫審ノ職役ト公判ノ裁判權ノ職役トノ間ニ抵觸アリト定メタルニ至リテハ最モ純白ナル點ニ達シタルモノナリト論決セサルヘカラス但シ此抵觸ハ豫審ノ裁判權ニ付キテハ存在セス(一)

(二)此點ニ關シテハ豫審裁判官ニ初審ノ各裁判權ヲ屬スル所ノ我治罪手續ト豫審裁判官

ハ會議局ニタモ出席スルヲ許サ、ル所ノ千八百七十三年ノ埃太利治罪法ノ治罪手續トノ間ニ最モ顯著ナル一差異アリテ存ス

一九四七號)第三ニハ公判事務ニ對シテハ左ノ如シ

豫審ノ裁判權ノ職役ト公判ノ裁判權ノ職役トノ間ニ於ルト同一ノ理由ニ因テ直ニ相離ル、ヲ可トス若シ豫審ノ職役ニ與カリタル所ノ者カ公判ノ職役ニ干涉スルヲ許サレズトセハ其保證タル最モ大ナリトス此原則ニ例外テ許ス場合ハ唯刑事上ノ必要少ナキ事件ニシテ人員欠乏ノ時ニ於ケルノミ

### 第五節 隸屬

(一九四八號)凡ソ官廳、官員ノ組織ハ其活動ニヨリテ結局一般普通ノ一結果ニ歸セサルヘカテサルヲ以テ恰モ數多ノ機關ヨリ成立チタル諸般ノ器械ニ於ルカ如ク是等ノ官廳若クハ官員ハ協同シテ生スヘキ所ノ結果ト喚起シ又ハ喚起セラル、トニ隨ヒ規則上或ハ合同シ或ハ各々異ナリタル一合体ニヨリテ各々互ニ從屬スルノ必要アリトス此規則ニ遵ヒタル從屬ハ公權ノ事件ニ付キテハ之ヲ名ケテ隸屬ト曰フ我輩ハ裁判構成ニ付キ裁判權ノ隸屬ト官吏ノ隸屬トヲ區別スヘシ

(一九四九號)裁判權隸屬ニ關シテハ左ノ二種ノ從屬アリ



第一、左ノ意義ニ由リ裁判權ノ一ヲシテ他ノ一ニ從屬セシムルモノトス即チ一事件カ一裁判權ニヨリテ裁判セラレタル後更ニ之ヲ裁判シ前裁判ヲ確認シ或ハ變更消滅セシムル威權ヲ有スル所ノ上等ノ裁判權ノ前ニ提起シ得ベク此裁判ノ後更ニ上等ナル第三級ノ裁判所ニ及ビ第三第四、此各隸屬ノ極點ニ達スルマテ漸及スルモノトス是レ要スルニ屢次且ツ繼續シテ互ニ上級ナル裁判權ニ依テ同一ノ事件ヲ裁判セシムルニ歸スルモノトス

此繼續スル上訴ノ種類ハ名ケテ控訴ト曰フ各裁判權ハ之ニ一個ノ階級ヲ成スガ故ニ人之ヲ裁判權ノ一級二級三級等ト云フ又此裁判權ハ初審再審三審又其以上即チ終審ニ裁判スル所ノ極點ニ設置セル裁判權ニ至ルマテヲ裁判スト云フ此終審ニ裁判スル裁判權ハ其居ル所ノ地位ニ由リテ我邦ニ於テハ之ヲ無上裁判權ト稱ス此裁判權タル無上ナリトス是レ事件ノ裁判ニ付キテハ復タ是レヨリ上ニ如何ナル裁判權モアルナキニ由ルナリ(無上トハ最上等ノ地位ニシテ伊太利語ノ「ソアラナト」又ハ「ソヴラナー」ナル者是レナリ因テ是レヨリ佛蘭西ノ「ゾーヴレーヌ」ナル語出タリ)而シテ其裁判ハ之レト同一ノ理ニヨリ止極シタル(アレテ)決定ヲ成スヲ以テ之ヲ「アレ」ト名ク

譯者曰ク「アレ」トハ止極ノ意義ヲ有シ總テノ終審裁判ヲ指ス爲メニ用サレ所ノ語ナリ蓋シ終審裁判ハ裁判ノ極點ニ止マルモノナレハナリ故ニ佛蘭西ニテハ「アレ」ト云フ也

ハ終審裁判ニシテ始審裁判ニハ「ジュエーシユマン」ト云フ「ジュエーシユマン」ハ以テ終審裁判ト始審裁判トヲ別ツノ語アリ然レモ我邦ニ於テハ此ノ如キ區別アルノ語ナキヲ以テ「アレ」トモ亦「ジュエーシユマン」ト同シク以下總テ「裁判」ト譯ス觀者之ヲ諒セヨ

(一九五〇號)昔時ハ裁判權ノ階級多クシテ數多ノ繼續的ノ控訴ヲナスヲ得タリシカ後ニ至リテハ一般ニ一個ノ控訴ノミヲ許シ即チ裁判權ヲ二個ノ階級ニ減シタリ 我輩ノ確信スル所ニ由レハ毫モ階級アルヲ得サルモノトス即チ決シテ控訴ヲ用サルトナク寧ロ(今茲ニ問題外ナル民事ハ姑ラ措キ刑事ニ於テハ)常ニ裁判權ノ單一ノ階級ニ止マルヘキト是レナリ蓋シ其階級アルコトハ裁判ノ延滯事件ノ轉送費用ノ増加、殊ニ之カ爲ニ裁判所ノ判決ニ來テヘキ抵觸ハ以テ裁判尊嚴ノ虧損ヲ生スヘシ、而シテ唯其得ル所ハ第二裁判官ノ判決ニ極到スルニ過キスシテ犯罪有無ノ問題ニ付キテハ毫モ第一ノ裁判官ノ判決ヨリ良ナルヲ保スヘカラス殊ニ第二ノ判決カ唯書類ノミニ依テ行ハレ第一ノ裁判官カ取調ヘタル証人ノ新タニ出廷スルヲモアラサルニ於テハ毫モ其第一裁判ヨリ優レルヲ保スヘカラス是レ即チ我輩ノ信據スル理論ノ理由ノ約說ナリトス

(一九五一號)第二ニハ諸裁判權ヲシテ尙一層高尚ナル職役ノ意義ニ於テ從屬セシム即チ事件ヲ裁判スルヲナク裁判其物ヲ裁判シ又ハ裁判施行ノ妨害セラル、場合ニ於テハ之ヲ防遏



又ハ或ル非常ノ理由アリテ裁判管轄ノ變更アルコトヲ要スル場合ニ於テ裁判ノ施行ヲ補フ爲ニ成立ツ所ノ最モ高尙ナル職役ノ意義ニ於テ從屬セシム、左ニ記載スル所ノモノ是レナ

第一、法律ノ錯誤若クハ違背ノ爲メノ破毀、此場合ニ於テハ其事件ハ破毀ノ後ニ至リテハ自然ニ今破毀ニ係ル判定以前ト同一ノ點ニ置カル、モノトス(裁判破毀請求ノ上告)

第二、事實ノ錯誤ニヨリテノ破毀、錯誤著明ニシテ殆ント有形的ニ顯ハレタルヲ以テ確定裁判ニ一不動的權力ヲ與フル公法ノ原則ニ對スル例外トシテ此ノ如キ錯誤ノ爲メニ汚サレタル判決ヲ無効ト爲スヲ必要トナスヘキ例外ノ場合ニ於ケル事實錯誤ニ由リテノ破毀、此場合ニ於テハ可及的其事實ヲ此判決以前ニ於ルト同一ノ點ニ置クモノトス(再審ノ訴)(一)

(二)此點ニ付キテハ我法律ハ夫ノ甚タ世運進歩ノ後ニ在ル埃太利法律ト異ニシテ唯被告ノ利益ノ爲メニ再審ノ訴ヲ許シタリ

第三、管轄ニ付キ與フヘキ判決、即チ異ナリタル官廳ノ間ニ起リタル或ル抵觸ニシテ普通ノ脱路ナク裁判ノ施行ヲ停止シ若クハ妨害シ此高尙ナル判決ノ方法裁判管轄ヲ定ムルノ訴ニ由ルニアラサレハ治定スルヲ得サル場合又ハ正當ナル嫌疑ノ原由若クハ公安ノ必要ノ如キ或ル重大ニシテ且ツ非常ナル理由ニヨリ管轄ノ普通規則ニ或ル例外ヲ行ヒ規則ニ違ヒテ

管轄スヘキ裁判權ヨリ之ヲ他ノ同一ナル裁判權ニ送付セシムル爲メニ其事件ヲ奪ヒ去ルノ必要アル場合(正當ナル嫌疑ノ原由ニヨリ又ハ公安ノ原由ニヨリテ送付)ニ於テ管轄ニ付キ與フヘキ判決

此ノ如キ職務ヲ行フニハ總テノ他裁判權ノ上ニ位スル單一ノ裁判權ヲ要スルノ理由アルハ明カナリ

(二九五二號)官吏ノ隸屬ハ檢察官ニ對シテモ司法警察官ニ對シテモ各種裁判所ノ裁判官ニ對シテモ一樣ニ組織セラレサルヘカラス但シ命令ノ隸屬ニ關スル威權ハ常ニ意見ヲ與ヘ議論ヲ發シ裁判ヲ爲スニ係ル場合ニ止マルヘキコトヲ注意セサルヘカラス何トナレハ強制ニ由レル意見、議論、裁判等ハ均シク嘲笑ニ過キサレハナリ

是レニ由リテ此各職員中長官ノ命令ヲ受クヘキモノト受クヘカラサルモノトハ容易ニ之ヲ區別シ得ラルヘシ

(二九五三號)上來論說セル諸官廳又ハ官員ノ職務其物ニ服從附屬隨從スベキ効果ヲ生スル所ノ隸屬ニハ關係スルコトナク尙ホ裁判權ニ付キテモ官吏ニ付キテモ全ク名義ノミニ關スル所ノ一種ノ隸屬アリ

第六節 裁判所ノ分類



(一九五四號)我輩ハ裁判權中ニ爲スヘキ種々ノ區分ヲ指示セサルヘカラスト信ス 即チ裁判權ハ左ノ如ク區別セラルヘシ

第一 犯罪ノ性質ニ隨ヒ普通ノ裁判權ト特別ノ裁判權トニ區別ス(六五二號參觀)

第二 刑法ガ犯罪ノ輕重ニ應シテ爲シタル區分ニ從ヒ各々之ヲ裁判スヘキ裁判權ニ區別ス(故ニ犯罪ノ度、刑ノ度、裁判權ノ度ノ三者間ニハ嚴正ナル照應アリ)(六五八號及ヒ一五八八號參觀)我邦ニ於テハ重罪ニ關スル裁判權輕罪ニ關スル裁判權違警罪ニ關スル裁判權是レナリ

第三 人員ノ組織ニ從ヒテハ平素裁判權ト囑托裁判權トニ區別ス囑托裁判權ハ一事件ニ付キ被告トナリタル者ノ爲メニ特設セラレ其裁判後直チニ解散スルモノトス 此囑托裁判權ノ結果ハ豫メ無罪放免若クハ處罰ヲナスノ目的ヲ以テ裁判所ヲ組織スルコトヲ得ルモノトナルカ故ニ其委員ヲ撰擇スルハ官權若クハ情勢又ハ或ル利益ニ任セテ隨意セラレ、片ハ毎ニ社會特ニ被告人ハ重大ノ危險ニ遇ヒ真正裁判ノ要求スル公平ヲ去ル、甚シカルヘシ然リト雖モ此方法ハ人民ヲシテ刑事訴訟ノ裁判ニ關與セシムル爲メニ人民ヲ召喚スルコトヲ許シ得ヘキ唯一方法ナリ而シテ其危險ハ隨意ニ委員ヲ撰擇スルニ在ルカ故ニ之ヲ矯正スルニハ其撰擇ノ方法ヲ整ヒテ完全ニ公平ヲ維持スヘシ

第四 最終ニ土地ニ關シテナス所ノ分配ニ隨ヒ各裁判權ハ其勢力ノ施行セラレ及ヒ制限セラレ、所ノ場所ノ管轄ヲ有スルニ至ル是レ多少廣袤ヲ有スルノ國ニ於テハ避クヘカラサルノ處分ニシテ此方法ニ由リテ一國ヲ分ツニ面積ト人口トヲ以テスルニ至ルナリ

第二章 我邦成文法ニ於ル刑事裁判權ノ構成

第一節 現時構成ノ起原

(一九五五號)我歴史カ野蠻ノ時代封建ノ時代王政ノ時代ニ經過シタル我裁判構成ノ歴史ニ加フルニ刑事裁判權ノ歴史ヲ以テシテ之ヲ講習スルハ決シテ無用ニ非ズ人若シ此講習ニ付キ明瞭ナル思想ヲ得ント欲セハ如何ナル方法ヲ以テ我輩ガ權理ニ依リテ區別シタル四個ノ職役ヲハ此各時期ニ於テ設置シタリシヤヲ注意セサルヘカラフ、即チ其四個ノ職役トハ證據ヲ搜索シ蒐集スルノ職役、裁判スルノ職役、執行スルノ職役、最終ニ此本然ノ三個ノ職役ヲ任セラレタル各官廳又ハ各官員ノ傍ニアリテ之ヲ提起シ之ヲ活動セシムル爲メニ誘起請求ヲ爲スノ職役是レナリ此職役ノ第一及ヒ第二即チ證據ヲ搜索シ蒐集スルノ職役ト誘起又ハ請求スルノ職役トハ久シク各其任務ヲ人民即チ被害者ト被告人トニ一任シタリ語ヲ換ヘテ之ヲ言ヘハ現今尙ホ民事ニ於テ行ハル、カ如ク單ニ私益ニ一任シタリ、然ラハ則チ犯罪ノ處罰ニ付キテノ第一ノ利益即チ社會ノ公益ナル者ヲ認承シ明カニ之レヲ私益ノ上ニ置



キ而シテ此社會ノ名義ヲ以テ之レカ爲メニ組織シタル官廳ノ方法ニ由リ我輩ノ示シタル所ノ四個ノ各職役ヲ設定シタルハ社會構成上ニ關スル思想ノ進歩ニ伴ヒシナリ我輩ハ此點ニ付キテハ我輩カ此制置一般ノ進行ニ付キ爲シタル所ノ概略ノ表ニ讓ルヲ以テ足レリトスヘシ(五六號及ヒ五八號參觀)

(二九五六號) 舊時ノ王政ヲ廢シ舊時ノ社會ヲ覆ヘシタル千七百八十九年ノ革命ハ一個ノ新時期ヲ開キ現時ノ裁判權構成ハ此時期中ニ生出シ幾度カ政事主義ノ變更ヲ受ケ而シテ其基礎遂ニ現存スル所ノ點ニ達シタリ

此維新ヲ來シタル時期即チ立憲議院ヨリ國民政ノ最終ノ日ニ至ルマテノ時期、語ヲ換ヘテ之ヲ言ヘハ此最初ノ國會ノ法律ヨリ移轉ノ更迭ノ期限トシテ内國戰爭及ヒ内部ノ分離ノ諸年ヲ經過シ而シテ共和紀元第四年二月ノ法律ニ至ルマテノ時期ニ於テ、我輩ハ我輩カ毀壞ノ時限及ヒ新立礎ノ時限ト稱スル所ノ第一ノ時限ヲ注目スヘシ、即チ刑事裁判權ノ舊制ノ毀壞ト新制ノ第一ノ立礎是レナリ、

共和紀元第八年二月ノ革命ニ於テハ最初ニ「コンシニール政」次キニ帝政トナリタル憲法ノ下ニ裁判權ノ順等(コラルドイナシヨ)及ヒ單位(ユニター)ノ第二ノ時限ヲ創生ス(譯者曰ク順等トハ裁判權ノ分離孤立セスシテ治安ハ始審ニ順ヒ始審ハ控訴ニ順ヒ控訴ハ大審院ニ順

フト云フカ如キヲ云フ、單位トハ民事刑事ノ裁判權ヲ一ニシテ復位トナサ、ルヲ云フナリ)而シテ其精神ハ最モ多ク王政主義及ヒ執行權ニ權限ヲ與フルニアリトス、是レ當時ノ經驗ト漸次相繼キテ生出シタル政變トニヨリテ或ル細事ニ來シタル一二ノ附加又ハ漸次ノ變更ノ増加シテ以テ成レルノ方法ニシテ現時ノ構成ヲ組織シタルモノナリ、然レモ現在ナル者ハ常ニ過去ノ子ニシテ未來ノ父ナリ、又無形ノ部類中ノモノニ付キテモ有形ノ部類中ノモノニ於ルカ如ク常ニ完成スル所ノ新陳代謝ノ法アリトス、是ヲ以テ歴史家ノ眼ハ此現時ノ構成中ニ於テ我過去ノ設置ニ屬スルモノト憲法議院ノ與ヘタル立礎ト又其後起リタル制度ノ行爲ニ屬スルモノトヲ區別スヘシ

(一九五七號) 此最終ノ時期ニ就テ觀レハ我輩カ我刑事裁判權ノ現時ノ構成ニ基礎ヲ與ヘタルモノトシテ示スヘキ所ノ重モナル法律ハ左ノ裁判構成ニ關スル三個ノ一般ノ法律ナリトス即チ共和紀元第八年六月二十七日即チ千八百零三年三月十八日ノ法(裁判所ノ構成ニ關スル法)千八百零四年四月二十日ノ法(裁判官制ノ構成及ヒ裁判所ノ行政ニ關スル法)及ヒ千八百零九年八月八日ノ法(裁判構成ニ關スル法)是レナリ而シテ此最終ノ法ハ既ニ存在セル構成ヲ確認シタルニ過キス(一)

(一)千八百四十九年八月八日ノ法(第一條 現時存在スル裁判院及ヒ裁判所並ニ之ヲ組織



スル所ノ法官ハ舊ノ如クナルハシ。裁判構成ニ關スル一箇ノ法律ハ現時國會ニ於テ調査中ニ係ル

右ノ一般ノ法律ニ繼起セル細則ニ關スル布令ト共和紀元第八年六月ノ法ヨリ今日ニ至ルマテ此組織ノ特點ニ關スル數多ノ法律布令又ハ命令ト又特ニ之ニ關係スル所ノ治罪法ノ諸條トヲ附加セサルヘカラス。

(一九五八號)然レハ現時吾人ヲ支配スル所ノ刑事裁判權構成ノ方法ハ尙ホ共和紀元第八年六月二十七日ノ一般ノ法律中ニハ設定セラレサリキ、其實此方法ハ其全体ニ於テハ千八百十年四月二十日ノ法律ト千八百十年ノ刑法トヲ以テ配合シ及ヒ千八百八年ノ治罪法ヨリ始マリタルニ過キス、我輩ハ既ニ刑法編纂ノ事業ハ此構成ノ困難ニヨリテ久シク中止シタルヲ及ヒ此困難ヲ氷解スルニ適當ナル調和ノ便法ヲ看出シタルヤ否ヤ直チニ刑法編纂ハ結了ニ至ルヲ得タルヲ、又最終ニ新構成法ノ發布セラレ、其役員モ皆任命セラレテ職務ヲ行フノ點ニ至リタルヤ、治罪法及ヒ刑法ハ當時既ニ頒布セラレテ二者並ニ千八百十一年一月一日以來執行力ヲ有セルヲ陳述シタリキ、(一五〇號及ヒ一五二號參觀)

(一九五九號)此千八百十年ノ構成法ヲ貫申シタル二個ノ思想ハ、第一ニハ民事刑事並ニ裁判權ノ單位ナルコト、第二ニハ民事トイヒ刑事トイヒ雙方共ニ單一ニシテ且ツ同様ナル裁

判所ナルカ唯其職ノ異ナル點アルノミナルニヨリ民事刑事ニ付キテモ亦各同一ノ隸屬ナルコト是レナリ、此單位及ヒ隸屬ノ二個ノ思想ハ二ツナカラ立憲議院、國民政ノ裁判官制ニ於テハ虧缺シタリキ、此官制ニ於テハ民事裁判ト刑事裁判トノ間ニ或ル關係ノ存セサルニハアラスト雖モ此關係ノ聯結ハ宜シキニ適セスシテ到底孤立ノ者トナリ、特ニ重罪ノ處罰ヲ任セラレタル重罪裁判所ハ全ク孤立スルニ至リタリ、又隸屬ニ關シテハ新タナル裁判官ノ党派中ニ舊時ノ裁判上ノ精神ト舊時ノ「パル、マン」(譯者曰ク舊時ノ上等裁判所ノ名)ノ主張シタルカ如キ所トノ起ルヲ看ルヲ恐ル、ヨリシテ、裁判權ヲ分裂セシメ此隸屬ノ高級ヲ組成スルニ適當ナル高等裁判所ノ創設ヲ避ケタリ、共和紀元第八年六月二十七日ノ法ハ其後共和紀元第十二年八月二十八日(千八百四年五月十八日)ノ法律ニヨリ控訴院ノ名稱ヲ下シ次キニ千八百十年ノ法ニヨリ帝國院ノ名稱ヲ下シタル所ノ控訴ノ裁判所ヲ創設シ以テ隸屬ノ思想ヲ實行シタリ、然レハ此最初ノ創設ハ刑事裁判ニハ關係セサリキ、然ルニ此千八百十年ノ法ニヨリテ刑事ト利益ノ差異アルヨリ起リタル或ル變更ヲ除クノ外、刑事ニモ及ホスノ事業行ハレタリ

我輩ハ此裁判權ノ單位ノ思考ハ我最モ舊時ノ裁判官制ニモ存セル所ノ思考ナルヲ注目セシムハシ、何トナレハ野蠻時代ノ「マラー」又ハ「アラシター」次キニ封建時代ノ「アッシーズ」(譯



者曰ク「マラー」「アラシター」「アッシューズ」並ニ裁判所ノ名ニ於テ皆同様ニ民事ノ訴訟ト刑事ノ訴訟トヲ判決シタルハナリ、今ヤ此思想ハ我現時ノ裁判構成ノ各機關中ニ於テ如何ニ實行セラレシヤチ看サルヘカラス。

(一九六〇號) 此機關ハ公判ノ裁判權我輩ハ先ツ公判ノ裁判權ヨリ始ムヘシニ於テハ犯罪ト刑トノ三個ノ區別ニ從フ、即チ違警罪ニ付キテノ裁判權若クハ違警罪裁判所、輕罪ニ付キテノ裁判權若クハ輕罪裁判所、重罪ニ付キテノ裁判權若クハ重罪裁判所是レナリ、此機關ハ順序アル一個ノ妙配ヲ表スル者トス、即チ其單位ナルヨリ之ヲ觀レハ單純ニシ、其權限管轄ヨリ之ヲ觀レハ亦單純ナリ、又裁判ノ各部類ニ於ル組織ト訴訟手續上ノ保證ノ漸次ニ増加スルヲニ付キテハ、處罰ノ權限ノ漸次ノ増加ト相應スヘキ順序アル配劑ヲ表ス、且ツ此機關ハ全國管内一般ノ人ニ對シテ同一ニシテ、而シテ以上ノ善美ナル性質ニヨリ我國民ノ材能ト特ニ千七百八十九年ノ我革命以來我國ニ於テ人ノ精神ヲ動カス所ノ同等及ヒ明瞭ノ思想ニ能ク適合スル順整的良配劑ヲ表スルモノナリ

此配劑ハ其細則ニ付キテ多少必要ナル改良ヲ施シ得ヘキヲ疑ヒテ容レスト雖モ、其全体ニ於テハ復タ動カスヘカラス、然ルニ英吉利ヨリ輸入スル所ノモノニヨリ此妙配ヲ破壞セントスルノ危險ヲ蒙ムリタリ、數多ノ輕罪ニ付キ裁判ヲ迅速ニシ未決拘留ノ期ヲ短縮スル稱

揚スヘキ意旨ヨリシテ人或ハバリー及ヒ我一二ノ大都府中ニ彼ノ單獨ノ裁判官ヲ以テ裁判スル十三箇ノ輕罪裁判所ニ摸擬シタルモノヲ輸入セント欲シタリ、若シ此思考ノ行ハレタルニ於テハ我國ニ犯罪メハ位置ノ差異ト場處ノ差異トニヨリ裁判權ノ差異ヲ生シタルナラ、然レモ幸ニ我裁判構成法ハ此考案ニ勝チ、夫ノ裁判ヲ迅速ニシ未決拘留ノ期ヲ短縮スルノ目的ハ幸ニ他ノ方法ヨリテ施行セラレタリ。

第二節 違警罪裁判所

(一九六一號) 民事裁判ニ於テ治安裁判ノ名稱ヲ以テ其最終ノ列ニアル所ノ裁判所ハ、刑事裁判ニ於テ違警罪裁判所ノ名稱ヲ以テ其最終ノ列ニ位ス。此裁判所ハ單獨ノ裁判官ニヨリテ組織シテ民事ニ關スルキハ治安裁判官ト稱シ、刑事ニ關スルキハ違警罪裁判官ト稱シ此裁判所ニ於テ此二個ノ職務ヲ行フ所ノ同一ノ裁判官ナリトス、而シテ此裁判官ハ各郡ノ首邑ニ在勤ス

(一九六二號) 其他立憲議院ノ下ニ於ル最初ノ構成ニ於テハ、昔時ノ邑警察カ下ニ云フ如クナリシ所ノ紀念ヨリシテ、第一ニハ此下級ノ裁判權ヲ各邑ノ中央ニ置ク爲メニ第二ニハ邑廳ニ或ル部分ヲ與フル爲メニ邑長ハ郡ノ首邑ニアラサル所ノ各邑ニ於テ裁判官トシテ職務ヲ行フ所ノ違警罪裁判所ヲ成スヲ得タリキ(一) 此裁判權ハ民事裁判ノ構成方法ト符合



セス、加フルニ數多ノ抵觸ヲ含蓄シタリ、其抵觸ノ最モ重大ナルモノハ同一ノ官憲即チ邑長ニ於テ一方ヨリシテハ警察ノ規則ヲ編成シ又他ノ一方ヨリシテハ自カラ編成シタル所ノ規則ニ違背シタルノ罪ヲ裁判スルノ和合セサルニ箇ノ威權ヲ一時ニ任セラル、是レナリ、然レモ此裁判權ハ之ヲ行フト行ハサルトハ獨リ邑長ノ隨意ニ任シタルモノニシテ、實際邑長ハ、統計表ノ證明スル所ニ依レハ、一般ニ此裁判權ヲ行ハサリシ、是ヲ以テ實際ノ關係ヨリ之ヲ觀ルモ毫モ此裁判權ヲ廢止スルヲ妨クルモノナカリシナリ、而シテ此廢止ハ千八百七十三年一月二十七日ノ法ニヨリテ實行セラレタリ(二)該委員ハ左ノ語ヲ以テモンテスキ  
 一ノ創造シタル政權分離ノ原則ヲ擧ケテ之ヲ報告シタリ、曰ク(若シ裁判ノ權限ニシテ立法權及ヒ行政權ヨリ分離セラレサルニ於テハ人民ハ毫モ自由アルコトナシ)ト、ロウヅーハ第十六世紀ヨリ既ニ已ニ此權限ノ混淆ヲ示シタリキ、曰ク(不適宜ニ王家ノ官吏ヨリ警察即チ政事上ノ規則ヲ設定スルノ權利ヲ奪ヒ而シテ之ヲ單ニ裁判事務ノ執行ヲ任セラレタル所ノ都府ノ普通裁判官ニ屬セシメタリ)ト、千八百七十三年ノ立法者ハ全ク治安裁判官ニ違警罪裁判ノ管轄ヲ屬シテ此混淆ヲ止メシメタリ

(二千七百九十二年八月十六日議定、同二十四日頒布ノ裁判構成ニ關スル布令

(第一條 各郡ニ一治安裁判官及ヒ治安裁判官ノ補助タル職工裁判官(アリニドム)ヲ置

ク)

共和紀元第九年六月二十九日ノ法

(第一條 治安裁判官ノ試補官ハ廢止ス、此試補官ハ新郡ノ治安裁判官ノ設定セララル、時ヨリ其職ヲ罷ムヘシ)

(第二條 各治安裁判官ハ裁判上ト現行法律ニヨリテ治安裁判官ニ屬セララル、所ノ和解若クハ其他トヲ問ハス總テ單獨ニテ其職務ヲ行フヘシ)

治罪法第二卷第一篇第一章違警罪裁判所

(第百二十八條 違警罪裁判ノ管轄ハ以下定ムル所ノ規則ト區別トニ從ヒ治安裁判官及ヒ邑長ニ屬ス)

第一節違警罪裁判官トシテ治安裁判官ノ裁判所

(第百二十九條 治安裁判官ハ單獨ニ、ハ、ハ、ヲ管轄スヘシ)

(第百四十條 治安裁判官ハ又其區中ニ犯シタル他ノ總テノ違警罪ヲ管轄スヘシ但シ邑長ト共ニ之ヲ管轄スヘシ)

(第百四十一條 治安裁判官一人ヨリ外ナキ所ノ邑ニ於テハ治安裁判官ハ獨リ其裁判所ニ屬スル事件ヲ管轄スヘシ治安裁判所ノ書記及ヒ使吏ハ違警罪事件ニ付キ其職務ヲ爲ス



ヘシ)

〔第四百二十二條 二個以上ノ治安裁判所ニ分割シタル邑ニ於テハ違警罪裁判所ニ關スル職務ハ各治安裁判官ニヨリ最モ舊任ノ者ニ始マリテ追次行ハルヘシ此場合ニ於テハ違警罪裁判所ノ爲メ特別ノ書記ヲ置クヘシ)〕

〔第四百十三條 前條ノ場合ニ於テハ又違警罪事件ニ付キ二個ノ局ヲ置クヲ得而シテ各局ハ一治安裁判官ニヨリ支配セラルヘシ書記ハ補助官トシテ己レニ屬スル雇吏ヲ有スヘシ)〕

第二節 違警罪裁判官トシテ邑長ノ裁判權

〔第四百十六條 郡ノ首地ニアラサル邑長ハ治安裁判官ト共ニ、、、ヲ管轄スヘシ)〕

〔第四百十九條 使吏ノ職權ハ關係人ヲ呼出スニ付キ必要ニアラス此呼出々邑長ノ告知ニヨリテ之ヲナスヲ得ヘシ、、、)〕

〔第四百七十條 証人ニ對スル呼出ニ付キテモ亦同シ、、、)〕

〔第四百七十一條 邑長ハ邑廳ニ於テ其訟廷ヲ開クヘシ、、、)〕

〔第一條 治罪法第百三十八條第百四十四條及ヒ第百七十八條ハ左ノ如ク改正ス)〕

〔第百三十八條 違警罪ノ管轄ハ其郡治内ニ於テ犯シタル者ニ付キ其郡ノ治安裁判官ニ屬ス)〕

〔第百四十四條)此條ハ二〇二七號ニ於テ之ヲ舉クヘシ)〕

〔第百七十八條 各三ヶ月ノ初メニ於テ治安裁判官ハ、、、(此他ハ改正セラレス)〕  
〔第二條 治罪法第百三十九條第百四十條第百六十六條第百六十七條第百六十八條第百六十九條第百七十條第百七十一條ハ廢止ス)〕

〔一九六三號) 隸屬ノ點ヨリスレハ、違警罪裁判所ハ控訴ニ付キテハ此控訴ノ許サル、場合ニ於テ輕罪裁判所トシテ裁判スル始審裁判所ニ屬ス、即チ治安裁判所ハ民事ニ於テ裁判スル此同一ノ始審裁判所ニ屬スルニ同シ、是レ民事刑事雙方ノ點ヨリシテ異ナリタル職務ヲ有スル同一ノ裁判所ニシテ而シテ同一ノ隸屬ナリトス(一)〕  
〔一)治罪法第二卷第一章第二節 違警罪裁判ノ控訴  
〔第百七十二條 違警罪裁判所ニ於テ與ヘタル裁判ノ控訴ハ之ヲ輕罪裁判所ニ行フヘシ、  
、、、)〕

第三節 輕罪裁判所

〔一九六四號) 民事裁判ト刑事裁判トニ於テ、同時ニ第二列ニ位シ、此二個ノ職務中其一ニ付



キテハ民事裁判所ノ名稱ノ下ニ其他ノ一ニ付キテハ輕罪裁判所ノ名稱ノ下ニ職務ヲ行フ所ノ裁判所ハ區裁判所(アロンジッスマン)ナリトス、此裁判所ハ區ノ各首地ニアリ、此裁判所ニ於テハ三人ヨリ少ナキ裁判官ニヨリテ裁判ヲ與フルコトヲ得ス、數多ノ局ニ區別スル爲メニ充分ナル役員ヲ有セサル所ノ裁判所ニ於テハ、同一ノ裁判官ハ或ル日ニ於テハ民事裁判官トシテ又他ノ日ニ於テハ輕罪裁判官トシテ其職務ヲ行フ、若シ數多ノ局ニ區別スルヲ得ル所ノ裁判所ニ於テハ、此局ノ一個若クハ要用アルキハ二個以上カ特ニ輕罪ノ事件ヲ任セラル、然レモ總テノ裁判官ハ同様ニ二個ノ裁判權ヲ有スルカ故ニ毎年各々更迭シ互ニ相繼キテ種々ノ局ニ移ルノ方法ヲ取ル(一)

(一)共和紀元第八年六月二十七日ノ法

(第六條 邑ノ各區ニ一始審裁判所ヲ置クヘシ)

(第七條 始審裁判所ハ初審及ヒ終審トシテ法律ニ規定シタル場合ニ於テ民事ヲ管轄ス、此裁判所ハ同様ニ輕罪事件ヲ管轄ス又此裁判所ハ治安裁判官ニ於テ初審トシテ與ヘタル裁判ノ控訴ニ付キ裁判ス)

(第十六條 總テノ始審裁判所ノ裁判ハ三名ヨリ少ナキ裁判官ニテ之ヲ與フルコトヲ得ス) 裁判院及ヒ裁判所ノ警察及ヒ懲戒例ニ關スル規則ヲ規定シタル千八百八十八年三月二十日ノ

布令

(第四十六條 數多ノ局ヨリ組織シタル始審裁判所ノ長ハ自カラ屬セント欲スル所ノ局ノ裁判長タルヲ得ヘシ又裁判長ハ自カラ適當ナリトスルキ他ノ局ノ裁判長タルヲ得ヘシ)

(第五十條 裁判官ハ繼續シテ總テノ局ノ事務ヲ執ルノ方法ヲ以テ毎年更迭ヲナスヘシ 若シ數多ノ裁判所次長アルキハ其次長ハ毎年一局ヨリ他ノ局ニ移ルヘシ) (裁判院及ヒ裁判所ニ於ル法官更迭ノ方法ニ關スル千八百二十年十月十一日ノ命令ハ千八百五十六年ニ於テ廢止セラレタル後千八百七十年二月二十一日再設セラレ竟ニ千八百七十年十月二十一日換フルニ新方法ヲ以テシタリ)

治罪法

(第七十九條 民事ニ於テノ始審裁判所ハ尙ホ輕罪裁判所ノ名義ヲ以テ官署ノ請求ニ因テ控訴ニ係ル總テノ森林犯罪及ヒ其刑禁錮五日罰金十五フランヲ超過スル所ノ總テノ輕罪ヲ管轄スヘシ)

(第八十條 此裁判所ハ輕罪事件ニ付キテハ裁判官三名ニテ裁判スヘシ) 千八百十年四月二十日ノ法



〔第三十四條 輕罪裁判所ハ繼續シテ帝國ノ法典及ヒ法律ニ遵ヒ民事及ヒ輕罪事件ヲ管轄スヘシ〕

〔第三十五條 パリノ始審裁判所ハ三十六名ノ裁判官及ヒ十二名ノ試補官ヲ以テ組織スヘシ〕(此數ハ其後千八百三十七年七月九日ノ法及ヒ千八百四十四年四月二十三日ノ法ニヨリテ漸次増加シタリ)

〔第三十六條 人口少ナキ市街ニ設置シ隨ヒテ事件ノ少ナキ所ノ裁判所ハ三名ノ裁判官及ヒ三名ノ試補官ヲ以テ組織スヘシ〕

〔第三十七條 其他ノ市街ニ於テハ裁判官ノ員數ハ場所ニ隨ヒテ増加スルコトヲ得〕

〔第四十條 裁判官ハ少クモ三名ニアラサルハ如何ナル裁判ト雖モ之ヲ與フルコトヲ得ス輕罪事件ノ控訴ニ付キテハ裁判官ハ五名ナルヘシ〕(此最終ノ規則ハ千八百五十六年六月十三日ノ法ニヨリテ廢止セラレタリ而シテ此法ニ依レハ總テノ輕罪ノ控訴ヲ帝國裁判院ニ屬ス)

〔第四十一條 試補官ハ總テノ訟廷ニ出席スルコトヲ得又試補官ハ參考トナルノ權利ヲ有ス而シテ意見ヲ分離シタル場合ニ於テハ試補官トナリタル順序ノ最モ舊任ノ試補官ハ議決ニ參スルノ權ヲ有ス〕

始審裁判所ノ構成ニ付キテノ規則ニ關スル千八百十年八月十八日ノ布令

〔第二條 三名又ハ四名ノ裁判官ヲ以テ組織シ一局ヲ有スルニ過キササル所ノ裁判所ハ尙ホ二名ノ試補官ヲ有スヘシ〕

〔第三條 七名八名九名又ハ十名ノ裁判官ヲ以テ組織シタル始審裁判所ハ二局ニ區別シ其一ハ重モニ民事ヲ管轄シ其他ハ輕罪事件ヲ管轄スヘシ 此各局ニ試補官四名ヲ附ス〕

〔第四條 前條ノ裁判所ニシテ十二名ノ裁判官ヲ以テ組織シタル者ハ三局ニ區別シ其二局ハ民事ヲ管轄シ其第三局ハ輕罪事件ヲ管轄スヘシ 此裁判所ハ試補官六名ヲ有スヘシ〕

〔第五條 セーヌ縣ノ始審裁判所ハ六局ニ區別シ其五局ハ民事ヲ管轄シ其第六局ハ輕罪事件ヲ管轄スヘシ、、、、〕(此局數ハ最初ハ千八百二十一年四月一日ノ命令ニヨリ七局トナシ次キヨ千八百三十七年七月十七日ノ命令ニヨリテ八局トナスニ至レリ而シテ此命令ニ依レハ第六局第七局及ヒ第八局ハ一般ニ輕罪事件ヲ管轄シ第八局ハ特ニ命令ニヨリテ指示シタル或ル特別ノ犯罪ト違警罪裁判所ノ控訴トヲ管轄シタリ又第二局ハ千八百四十年八月二十日ノ命令ニヨリ印紙及ヒ登記事件ニ關スル違背並ニ官有財産ニ關スル訴訟ノ特別ノ職務ヲ受ケタリ)

〔第六條 一局又ハ二局ニ區別スル始審裁判所ノ裁判官ハ各局ニ於テ三名ヨリ少ナカラ



ス六名ヨリ多カラサル方法ヲ以テ各局ニ配置セラルヘシ  
セーヌ縣ノ始審裁判所ニ於テハ各局ハ裁判官六名試補官二名ヲ以テ組織スヘシ

(第七條) 試補官ハ特ニ各局ニ附屬シ尙ホ要用アルキハ他ノ局ニ於テ職務ヲ執ルコトヲ免レサルヘシ又試補官ハ裁判官ノ一局ヨリ他ノ局ニ於テスル更迭中ニ含蓄スヘシ

(第八條) 數多ノ局ニ區別スル裁判所ニ於テハ常ニ裁判所長ノ裁判長トナル所ノ局ノ他ノ各局ニ於テ次長一名ヲ置クヘシ  
パリーニ於テハ每局裁判次長ヲ置クムシ

(第九條) 輕罪裁判所ハ違警罪裁判所ニ於テ與ヘタル裁判ノ控訴ヲ管轄スヘシ

(第三十六條) 輕罪事件ヲ管轄スル局ハ休暇ヲ有セス豫審裁判官ニ付キテモ亦同シ 若シ豫審裁判官ニ於テ休暇ヲ有スル所ノ局ニ屬スルハ此豫審裁判官ハ休暇ヲ有セサル局

ニ其報告ヲナスヘシ(此第二項ハ千八百五十六年七月十七日三十一日ノ法ニヨリテ廢止シタリ)

(一九六五號) 裁判權ノ單位ノ原則、及ヒ一般ノ構成ノ規則ニ背馳セサル爲メニハ、控訴ノ隸屬ハ民事ニ於ルカ如ク輕罪裁判所ハ控訴院ニ屬セサルヘカラス、千八百八十年及ヒ千八百八十年ノ立法者ハ規則トシテ此ノ如ク定メタリ、(治罪法第二百十條)然レモ同立法者ハ裁判ヲ受クヘキ者ト証人トヲシテ控訴裁判所ニ接近セシムルノ目的ヨリシテ大抵ノ場合ニ於テ距離

ノ理由ニヨリテ之ニ一個ノ例外ヲ置クコトニ決定シタリ、而シテ其例外ノ方法ハ治罪法第二百十條千八百八十年四月二十日ノ法第四十條第二項及ヒ千八百八十年八月十八日ノ布令第十條ニ記載シタリ 現時ニ至リテハ千八百五十六年六月十三日ノ法ニヨリ重モ千八百八十年ノ後道路ノ開通ニ生シタル變更ト、舊時ノ法律ニ於テ避ント欲シタル不便宜ハ實際上其稀少ナルコトヲ証スル所ノ統計表トニ基キ、右ノ例外ハ消滅シタリ、故ニ我輩カ舉ケ來リタル所ノ諸條ハ廢止セラレ而シテ一般ノ規則ニ入りタリ、即チ總テノ控訴ハ皆輕罪裁判所ヨリ控訴院ニ之ヲ行フ(一)

(二) 輕罪裁判所ノ裁判ノ控訴ニ關スル千八百五十六年六月十三日ノ法

(第一條) 治罪法第八十九條第二一一條第二百二條第二百四條第二百五條第二百七條第二百八條第二百九條第二百十條第二百十一條第二百十二條第二百十三條第二百十四條第二百十五條及ヒ第二百十六條ハ左ノ如ク改正ス、(、、、、)

(此諸條ハ我輩カ必要トスル場所ニ舉クヘキ所ニシテ法律ノ新規則ト符合セラレタリ重モナル規則ヲ含蓄スル所ノ第二一一條及ヒ必要トナリタル訴訟手續ノ或ル程式ヲ定ムル所ノ第八十九條ヲ除クノ外他ノ總テノ諸條ハ文辭ノ變更ヲ爲シタルニ過キス、即チ嘗テ存在セシ所ノ語ニ換フルニ院(クール)裁判(アレー)大檢事(プロキュール)セテ(ラール)評



定官(コンセーエー)及ヒ其他斯ノ如キ語ヲ以テシタルコト是レナリ)

(第二百一條 控訴ハ帝國裁判院ニ之ヲ爲スヘシ)

(同法第二條 治罪法第二百條始審裁判所ノ構成ニ關スル千八百十年四月二十日ノ法第四十條第二項並ニ千八百十年八月十八日ノ布令第十條及ヒ現行法ニ抵觸スル總テノ規則ヲ廢止ス

第四節 控訴院及ヒ重罪院

刑事裁判ニ於ル控訴院ノ任務

(二九六六號) 帝政ノ下ニ於テ、刑事法典及ヒ裁判構成法ノ編纂ノ時、民事ト刑事トヲ問ハス、裁判所單一ノ原則ヲ實行スルノ方法ニ付キ、控訴院ノ任務ニ關シテ最モ大ナル困難ヲ現出シタリ、即チ刑事ニ於テハ控訴院ニ與フルニ其民事ニ於テ有スル隸屬上ノ上列ヲ以テスルニハ如何ニスヘキヤ、又之ニ屬セシムヘキ所ノ任務ハ如何ナルモノナルヘキヤ、帝ハ帝國裁判院ニ於テハ民事及ヒ刑事裁判權ノ完全ノ權限カ極點ノ度、即チ其上ニ他ノ如何ナル裁判權ノ度モアルコトヲ終審ニニ於テ存在ストノ原則ニ基キテ之ヲ定メンコトヲ欲シタリ、然レハ此思考ヲ適用スルコトハ數多ノ妨害ニ遭遇シタリ

(二九六七號) 此適用ハ豫審裁判權ニ關シテハ、公訴陪審ノ成立ニ付キテ妨害ニ遭遇シタリ、

而シテ公訴陪審ハ既ニ廢止セラレ(一五三號參觀)此點ニ付キテノ極度ノ裁判全權ハ我輩カ豫審裁判權ヲ論スル時ニ當リ之ヲ説明スルカ如ク帝國裁判院ニ與ヘラレタリ、  
(二九六八號) 此適用ハ又輕罪事件ニ於ル控訴ニ付キテハ裁判ヲ受クル者ヲシテ控訴裁判所ヨリ甚タ遠隔セシムルヲ恐ル、ヨリシテ妨害ニ遭遇シタリ、我輩ハ第千九百六十五號ニ於テ此點ニ關スル極度ノ裁判權ハ如何ニ一部分ヲ帝國裁判院ニ與ヘラレタルニ過キサリシカ、又千八百五十六年六月十三日ノ法ハ全ク極度ノ裁判權ヲ帝國裁判院ニ與ヘ而シテ如何ニ我裁判構成ノ一般ノ欄内ニ入りタルカヲ見來リタリ

(二九六九號) 最終ニ此適用ハ又重罪ノ裁判ニ付キテハ更ニ一層大ナル妨害ニ遭遇シタリ即チ第一ニハ裁判陪審ノ組織ニ於テ第二ニハ若シ裁判院ノ管轄地内ニ包含スル土地ニ於テ唯一箇ノ重罪裁判所ヲ存スルニ過キササルノ方法ヲ以テ重罪ノ總テノ訴訟カ裁判院ノ所在ニ集合セサルヘカラサルニ至ルモノトセハ、實際上必然刑事裁判ノ必要ヲ満足スル能ハサルコトニ於テ妨害ニ遭遇シタリ、經驗ニ由レハ此種類ノ一裁判所カ各縣ニ必要ナルコトヲ表証シ、而シテ刑事裁判所ハ共和紀元第十二年八月二十八日ノ法律ニヨリテ刑事裁判院ト稱呼セラレ、之ヲ各府縣ニ設置セラレタレハ尙ホ各々孤立シ、良好ナル仕組ニ依レル順等アルコトナク、且ツ他ニ重罪院ヲ設置シ以テ此刑事裁判ノ職役ヲ充タシタリ



此困難ヲ脱スル爲メニ種々ノ方法ヲ發議シ論議シタル後、遂ニ左ノ配合ヲ爲スニ達シタリ、即チ控訴院所在ノ各府縣ニ於テハ其所在地ニ重罪院ヲ設ケ、又控訴院管内ニシテ其所在外ノ各府縣ニ於テハ控訴院ハ裁判長ノ資格ヲ以テシ、又必要アル場合ニ於テハ補助官ノ資格ヲ以テ陪席スル爲メニ控訴院ノ人員ヲ派出セシメ、以テ重罪院ヲ設クルノ配合是レナリ、右論題ハ此配合ニ由テ茲ニ決定シタリ

(一九七〇號)控訴院ハ此種々ノ任務ノ理由ヨリシテ數多ノ局ニ區別セラレ、此局ノ中ニハ(民事局ハ措テ之ヲ論セス)豫審ノ裁判權トシテ重罪取調局ノ名ヲ以テ其職務ヲ行フ所ノ一局アリ、又輕罪事件ニ於ル控訴ノ裁判權トシテ輕罪控訴局ノ名ヲ以テ其職務ヲ行フ所ノ一局アリ、然レモ民事又ハ刑事裁判ノ單一ナルコトハ左ノ事項ニヨリテ自カラ顯ハル、即チ或ハ評定官ヲシテ代ル々々此局ノ一箇又ハ其他ニ分配セシムル所ノ年々ノ交代ニヨリ、或ハ要用ナル場合ニ於テハ民事刑事ノ特別ノ性質ニ關セシテ民事又ハ刑事ニ付キ各々其職務ヲ執リ、或ハ要用ナル場合ニ於テハ或ル民事又ハ刑事ヲ合同シテ裁判スル爲メニ各々他ノ局ニ集合スル諸局ノ各能權ニヨリ或ハ要用ナル場合ニ於テハ評定官カ附屬スル局ノ事務ニ關スルコトナク、或ル他ノ局ノ事務ニ關係スルコトヲ任セラル、各評定官ノ能權ニヨリ或ハ局ノ區別ナク控訴院ヲ組織スル總テノ評定官ノ爲シ得ル所ノ重罪院ノ任務ニ任セラル、ニヨ

リ裁判ノ單一ナルコトハ自カラ顯ル、モノトス

裁判官ノ員數ハ重罪取調局又ハ輕罪控訴局ニ於テ與フヘキ判決ニ付キテハ少ナクモ五名ナラサルヘカラス、又民事ニ付キテハ七名ヨリ少ナキヲ得ス(一)

(一)共和紀元第八年六月二十九日ノ法

(第一條 左ニ記載スル場所及ヒ府縣ニ付キ二十九箇ノ控訴裁判所ヲ設置ス、、、、)

(ブリュクセルリ、リエージュ、メツツ及ヒストラスプールハ佛蘭西ニ屬セス且ツシヤンベリー

モ亦同一ナルニヨリ控訴裁判所ノ數ハ全体ニテ二十六個ニ減シタリ)

(第二十七條 控訴裁判所ノ裁判ハ七名ヨリ少ナキ裁判官ニテ與フルコトヲ得ス、、、、)

、)

共和紀元第十二年八月二十八日ノ法

(第百二十四條 裁判院ノ裁判ハ「アレー」ト稱スヘシ)

(第百三十六條 破毀ノ裁判所ハ稱シテ破毀院(即チ大審院)ト做スヘシ 控訴裁判所ハ稱シテ控訴院ト做スヘシ 刑事裁判所ハ稱シテ刑事裁判院ト做スヘシ、、、、)

千八百十年四月二十日ノ法

(第一條 控訴院ハ稱シテ帝國裁判院ト做シ此裁判院ノ裁判長及ヒ他ノ人員ハ此裁判院



ニ於テ稱シテ陛下ノ評定官ト做スヘシ

(第二條 帝國裁判院ハ帝國ノ法典及ヒ法律ニ遵ヒ民事及ヒ刑事ヲ管轄スヘシ)

(第三條 帝國裁判院ハ之ヲ控訴裁判院ヲ設置シタルト同一ノ都府ニ設置スヘシ又帝國裁判院ハ其管轄地内ニ同一ノ府縣ヲ包含スヘシ 刑事裁判院ハ廢止ス、、、、)

(第四條 帝國裁判院ノ裁判官ノ員數ハバリーニ於テハ六十名以上四十名以下ナルヲ得ス其他ノ裁判院ニ於テハ四十名以上二十名以下ナルヲ得ス)

(第五條 帝國裁判院ノ局又ハ課ノ區別及ヒ任務ノ順序ハ行政規則ヲ以テ之ヲ定ムヘシ、、、、)

(第七條 帝國裁判院ノ裁判ハ全權ヲ以テ與フヘシ其裁判若シ無効ノ制裁ヲ以テ記載シタル程式ヲ有スルキハ法律ニ係ル明瞭ナル違背ニアラサレハ破毀スルヲ得ス、、、、)

千八百十年七月六日ノ布令

(第一條 アジャシヲ(現時ニアリテハバスタチャー)ノ我帝國裁判院ハ評定官二十名ヲ以テ組織スヘシ 一局ヲ以テ組織スル控訴院ニ代ル所ノ我帝國裁判院ハ二十四名ノ評定官ヲ有スヘシ 二局ヲ以テ組織スル控訴院ニ代ル所ノ我帝國裁判院ハ三十名ノ評定官ヲ有ス

ヘシ レンヌノ裁判院ハ四十名ノ評定官ヲ有スヘシ バリーノ裁判院ハ五十名ノ評定官ヲ有スヘシ (此數ハ千八百二十一年四月一日ノ命令ニヨリテ五十六名ト爲シタリ) 右規定ノ人員中ニハ總テノ裁判長ヲモ包含スルモノトス)

(第二條 少ナクモ二十四名ノ評定官ヲ以テ組織スル我帝國裁判院ハ三局ヲ有シ而シテ其一ハ民事ヲ管轄シ他ノ一ハ重罪取調ヲ管轄シ又他ノ一ハ輕罪ノ控訴ヲ管轄スヘシ 此最終ノ二局ハ少ナクモ五名ノ裁判官ニアラサレハ裁判ヲ與フルヲ得ス 二箇以上重罪取調局ヲ設定スルノ必要アリトナス所ノ我帝國裁判院ハ特別ノ布令ヲ以テ之ヲ定ムヘシ)

(第五條 三十名ノ評定官ヲ以テ組織スル裁判院ニ於テハ民事ヲ管轄スル爲メニ二局ヲ置クヘシ又四十名若クハ其以上ノ評定官ヲ以テ組織スル裁判院ニ於テハ三局ヲ置クヘシ)

(第七條 我帝國裁判院ノ第一ノ裁判長ハ集合シタル諸局及ヒ公式ノ訟廷ニ於テ裁判長トナルヘシ又此裁判長ハ通常民事第一局ノ裁判長トナリ若シ又相當ナリト思料スルカ若クハ少ナクモ毎年一度他ノ諸局ノ裁判長トナルヘシ 公式ノ訟廷ハ第一ノ裁判長ノ裁判長トナリタル局ニ於テ之ヲ行フヘシ此訟廷ハ二個ノ民事局ヲ以テ組織シ其二個ノ民事局ヲ有スル裁判院ニ於テハ第二局及ヒ第三局ハ代ル々々公式ノ訟廷ノ任務ヲ執ルヘシ 唯



一箇ノ民事局ノミヲ有スル帝國裁判院ニ於テハ輕罪事件ノ控訴ヲ管轄スル所ノ局ハ第一ノ裁判長ノ請求ニヨリ公式ノ訟廷ノ任務ヲ執ルヘシ

(第九條 民事局又ハ刑事局ノ總テノ人員ハ必要ノ場合ニ於テハ互ニ他ノ局ノ任務ヲ執ルトニ任スヘシ)

(第二十九條 帝國裁判院ノ刑事局ハ休暇ヲ有セズ

(第三十條 休暇ハ重罪院ノ任務ヲ妨害シ遲延シ又ハ中止スルコトヲ得サルヘシ)

千八百二十七年九月二十四日及ヒ十月一日ノ令

(第一條 本年十一月一日以後我王國裁判院ノ輕罪ノ控訴局ハ少ナクモ裁判長ト共ニ七名ノ裁判官ヲ以テ組織スヘシ 此局ハ普通ト略式トヲ論セズ民事ヲ管轄スルコトヲ得ヘシ而シテ七名ノ裁判官アルニアラサレハ(民事ニ於テ)裁判ヲ與フルコトヲ得サルヘシ)

(第三條 單ニ三局ニ區別スル裁判院ニ於テハ輕罪控訴局ノ裁判ハ少ナクモ十四名ノ裁判官ニテ與フルカ爲メニ刑事訟廷ニ於テ行フヘキ所ノ事件ノ裁判ニ付キテハ民事局ニ合併スヘシ)

(第四條 裁判院所在地ニ於ル重罪院ノ開期中ハ重罪院ヲ構成スル爲メニ他ノ局ヨリ徵取シタル法官ハ其班列ニ順ヒ最終ノモノヨリ始メテ代ル々々重罪取調局ニヨリテ更迭ス

ヘシ 又七名若クハ十四名ノ裁判官ノ員數ヲ完全セサルヘカラサルキ他ノ局ノ任務ニ付キテモ亦同シ)

(第五條 裁判官五名ニテ輕罪控訴ノ裁判ヲ與フルコトヲ許ス所ノ千八百十年七月六日ノ布令第二條ハ繼續シテ施行スヘシ)

注意○種々ノ布令ニテ或ル裁判院又ハ裁判所ニ於テ法官ノ員數ヲ減少シ又他ノ裁判院若クハ裁判所ニ於テ之ヲ増加シタリ

重罪院

一九七一號)重罪院ハ定期ノ裁判權ニシテ、常置ノ裁判權ニアラス、而シテ其裁判ノ職務ハ二個ニ區別シ隨ヒテ二個ノ區別アル元素ヨリ構成スルモノトス、即チ有罪無罪ヲ判定スルノ裁判官タル陪審ト、法律適用ノ裁判官タル法官トノ二元素是レナリ、(一九四二號參觀)此裁判官ハ總テ委任ニヨリテ其職務ヲ執ルモノトス、即チ陪審ハ單ニ各事件ニ付キテ委任ヲ受ケ、法官ハ重罪院開設中ノ全期限間其委任ヲ受ク(一九五四號第三參觀)

重罪院ハ之ヲ單純ニ論スレハ、其由テ以テ構成セラル、諸元素ヲ合セタル完全ナル裁判權ナリトス、然レモ大抵法律ノ正文ニ於テモ又慣用ニ於テモ、裁判院ト云フハ特ニ陪審ト相對セシメンカ爲メ法官ヲ指稱スルモノトス



(一九七二號) 重罪院ハ各府縣ニ於テ左ノ場所ニ之ヲ開カサルヘカラス(治罪法第二百五十一條)

即チ控訴院所在ノ府縣ニ於テハ控訴院ニ開キ、其他ノ府縣ニ於テハ慣習上控訴院カ代リタル所ノ刑事裁判院ノ嘗テ存在シタル場所(多少治罪法第二百五十八條ヲ變更シタル千八百十年ノ法第十七條ヲ參觀スヘシ)即チ或ル例外ヲ除クノ外ハ府縣ノ首地ニ開ク是レナリ、然レモ若シ要用アルキハ例外トシテ同一ノ府縣中ノ慣習ノ場所外ナル他ノ場所ニ重罪院ヲ開クコトヲ得ヘシ(治罪法第二百五十八條參觀)

重罪院ハ各三箇月毎ニ其一開期ヲ有セサル可ラス而シテ必要ノ場合ニ於テ同一期ノ三ヶ月間更ニ開キ得ル所ノ總テノ重罪院ハ之ヲ非常ノ開期(治罪法第二百五十九條)ト名ケ、且ツ其以前ニアリタル最終開期ノ重罪院ノ役員ト同一ノ役員ヲ用フヘシ、(一九七八號參觀)バリニ於テハ、開期ハ開斷ナク十五日ヨリ十五日ニ繼續シ、各三ヶ月ノ最初ノ十五日ノ開期ハ通常ノ開期ニシテ之ニ繼ク所ノ五箇ノ開期ハ非常ノ開期ナリトス、常期ノ裁判權トシテ委任ニヨリテ裁判ヲ行フ重罪院ノ法律上ノ成立ハ、開院ノ爲メニ定メタル日ニ始マリテ閉院ノ日ニ終ルモノトス、而シテ閉院ハ重罪院ノ開院ノ日ニ裁判ス可キ景狀ニアル總テノ事件ヲ茲ニ提出シタル後ニアラサレハ之ヲ爲スコトヲ得ス、(治罪法第二百六

十條參觀)

(一九七三號) 控訴院カ存在スル場所ニ於テ法官トシテ重罪院ヲ開キ、又ハ其管轄地内ノ各府縣ニ之ヲ開ク所ノモノハ控訴院ナリトノ原則ヲ遺忘スヘカラス、是レヨリシテ重罪院ノ開設ニ關シ此裁判院又ハ其第一ノ裁判長ニ與ヘラレタル職權ノ來ルモノトス、故ニ諸局ノ會議ニヨリ檢察官ノ意見ヲ聽キタル後判決ニ因テ慣習上重罪院ヲ開クヘキ場所ヨリ他ノ場所ニ於テ之ヲ開キ得ル所ノモノハ控訴院ナリトス(治罪法第二百五十八條及ヒ千八百十年ノ布令第九十條參觀) 又此場合ニ於テ同一ノ判決ニ因テ然ク招集シタル重罪院開設ノ日ヲ定ムル所ノモノハ控訴院ナリトス(千八百十年ノ法第二十條) 最終ニ又其他ノ場合ニ於テ此開設ノ日ヲ定ムルハ第一ノ裁判長ノ命令ニ因テナリトス(此點ニ付キ治罪法第二百六十條ヲ改正シタル千八百十年ノ法第二十條ヲ參觀スヘシ)

一九七四號) 第一ノ裁判長ノ命令ニ因リ又ハ裁判院ノ判決ニ因リ然ク定メタル重罪院開設ノ日ハ特別ナル定式ニ遵ヒ全管轄地内ニ之ヲ公示セサルヘカラス(千八百十年ノ法第二十二條及ヒ千八百十年ノ布令第九十條ヲ參觀スヘシ)(一)

(一) 治罪法第二卷第二篇第二章重罪院ノ構成

(第二百五十一條) 控訴院ヨリ移送シタル各人ヲ裁判スル爲メ各州毎ニ重罪院ヲ設ク可



（第二百五十七條）重罪院ハ通常各府縣ノ首地ニ於テ開設スヘシ（以下ニ記載スル千八百十年ノ法ヲ以テ改正シタリ）

然レモ帝國裁判院ハ首地ノ裁判所ヨリ他ノ裁判所ヲ指定スルコトヲ得ヘシ

（第二百五十九條）重罪院ノ開設ハ三月毎ニ之ヲ爲ス可シ○若シ事務ノ需要ノ爲メニ已ムラ得サル時ハ更ニ屢々重罪院ヲ開設スルコトヲ得可シ

（第二百六十條）重罪院ヲ開始スヘキ日ハ重罪院ノ第一ノ裁判長之ヲ定ム可シ（以下ニ記載スル千八百十年ノ法第二十條及ヒ第二十一條ヲ以テ改正シタリ）○重罪院ハ其開始ノ時ニ於テ裁判シ得ヘキ景狀ニ至リタル總テノ重罪ノ訴ヲ其裁判院ニ申告シタル後ニアラサレハ之ヲ閉ツヘカラス

千八百十年四月二十日ノ法

（第十七條末項）重罪裁判院ハ普通ニ現時刑事裁判院ノ所在スル場所ニ之ヲ開ク可シ

（第十九條）重罪院ハ各府縣ニ於テ同一ノ帝國裁判院ノ管轄内ニ三箇ヨリ多キ府縣アラサルキ又、任務ノ要用力屢々開クコトヲ要セサルキ一個ハ一個ノ後及ヒ一ヶ月ヨリ一ヶ月ニ於テニアラサレハ之ヲ開カサルヘシ 同一ノ役員ハ若シ之ヲ爲スコトヲ得ルニ於テハ數

多ノ裁判院ノ繼續シテ裁判長トナルコトニ任セラルヘシ

（第二十條）帝國裁判院ノ第一ノ裁判長ハ重罪院カ常ニ開設スル場所ニ開設スルキハ其開始ノ日ヲ指定スヘシ

（第二十一條）重罪院カ慣例上開設スル場所ヨリ他ノ場所ニ開設スルキハ開始ノ期日及ヒ場所ハ總テノ局ノ會議ニ因リ檢察官ノ意見ヲ聽キタル上判決ヲ以テ定ムヘシ

（第二十二條）重罪院ノ開始ノ期日ヲ定メタル命令又ハ此開始ノ場所及ヒ期日ヲ定ムル所ノ判決ハ少ナクモ開始ノ八日前ニ揭示ト管轄内ノ總テノ始審裁判所ニ於テナス所ノ朗讀トニヨリテ公示スヘシ

千八百十年七月六日ノ布令

（第十九條）重罪院ハ我檢察官ノ請求ニ因リ控訴院諸局ノ會議ヲ以テ與ヘタル判決ニ因ルニアラサレハ慣例上開設セラルヘキ場所ヨリ他ノ場所ニ於テ招集セラル、コトヲ得サルヘシ 此判決ハ重罪院ノ開始ノ期日ヲ定ムヘキ判決ニ付キ既ニ前ニ言ヒタルガ如ク開設ノ第一ノ三ヶ月間朗讀セラレ公示セラレ揭示セラレヘシ（注意○此末項ノ論スル所ノ第八十三條ハ左ノ如シ（此判決ハ我檢察官ノ注意ニ因リ裁判院管轄内ノ總テノ始審裁判所ニ送付スヘシ始審裁判所ニ於テハ此判決ヲ受取りタルヨリ三日内ニ檢察官ノ請求ニ因リ



公廷ニ於テ之ヲ朗讀スヘシ又此判決ハ府縣ノ新聞紙ニ廣告シ始審裁判所所在ノ區ノ總テノ首地ニ揭示スヘシト

法典ノ印行ニ於テモ生シ得ル所ノ誤認ヲ避クル爲メニ茲ニ千八百三十五年九月九日以來異ナリタル三個ノ法律アリタルコトヲ注意セサルヘカラス即チ 其一ハ印刷上ノ重罪輕罪及ヒ違警罪ニ關スル法ニテ千八百四十八年三月六日ノ布令ニヨリテ廢止セラレタル所ニシテ茲ニ問題ニ係ラサルモノ 其他ノ一ハ重罪院ニ關スル法ニテ右同一ノ布令ハ獨リ其第四條第五條第七條ノミヲ廢止セラレ其他ノ諸條ハ保存セラレタル所ニシテ我輩ハ異日之ヲ説明スヘシ 最終ニ第三ハ治罪法第二百四十一條第三百四十五條第三百四十六條第三百四十七條及ヒ第三百五十二條並ニ刑法第十七條ノ改正ニ關スル法ニテ右同一ノ布令ハ獨リ第三百四十二條ノ第四項ト第三百四十七條トニ關スル規則ノミヲ廢止シ而シテ此諸條及ヒ第三百五十二條ハ陪審ノ宣告ニ付キ必要ナル數多ノ問題ニ係リ其後尙ホ千八百五十三年ノ法ニヨリテ變更セラレタリ此最終ノ法ハ我輩其相當ノ場所ニ於テ之ヲ示スヘシ

(一九七五號) 重罪院ノ役員ヲ組織スルノ方法ニ關シテハ法官ト陪審トノ間ニ區別ヲナサルヘカラス

### 重罪院ノ法官

(一九七六號) 裁判官ノ資格ヲ以テ重罪院ニ列席スル法官ノ員數ハ、治罪法ノ舊第二百五十四條ト千八百十年ノ法トニヨリ刑事ニ於テ裁判スル控訴院ノ他ノ局ノ員數ノ如ク、五名ニ定メラレタリシカ、千八百三十一年三月四日ノ法ニヨリ三名ニ減セラレタリ、(一)英吉利ニ於テハ重罪院ノ裁判長ハ單獨ノ法官ナルコトハ既ニ人ノ知ル所ナリ、但シ此法官ハ他人ノ意見ヲ聽クノ要用アリト思考スル法律上ノ問題ニ付キ補助裁判官ノ資格ヲ以テスル所ノ其同僚ノ一人ニ協議スルコトヲ得ルモノタリ、而シテ時ニ或ハ實際之ヲ行フコトアリ(一九四〇號參觀)

(二)治罪法(第二百五十二條)千八百三十一年三月四日ノ法ニヨリテ編纂セラレタルモノニ係ル) 控訴院所在ノ各州ニ於テハ其院ノ裁判官三名ニテ重罪院ヲ開設ス可シ但シ其中ノ一名ハ其院ノ第一ノ裁判長タルヘキモノトス○檢察官ノ職務ハ檢事長若クハ代官人長一名若クハ檢事長ノ代職一名ニ於テ之ヲ履行スヘシ○控訴院ノ書記ハ重罪院ニ於テ自カラ其職務ヲ執行シ又ハ誓ヲ爲シタル手傳役一名ヲシテ其職務ヲ執行セシム可シ(第二百五十三條)千八百五十五年三月二十一日ノ法ニヨリテ編纂セラレタルモノニ係ル) 其他ノ各州ニ於テハ重罪院ヲ左ノ如クニ組織ス可シ



第一特ニ委任セラレタル控訴院ノ裁判官一名但シ此裁判官ハ其院ノ第一ノ裁判長タル可キモノトス

第二控訴院ニ於テ特ニ其裁判官ヲ委任スルコト適當ナリト思考シタル時ハ其院ノ裁判官中ヨリ撰ミタル裁判官二名若クハ重罪院ヲ設クル地ノ始審裁判所長又ハ其裁判官中ヨリ撰ミタル裁判官二名

第三始審裁判所ノ檢事又ハ其代職中一名但シ第二百六十五條、第二百七十一條、第二百八十四條ニ記シタル成規ト相觸ル、コトナカル可シ

第四始審裁判所ノ書記又ハ警ヲ爲シタル其手傳役一名

重罪院ヲ設クル地ノ始審裁判所長又ハ裁判官中ニテ重罪院ヲ組織スル爲メニ招喚セララル可キ者ハ控訴院ノ第一ノ裁判長豫メ檢事長ノ意見ヲ聽キタル上ニテ之ヲ指定ス可シ○其指定ハ千八百十年七月六日ノ布令第七十九條及ヒ第八十條ニ定メタル方法ニ從ヒ其期限内ニ之ヲ爲シ及ヒ之ヲ公布ス可シ○重罪院ノ會議開始ノ日ヨリ後ハ其院ノ第一ノ裁判長ニ於テ正當ニ差支アル補佐官ノ引易ヲ設備ス可ク若シ又別段ノ理由アル時ハ補充ノ補佐官ヲ指定ス可シ

(第二百五十七條 重罪院ニ移ス事ニ付キ發言ヲ爲シタル控訴院ノ裁判官ハ其同一ノ事

件ニ於テハ重罪院ノ上席ヲ爲スコトヲ得ス又重罪院ノ第一裁判長ノ補佐ヲ爲スコト得ス若シ之ニ違フ時ハ無効タルヘシ○豫審裁判官ニ付キテモ亦之ト同一タル可シ

(第二百六十二條 若シ此法典第二百八十九條ニ據リ陪審ニ爲シタル送付ノ後重罪院ノ第一裁判長ノ其職務ヲ履行スル能ハサル事アル時ハ控訴院ノ他ノ裁判官ニシテ右第一裁判長ヲ補佐スル爲メニ撰任セラレ又ハ委任セラレタル者ノ中最先任ノ裁判官之ニ代ハルヘク若シ又控訴院ノ裁判官ニシテ補佐官タル者アラサル時ハ始審裁判所ノ第一裁判長之ニ代ハルヘシ)

(第二百六十四條 控訴院ノ裁判官ハ不在又ハ總テ其他ノ差支ノ場合ニ於テハ同裁判所中ノ他ノ裁判官之ニ代ハルヘク若シ其アラサル時ハ始審裁判官之ニ代ハル可シ又始審裁判官ハ其補役之ニ代ハルヘキモノトス○見習裁判官ニシテ現ニ出席シ且ツ必要ナル年齢ニ達シタル者ハ右ノ代理ニ付キ其受任ノ順序ニ從ヒ始審裁判所ト抗競ス可シ)

(第一條 帝國裁判院ノ第一裁判長ハ重罪院ノ各開設ニ付キ其院ノ裁判官一名ニ重罪院ノ裁判長ヲ命ス可シ又右第一裁判長ハ適當ナリト思料スル時ハ自カラ重罪院ノ裁判長トナルコトヲ得 又右第一裁判長ハ帝國裁判院ノ所在地ニ在テハ重罪院ニ於テ裁判長ニ陪席



スヘキ評定官四名ヲ命ス可シ 又右第一裁判長ハ其裁判院ヨリ評定官ヲ派出スルヲ適當ナリト思料スルルハ府縣ニ於テ裁判長ト共ニ重罪院ヲ開設スヘキ所ノ該裁判官ノ評定官ヲ命ス可シ 但シ大判官(譯者曰ク大判官ハ第一帝國ノ下ニ於テハ司法大臣常ニ之ニ當レリ)ハ總テノ場合ニ於テ重罪院ヲ開設スヘキ爲メ帝國裁判院ノ裁判長及ヒ評定官ヲ命スルヲ得ヘシ 此任命ノ時期ハ行政規則ヲ以テ之ヲ定ム)

千八百十年七月六日ノ布令

(第七十九條 治罪法第二百五十九條ニ從ヒ三ヶ月毎ニ開設スヘキ所ノ重罪院ノ裁判長ハ我大判官ニ於テ其開設ノ期限中後期三ヶ月ノ爲メニ之レカ任命ヲナサ、ルルハ帝國裁判院ノ第一裁判長ハ重罪院閉鎖ノ日ヨリ八日內ニ右ノ任命ヲ爲ス可シ)

(第八十條 大判官ニ於テ爲ス所ノ任命又ハ其任命ヲナサ、ルルハ第一裁判長ニ於テ爲ス所ノ任命ハ第一裁判長ノ命令ヲ以テ之ヲ公示スヘシ而シテ此命令ハ常ニ重罪院ノ開始ノ定日ヲ包含スヘシ此命令ハ遅クモ重罪院ノ開始ニ繼グ所ノ第十日ニ之ヲ公布スヘシ)

(第八十一條 治罪法第二百五十九條ニ從ヒ重罪院ノ非常開設ノ場合ニ於テハ其以前ノ重罪院ノ裁判長ハ法律上ヨリシテ此非常重罪院ノ裁判長トナルヘシ 其死去又ハ正當ナル差支アル場合ニ於テハ重罪院ノ裁判長ハ非常ノ重罪院開設ノ必要ヲ認メタルト同時ニ

更ニ第一裁判長ニ命セララルヘシ更任ノ命令ハ此非常ノ重罪院開始ノ定期ヲ包含スヘシ)

(第八十二條 帝國裁判院所在ノ府縣ニ於テ重罪院ヲ開設スヘキ所ノ評定官ノ任命及ヒ、、、、(此點ハ削除セラレタリ)ハ裁判長ノ任命ニ於ルト同一ノ方法ニヨリ且ツ前條ニ規定シタル時期ニ於テ之ヲナスヘシ)

(第八十八條 重罪院ノ開設ニ付キ委任セラレタル裁判長及ヒ評定官ノ任命ト重罪院開始ノ定日トヲ包含スル命令ハ帝國裁判院檢事ノ注意ニ因リ重罪院ヲ開始スヘキ始審裁判所ニ交付スヘシ此命令ハ其之ヲ受領セシヨリ三日內ニ始審裁判所檢事ノ請求ニ因リ公廷ニ於テ公布スヘシ)

(第八十九條 此命令ノ公告ハ重罪院ヲ開設スヘキ府縣ノ新聞紙ニ之ヲナスヘク又區ノ首タル地及ヒ始審裁判所所在地ニ之ヲ揭示スヘシ)

(第九十三條 帝國裁判院ノ所在地ニ於テハ第一裁判長カ裁判長タル所ノ民事局ハ我帝國裁判院檢事ヨリ事情ノ重大ナル理由ヲ以テ諸局會議ノ請求ヲ爲シ且ツ此請求ニ對シテ相當ナリトノ判決アリタルルハ其事件ノ辨論及ヒ裁判ニ付キ重罪院ニ合同スヘシ)

(一九七七號) 控訴院管轄內ノ各府縣ニ於テ重罪院ヲ開設シ、又ハ派出シテ之ヲ開設スル所ノ控訴院ナリトノ大原則ハ、其人員組織ノ點ヨリ之ヲ觀レハ左ノ三個ノ方法ヲ以テ顯ハル



、モノトス

第一、控訴院ノ所在地ニ於テ重罪院ヲ開設スル裁判官ハ評定官三名ニシテ、其一名ハ裁判長トナリ他ノ二名ハ陪席官トナル

第二、其他ノ府縣ニ於テハ、派出シテ重罪院ヲ開設スル者ハ常ニ裁判長ノ資格ヲ以テスル評定官ナリトス、又控訴院ハ右ノ裁判長ト共ニ陪席官ノ資格ヲ以テ重罪院ヲ開設スル所ノ二名ノ評定官ヲ附加スルコトヲ得、若シ此陪席官ナキ時ハ重罪院開設ノ地ノ始審裁判所ノ人員中ヨリ二名ノ陪席官ヲ取ルヘシ、而シテ是レ實際ニ於テ最モ屢々行フ所ノモノナリ(治罪法第二百五十三條)

第三、控訴院ノ民事局ハ若シ事情ノ重大ナルヨリシテ必要トスル場合ニハ、控訴院檢事ノ請求ニ因リ總局合議ヲ開キ其控訴院ノ判決ヲ以テ事件ノ辨論及ヒ裁判ニ付キ重罪院ニ合同スルコトヲ得(千八百十年ノ布令第九十三條)

(一九七八號)重罪院ノ裁判長、及ヒ陪席評定官ノ任命ハ司法大臣(帝政府ノ法律及ヒ布令ニ於テハ之ヲ大判官ト稱ス)ニ於テ之ヲ爲ス、而シテ司法大臣ノ之ヲナサ、ルキハ控訴院ノ第一裁判長ニ於テ之ヲ爲ス(千八百十年ノ法第十六條參觀)千八百十年ノ布令ハ其第七十九條及ヒ第八十二條ニ於テ然ク此二箇ノ職務ヲ規定シタリ、即チ司法大臣ハ其職權ヲ使用セシ

ト欲スルキハ重罪院ノ開設中、後期三ヶ月ノ爲メニ此任命ヲ爲スヘシ、若シ司法大臣之ヲナサ、ルキハ此任命ヲナスノ限權ハ第一裁判長ニ屬ス

非常ノ重罪院、語ヲ換ヘテ之ヲ言ヘハ各三ヶ月毎ニ開設スヘキ所ノ重罪院ノ上ニ更ニ開設スル所ノ重罪院ニ付キテハ、其以前ノ重罪院ノ裁判長ハ法律上ヨリシテ非常重罪院ノ裁判長トナルヘシ(千八百十年ノ布令第八十一條參觀)裁判例ニ於テハ類推ノ方法ニヨリテ實際陪席裁判官ニモ亦規則ヲ適用ス、

重罪院開設ノ地ノ始審裁判所ヨリ取ル所ノ陪審裁判官ノ任命ニ關シテハ困難アリタリ、然ルニ千八百五十五年三月二十一日ノ法ヲ以テ此任命ノ權ヲ豫メ控訴院檢事ノ意見ヲ聽クヘキ所ノ控訴院ノ第一裁判長ニ屬シ而シテ此困難ヲ消滅セシメタリ、(第千九百七十六號挿註ニ舉ケタル改正ニ係ル治罪法第二百五十三條ヲ參觀スヘシ)

(一九七九號)我輩カ曩ニ陳述シタル理由(一九四六號及ヒ一九四七號參觀)ニ因リ既ニ豫審裁判官ノ資格ヲ以テ事件ニ關與シタル所ノ豫審判事又ハ既ニ重罪取調局ニ於テ重罪裁判ニ附スヘキコトヲ投票シタル所ノ評定官ハ此同一ノ事件ニ付キ裁判長ノ資格タルト陪席裁判官ノ資格タルトヲ問ハス皆無効ノ制裁ヲ附シテ重罪院ニ出席シ得ルコトヲ禁シタリ(治罪法第二百五十七條)是レヨリ事實上數多ノ場合ニ於テ重罪院ノ評定官ヲ擇フニ重罪取調局外ノ



他ノ局ニ於テスルノ必要ヲ生シタリ

(一九八〇號)重罪院ノ裁判長及ヒ陪席裁判官ノ任命ハ此重罪院ノ開始ヲ定メタル期日ト同シク、千八百十年ノ布令第八十條第八十八條及ヒ第八十九條ニヨリ規定セラレタル期限ト程式トニ從ヒ全管轄地内ニ之ヲ公布セサルヘカラス、

一九八一號)治罪法及ヒ千八百十年ノ布令ハ指定シタル法官ノ死去、不在又ハ差支ノ場合ヲ豫想シ其更代ヲ爲スヘキ方法ヲ規定シタリ(治罪法第二百五十三條第二百六十三條第二百六十四條及ヒ千八百十年ノ布令第八十一條參觀)

既ニ始マリタル事件ニ付キ其差支ノ生シタルトキハ、其事件ヲ他日ニ讓ラサルヘカラサルニ至ルヲ以テ、特ニ大不便アル所ノ困難ヲ豫防センカ爲メニ、其事件カ長キ辨論ヲ要スヘク、且ツ其錯雜ニシテ周密調査スルヲ要スルカ如ク見ユル所ノ重罪院開期ニアリテハ重罪院ノ判決ニ付キ陪審ニ對シテナス所ノ類推ト(治罪法第二百九十四條參觀)共和紀元第八年二月二十五日ノ法律ノ適用トニヨリ必要ノ場合ニ於テ差支ヲ生シタル陪席官ヲ更代スルニ在ル所ノ補助陪席官一名又ハ二名ヲ重罪院ニ附加スルコトハ毫モ妨ケナシトス、此事ハ千八百五十五年ニ命シタル治罪法第二百五十三條ノ新編纂ニ付キテハ一個ノ問題トナリタリ(前挿註ニ擧ケタル此條ヲ觀ルヘシ)

### 重罪院陪審官

(一九八二號)今茲ニ論スル所ノ陪審官ナルモノハ自己ノ良心ニ照シ且ツ宣誓(是レヨリシテ陪審官ニ「ジュレー」ノ名ヲ來シタリ、(譯者曰ク「ジュレー」トハ誓ヲ爲スノ義ナリ)シ、自カラ確信スル所ニ由テ重罪ノ訴訟ニ付キ被告人ノ有罪又ハ無罪ヲ判決スルノ裁判官トシテ組織セラル、其國ノ居住人即チ國人ヨリ成ル所ノ一箇ノ委員ノ團結ナリトス、人民ノ刑事裁判ニ干渉スルハ右ノ方法ヲ以テスルモノナリ、是レヨリシテ此方法ヲ以テ成リタル裁判ヲ名ケテ國ニヨリテノ裁判ト云ヘル少シク過大ナル稱呼ヲ來シタリ

(一九八三號)我輩ハ此稱呼ヲ以テ過大ナリトス、何トナレハ二三ノ國人即チ其國ノ居住人ヲ以テ組織セラレタル一個ノ陪審官ニシテ一個ノ或ル事件ニ付キ有罪無罪ヲ決スルコトニ關シテ之ヲ云ヘハナリ、實ニ茲ニ於テ「國ニヨリテノ裁判」ト云フキハ一部分ヲ以テ強テ之ヲ其全部ニ關セシメテ云フ者ナルコトハ疑ヒナキナリ、然レモシ此ノ如ク人民ヲ以テ裁判スル所ノ裁判ノ全体、即チ唯訴訟ノミナラス其他疑點ノ存スル問題又ハ公衆ニ利害ヲ及ボス事件ノ調査ハ此陪審ヲ以テ決定スルノ方法ハ普通法ニ屬シ、規則上ニシテ且ツ一般ナル方法ナリトノ衆人ニ固着シタル議論及ヒ感情ナルコトヲ想像シ、又各々此裁判及ヒ此決定ノ爲メニ協同スルハ自己ノ爲メニナスヘキ勤務ノ如ク思考スル生來固有ノ確然守矩トナリタルコト



ヲ想像シ、又凡ソ陪審ヲ必要トスル機會ニ遇フ毎ニ輒チ之ヲ召集スルコト、陪審ノ以上ノ職役トヲ想像スルキハ此全体ニ付キ右ノ稱呼ハ致テ過大ナルヲナク、實ニ國ニヨリテノ裁判ナリト云フヲ得ヘシ、夫レ社會ノ構成ニ於テ其確信スル所斯ノ如キノ度ニ達シ之ヲ以テ殆ント人民ノ生存ノ方法トナスニハ此人民ハ充分ニセルフ、ガバルンメント」即チ己レ自理自營ト云ヘル性質ヲ有セサルヘカラス、嗚呼此ノ如キ政府ニ於テハ人民ノ自カラ政府ニ干涉スルニ付キテハ司法部ノ外復タ他ニ如何ナル必要ノ部アルヤ、

我佛蘭西人ハ此習慣ヲ來スベキ良性ヲ有セス、而シテ他ノ良性ヲ有ス、陪審制度ハ我國ニ於テハ一部分ニ適用スルモノニシテ屢々論争セラレ今日ニアリテハ新法律及ヒ法律ノ外尙ホ裁判上ノ實際ニヨリ減縮セラレタル適用ヲ受クルニ過キス、且ツ實際家ト稱スル者ノ普通ノ傾向ハ尙ホ之ニ不服ヲ唱フルニアリ、抑々陪審制度ニ付キ我國ニ於テハ、賄賂ヲ以テ不正ノ裁判ヲナサシムルト云フノ語モ尙ホ人ノ知ラサル所ナルカ於ニ、素ヨリ此事アルナゲレハ、此制度ニ對シテ通常誹謗スル所ハ此點ニアラスシテ、被告人ヲ罰スルノ薄弱氣力ノ缺乏ニ關シテ誹謗ヲ受クルニアリ、且ツ其誹謗ハ之レカ爲メニ事件ノ錯雜ヲ生シ遲滯ヲ來シ費用ヲ増シ、又己レ自カラ事務ヲ爲スヨリハ寧ロ官廳ヲシテ其事務ヲナサシムルノ習慣アル人民ナルカ故ニ之ヲ一ノ荷擔トナスノ點ニアリ

然レモ予ハ左ノ事ヲ明言スヘシ、抑々此十二名ノ陪審タルヤ被告人ト辯護人トヲ目前ニ有シ我法官ノ指揮スル所トナリ、公衆ノ傍聽席ニ列スルアリ、證據ノ漸次其目前ニ顯ハル、アリ、而シテ充分ノ自由ヲ以テ辨論セラル、所ニシテ、人ノ陪審ニ對シテ要求スル所ノモノハ唯良心ノ一個ノ注意良智良能ヨリ出ル一個ノ論理善長ナル人ノ一個ノ公平ナル確信ニ由テ以テ判定ヲ下スニアル而已、予ハ我々全衆ノ中ヨリ出タル此十二名ノ裁判官即チ此陪審官ノ團結ヲ視ル毎ニ未タ曾テ一ノ深遠ナル感動ヲ起サスンハアラサルナリ、夫レ陪審官ノ一二ノ宣告ニ付キ多少嚴格ナラサルコト又ハ氣力ノ稀少ナルコトハ憂フルニ足ラス、詳カニ之ヲ言ヘハ、或ハ陪審外ナル他ノ嚴格ナル人ノ許サ、ル所ノ人情上ノ薄弱或ハ一國ノ風俗或ハ事件ノ情狀ニ關スル風潮ニ與ヘタル寛大ノ處置ハ憂フルニ足ラサルナリ、蓋シ其刑事裁判タル被告人ヨリ社會全体ニ至ルマテ皆信用及ヒ尊敬ヲナスニ付キ利益ヲ得タリトナシ、又其裁判タル人民ノ本源ヨリ出タル重量アル威力ニ成リタルニ付キ利益ヲ得タリトナセハ、是レ即チ大ニ利益ヲ得タルモノナリ、若シ刑事裁判ニシテ此本源ヲ失ハ、則チ刑事裁判ノ信用上下効果上下ニ於テ失フ所ノモノハ實ニ測ルヘカラサルナリ、是ヲ以テ一般ノ教育ハ決シテ我衆人カ陪審制度ニ關シテ有スル所ノ思考ヲ減殺シ薄弱ニスヘカラサルノミナラス反テ大ニ之ヲ擴充シ之ヲ鞏固ニスルノ方針ヲ執ラサルヘカラス(一)



(一) 塊太利ニ於テハ治罪法ノ頒布ト同一ノ日付即チ千八百七十三年五月二十三日ニ頒布シタル法律ハ當分陪審制度ノ中止ヲ許シタリ

(一九八四號) 予ハ合衆國ニ於テ「アングロサクソン」種族カ「リンチ」ノ恐ルヘキ法(譯者曰ク「リンチ」ハ法律ノ名ナリ)即チ一個ノ野蠻ナル沸騰公衆復讐ノ暴舉多衆ノ情慾ノ爲メニ指揮セラル、裁判ノ外形ヲ適用スルヲ看ルルハ茲ニ幾分カ「セルフガバルメント」ノ粗暴ノ感情存セリト謂フヘシ、抑々此ノ如ク獄舎ノ門戸ヲ破壊シ囚徒ヲ略奪シ相互ノ中ニ就キテ陪審ヲ組織シ唐突公廷辨論ニ類似スル一種類ヲ設ケ死刑ヲ宣告シ其場所ニ於テ直チニ之ヲ執行スル所ノ輩ハ、自カラ此ノ如ク其自己ノ事件ヲ爲スノ權ヲ有シ且ツ裁判ヲ施行シタリト信スト雖モ、是レ唯粗暴ナル一個ノ苛酷ヲ施行シタルニ過キス、而シテ其自カラ信スル所モ亦中心實ニ自カラ善ナリトナスニアラスシテ虛偽ノ信ニ屬スルナリ、元來「セルフガバルメント」ハ其性質善良ナリト雖モ之ヲ擴充スルヲ其度ニ過クルハ變シテ瑕瑾ト成リ瑕瑾ノ極遂ニ犯罪ニ陷ルモノナリ嗚呼或ル場合ニ於ケル熱中ハ天下羣惡ノ極ナル哉

(一九八五號) 文運ノ開明ニ至リタル種々ノ世期及ヒ古昔ノ人民特ニ羅馬法律中ニ於テ陪審制度ノ基礎タル所ノ根原ノ思考ニ付キ、人ノ看出ス所ノ事跡ノ如何ニ拘ハラズ、要スルニ其實際タル、定期ノ重罪院ニ於テ現時ノ定式ヲ以テスル陪審ノ裁判ハ歐洲現時ノ人民ニハ野

蠻時代ノ風俗ト封建時代ノ風俗トヨリ來リタルヲ是レナリ、而シテ此風俗ニアリテハ陪審ノ裁判ハ民事及ヒ刑事ニ存シタリ(五六號及ヒ一〇二號參觀)英吉利ニ於テハ陪審ノ裁判ハ遺傳シテ保持セラレ改良セラレタルニ我千七百八十九年ノ革命ノ時立憲議院カ單ニ刑事裁判特ニ施体又ハ加辱ノ刑ヲ來ス所ノ犯罪事件ニ付キ之ヲ再設シ之ヲ組織シタリシハニ於テハ(一四六號及ヒ一九四三號參觀大陸中ニ廢絶シタリ(五六號及ヒ一二二號參觀))

(一九八六號) 陪審制度ハ要スルニ其國ノ居住人即チ人民カ裁判ニ干涉スルモノニ過ギサルカ故ニ、本然ニ其國ノ組織ノ方法ニ附隨スルモノトス、是ヲ以テ政事上ノ革命ニ付キ陪審制度ニ其影響ヲ及ボサ、リシコトハ未タ曾テ之レアラサルナリ、我國ノ立憲議院ノ千七百九十一年ノ法律以來陪審ニ關スル法律ハ最モ屢々變更セラレ、陪審ニ關スル所ノ治罪法ノ諸條ハ多數ノ變更ヲ受ケタリ、陪審制度ノ基本ハ千八百二十七年三月二日ノ法ト千八百四十八年八月七日ノ布令トニヨリテ擴張セラレ、次キニ千八百五十三年六月十四日ニ於テ新ナル精神ヲ以テ編纂セラレタル一法出テタリ、千八百七十年十月四日ノ布令ハ一時再ヒ千八百四十八年ノ方法ヲ實行シタリ、最終ニ千八百七十二年十一月二十一日ノ法ハ或ル必要ナル變更ヲ以テ千八百五十三年ノ方法ニ復シタリ(一)

(二) 千八百七十二年十一月二十一日頒布ノ陪審ニ關スル法



第一章 陪審トナルニ必要ナル條件

(第一條 年齢十六歳ニ滿タサル者政權民權及ヒ親族權ヲ有セサル者又ハ以下ノ二條ニ於テ規定シタル無能力不合格ノ一ニ在ル者ハ何人ト雖モ陪審ノ職務ニ就クコトヲ得ス若シ之ニ違フキハ其有罪ノ宣告ハ無効ナリトス

第二條 左ニ記載シタル者ハ陪審トナルノ能力ナキモノトス

第一 施体及ヒ加辱ノ刑又ハ單ニ加辱ノ刑ニ處セラレタル者

第二 法律上重罪タル事件ニ付キ輕罪ノ刑ニ處セラレタル者

第三 「ブイレー」譯者曰ク「ブトレート」ハ元來鉄丸ヲ云フ然レモ茲ニ於テハ軍律ノ施体加辱ノ一個ノ刑名ナリトス)又ハ服役ニ處セラレタル軍人

第四 三ヶ月以上ノ禁錮ニ處セラレタル者但シ國事犯罪又ハ印刷犯罪ニ付キ處斷ヲ受ケタル者ハ本條第十一項ニ記載スル所ノ有期ノ無能力トナルニ過キス

第五 盜罪詐欺取財罪背信罪監守盜罪刑法第三百三十條及ヒ第三百三十四條ニ記載シタル風俗ニ關スル罪高利貸ノ罪ニ付キ罰金又ハ期限ノ如何ヨリ拘ハラス禁錮ニ處セラレタル者風俗及ヒ宗教ニ對スル不敬罪所有權ノ原則及ヒ親族ノ權利ニ對シ抗撃スル罪千八百十九年五月十七日ノ法第一條ニ記載シタル方法ノ一ヨリ風俗ニ

對シテ犯シタル罪浮浪ノ罪又ハ乞丐ノ罪徵兵令第六十條第六十三條及ヒ第六十五條ノ規則ニ反クノ罪刑法第四百二十三條及ヒ千八百五十一年三月二十七日ノ法第一條並ニ千八百五十五年五月五日及ヒ九日ノ法第一條ノ規則ニ反クノ罪刑法第三百四十四條第四百四十二條第四百四十三條第四百七十四條第五百五十一條第三百五十五條第三百四十五條第三百六十二條第三百六十三條第三百六十四條第三百六十五條第三百六十六條第三百七十八條第三百八十九條第三百九十九條第二項第四百條第二項第四百十八條ニ記載シタル犯罪ニ付キ禁錮ニ處セラレタル者

第六 重罪被告ノ位置又ハ重罪欠席裁判ノ位置ニアル者

第七 奪職セラレタル公証人書記及ヒ司法屬公吏

第八 復權ヲ得タル分散人但シ其分散ハ佛蘭西ノ裁判所ニ於テ宣告セラレタルト外國ノ裁判所ニ於テ宣告セラレ而シテ佛蘭西ニ於テ執行スヘキモノトナシ

第九 治罪法第三百九十六條又ハ刑法第四十二條ニヨリ陪審ノ職務ヲ禁セラレタル者

第十 拘留狀又ハ収監狀ニヨリ拘留又ハ収監セラル、者

第十一 犯罪ノ如何ヲ問ハス且ツ國事犯罪又ハ印刷ニ關スル犯罪ニ付キテモ三ヶ月



以下ノ禁錮ニ處セラレタル者ハ其刑ノ終リタル日ヨリ起算シ單ニ五年間無能力ナ  
リトス

第十二 禁治産者浪費者及ヒ千八百三十八年六月三十日ノ法ニヨリ瘋癲病院ニ入ラ  
レタル者ハ前項ト同シク無能力ナリトス

第三條 國會議員大臣參事院員會計檢査院員内閣少書記官大臣ノ書記官府縣知事郡長  
府縣書記官府縣常置委員大審院又ハ控訴院員民事裁判所又ハ商事裁判所ノ裁判官并  
ニ試補官始審裁判所檢察官治安裁判官警部政府ノ認許シタル宗教管長現ニ職務ニ從  
事スル海陸軍人税關間稅官有森林電信官署ノ現職ニアル官吏又ハ雇吏小學教官ノ職  
務ニアル者ハ陪審ノ職務ヲ行フコトヲ得ス

第四條 僕婢雇人並ニ佛蘭西語ヲ誦シ及ヒ書スルコトヲ知ラサル者ハ陪審トナルコトヲ得  
ス

第五條 左ニ記載シタル者ハ陪審ノ職務ヲ免ルモノトス

第一 七十歳以上ノ者

第二 毎日ノ勞力ニ因リ生計ヲ營ム者

第三 其年又ハ前年ノ間陪審ノ職務ヲ行ヒタル者

第二章 毎年ノ名簿ノ組織

第六條 陪審ノ毎年ノ名簿ハセーヌ縣ニ於テハ陪審三千名其他ノ府縣ニ於テハ人口五  
百ニ付陪審一名ヲ含蓄ス但シ府縣ニ於テハ陪審ノ數四百名ヨリ少ナキコトヲ得ス又六  
百名ヨリ多キコトヲ得ス 名簿ハ府縣中ニ住所ヲ有スル所ノ内國人ニアラサレハ含蓄  
スルコトヲ得ス

第七條 毎年ノ名簿ニ關スル陪審ノ數ハ官製ノ人口表ニ配當シテ郡及ヒ區ニ分配ス此  
分配ハ毎年七月府縣ノ委員ノ意見ニ從ヒ又セーヌ縣ニ於テハ府縣會廳ノ意見ニ從ヒ  
府縣知事ノ決議ニヨリテ之ヲ爲スパリイ府ニ於テハ之ヲ區及ヒ小區ニ爲ス府縣知事  
ハ分配ノ決議ヲ治安裁判官ニ示シテ當年及ヒ前年ノ間ニ抽籤ニ因テ指定セラレタル  
郡ノ陪審ノ氏名ヲ知ラシム

第八條 各郡ニ於テ議長トナル治安裁判官治安裁判官試補及ヒ郡ノ總テノ邑ノ長ヨリ  
組織セラレタル委員會ハ毎年ノ豫備ノ名簿ヲ編製ス此名簿ハ郡ノ候補者ニ付キ定メ  
ラレタル數ノ二倍ヲ含蓄ス 委員會ハ單一ノ邑ヨリ成ル郡ニ於テハ治安裁判官及ヒ  
其試補ノ外尙ホ邑長及ヒ邑會ノ指定シタル議員二名ヲ以テ組織ス 多數ノ郡ニ區別  
セル邑ニ於テハ每郡委員會ヲ置ク此各委員會ハ治安裁判官及ヒ其試補ノ外尙ホ市街



ノ長又ハ此長ノ委任ヲ受ケタル補助并ニ邑會ノ委任ヲ受ケタル邑議員二名及ヒ郡中ニ含蓄スル村落ヨリ成ル邑ノ長ヲ以テ組織ス

第九條 豫備ノ名簿ハパリ一府ニ於テハ各區ニ付キ議長トナル其區ノ治安裁判官又ハ其試補區長又ハ其補助區ニ於テ命シタル區議員其他前年區ノ名簿ニ記載セラレタルモノニシテ其區ニ住所ヲ有スル陪審ノ中ニアル最初ノ三名ノ指定シタル四名ヲ以テ組織スル所ノ委員會ニ於テ之ヲ編製ス

第十條 豫備ノ名簿ヲ編製スルノ委任ヲ受ケタル委員會ハ八月ノ初メノ十五日ニ行政上ノ程式ニヨリ治安裁判官カ發シタル特別ノ徵集ニ付キ其管轄内ノ首地ニ會合ス名簿ハ原本二個ヲ製シ其一ハ治安裁判所ノ書記局ニ送付シ他ノ一ハ其區ノ民事裁判所ノ書記局ニ送付スセ一又縣ニ於テハ郡區ノ委員ノ製シタル第二原本ハセ一又民事裁判所ノ書記局ニ送付ス 公衆ハ治安裁判所ノ書記局ニ豫備名簿ノ送付ニ繼ク所ノ十五日間之ヲ閱覽スルヲ得

第十一條 毎年ノ名簿ハ各區ニ付キ議長トナル民事裁判所ノ裁判長又ハ其職務ヲ行フ所ノ法官治安裁判官及ヒ府縣會議員ヲ以テ組織シタル委員會ニ於テ之ヲ編製ス若シ郡ノ議員差支アルハ區ノ議員之ニ代ハル若シ同一ノ郡ニ區ノ議員二名アルハ其

最年長ノ者之ニ代ハル 委員會ハパリ一府ニ於テハ各區ニ付キ議長トナルセ一又ノ民

事裁判所ノ裁判長又ハ此裁判長ノ委任ヲ受ケタル一裁判官區ノ治安裁判官及ヒ其試補區長邑長區會議員四名ヲ以テ組織ス センドニ一及ヒソ一ノ委員會ニ於テハセ一

又ノ民事裁判所ノ裁判長ノ委任ヲ受ケタル該裁判所ノ一裁判官之レカ議長トナル第十二條 本法ニ於テ認メタル總テノ場合ニ於テ邑長ハ其差支アルハ特ニ委任ヲ受ケタル補助役之レカ代理ヲ爲ス

第十三條 陪審ノ毎年ノ名簿編製ノ委任ヲ受ケタル委員會ハ遅クモ九月中民事裁判所ノ裁判長ノ徵集スル所ニヨリ區ノ裁判上ノ首地ニ會合スヘシ此委員會ハ此名簿中ニ郡ノ委員會ノ豫備名簿中ニ記載セラレサル人ノ氏名ヲ舉クルヲ得ヘシ但シ其數ハ郡ノ委員會ニ於テ記載セラレタル氏名ノ四分ノ一ヲ超過スルヲ得ス此委員會ハ同様ニ各郡ニ付キ府縣知事ノ定メタル配當ノ候補者ヲ増加シ又ハ減殺スルノ能權ヲ有ス但シ其減殺増加ハ郡ノ候補者ノ四分ノ一ヲ超過スルヲ得ス又區ノ候補ヲ變更スルヲ得ス 決定ハ多數ニ因リ又同數ニ相分レタルハ議長之ヲ決定スルノ權アリ

第十四條 區ノ名簿ノ編製全ク終リタルハ會議ノ場所ニ於テ各自之ニ署名スヘシ此



名簿ハ十二月一日前扣訴院ノ書記局又ハ重罪院ノ開設ヲ任セラレタル裁判所ニ送付スヘシ

第十五條 重罪院ヲ開設スル所ノ市街ノ陪審中ニ採用セラレタル豫備陪審ノ特別ノ名簿ハ陪審ノ毎年ノ名簿ノ外別ニ之ヲ編製スヘシ此名簿ハパリニ於テハ陪審三百名其他ノ府縣ニ於テハ五十名ヲ含蓄ス 此名簿ハ重罪院ヲ開設スル所ノ區ノ委員會ニ於テ之ヲ編製スヘシ パリニ於テハ區ノ各委員會ハ豫備陪審十五名ノ名簿ヲ編製スヘシ

第十六條 扣訴院ノ第一裁判長又ハ重罪院開設ノ首地ニアル裁判所ノ裁判長ハ十二月ノ初メノ十五日中ニ「アベセ」ノ順序ニ因リ區ノ名簿ニ從ヒ縣ノ毎年ノ名簿ヲ編製スヘシ又是等ノ裁判長ハ同様ニ豫備陪審特別ノ名簿ヲ編製スヘシ

第十七條 各郡ノ治安裁判官ハ毎年ノ名簿ニ記載セル氏名ノ人員ニ及フ所ノ死去無能力又ハ法律上ノ不合格ニ付キ之ヲ控訴院ノ第一裁判長又ハ重罪院ノ首地ニアル裁判所ノ裁判長ニ報告スルノ義務アリ此場合ニ於テハ治罪法第三百九十條ニ從ヒ決定スヘシ

第三章 各開期ニ付キ陪審ノ名簿ノ組織

第十八條 少ナクモ重罪院ノ開始前十日內ニ控訴院ノ第一裁判長又ハ控訴院ナキ所ノ市街ハ重罪院ノ首地ニアル裁判所ノ裁判長公廷ニ於テ毎年ノ名簿ニ付キ開期ノ名簿ヲ成ス所ノ三十六名ノ陪審ノ氏名ヲ抽籤ス其他是等ノ裁判長ハ又特別ノ名簿ニ記載スル豫備陪審二名ヲ抽籤ス

第十九條 若シ裁判ノ爲メニ定メタル日ニ於テ陪審ノ數カ不在又ハ其他ノ理由ニ因リ三十名以下ニ減シタルキハ記載ノ順序ニ從ヒ豫備陪審ヲ以テ之ヲ補足スヘシ尙其不充分ナルキハ特別ノ名簿中ニ記載セル陪審ニ付キ公廷ニ於テ抽籤シタル陪審ヲ以テ之ヲ補足スヘシ又第二段トシテ毎年ノ名簿中ニ記載セル市街ノ陪審中ニ於テ抽籤シタル陪審ヲ以テ之ヲ補足スヘシ千八百十年七月六日ノ布令第九十條ニ於テ認メタル場合(重罪院カ裁判上ノ首地外ナル他ノ市街ニ開設セラレ、キ)ニ於テハ相當陪審ノ數ハ毎年ノ名簿ニ記載セル市街ノ陪審中ニ付キ公廷ニ於テ抽籤ヲ爲シ以テ之ヲ補足ス

第二十條 治罪法第三百九十六條第二項ニ依テ科シタル五百「フラン」ノ罰金ハ控訴院ニ於テ之ヲ二百「フラン」ニ減スルヲ得但シ之レカ爲メニ本條ノ他ノ規則ヲ妨クルコトナシ



第四章 一般ノ規則

三四六

第二十一條 千八百五十三年六月四日ノ法及ヒ千八百七十年十月十四日ノ布令ハ廢止ス本法ニ抵觸セサル所ノ治罪法ノ規則ハ繼續シテ施行スヘシ  
千八百七十二年ノ爲メニ編製シタル陪審ノ一般ノ名簿及ヒ毎年ノ名簿ハ此年ニ付キ有効ナリトス

(一九八七號)陪審ノ組織ニ關シ二個ノ重モナル問題ヲ生ス、即チ第一ハ一般ノ問題ニシテ一般ニ陪審ノ職務ニ任セラルベキ資格ヲ有スルハ如何ナル人ナルヤ、第二ニハ各訴訟ニ特別ナル問題ニシテ陪審ハ各事件ニ付キ如何ニ組織セラル、ト云フ是レナリ

法律上陪審ノ職務ニ任セラルベキ資格ヲ有スル者

(一九八八號)第一ノ問題ハ千八百七十二年ノ法ノ陪審トナルニ必要ナル條件ト云ヘル標題ノ第一章ニ於テ規定セラレタリ

立憲議院殊ニ千八百十四年千八百三十年千八百四十八年ノ國會ヲ有スル政府ノ下ノ憲法以來、我最近時ニ至ルマテ五法ノ精神ハ陪審ノ職務ヲ以テ唯一個ノ負擔、一個ノ公務ト看做シタルノミナラス、且ツ陪審トナルノ權利ヲ有スル爲メニ一般ノ必要ナル條件ヲ満足スル所ノ人ニ對シテハ之ヲ政權ニ關スル目的物ノ一種ナリト看做シタリ、抑々此權利ハ一般ニ撰

舉權ト俱ニ共ニ伸縮シタリ、但シ全ク之ヲ同一視スルヲ得ス、何トナレハ其條件タル撰舉人トナルノ權利ニ付キテヨリテハ陪審トナルノ權利ニ付キ或ル點ニ於テハ比較上容易ナレドモ他ノ點ニ於テ比較上困難ナリケレハナリ、然レモ此撰舉權ハ特別ナル變更ヲ除クノ外陪審權ヲ定ムルノ標準トナリタリ、而シテ陪審ニ關スル千八百二十七年五月二日ノ法、撰舉ニ關スル千八百三十一年四月十九日ノ法、并ニ陪審ニ關スル千八百四十八年八月七日ノ布令ハ、此思考ヲ以テ制定セラレタルモノナリ

千八百五十三年及ヒ千八百七十二年ノ法ハ右ト反對ノ原則ヨリ出タリ、即チ陪審ノ職務ニ任セラル、トヲ得ルハ何人ノ爲メニモ一個ノ權利ヲ構成セスト云フコト是レナリ、則チ法律ニ定メタル一般ノ條件ヲ満足スル所ノ人ハ一般ニ此職務ニ任セラル、ノ資格ヲ有スト雖モ、又他ニ各人ニ對シ各別ニ考定スヘキ能力品行及ヒ性質ノ各人ニ於ル條件ヲ要ス、是ヲ以テ陪審トナル爲メニ必要ナル條件ヲ満足スル所ノ一般ノ人ヲ記載スル永久ノ名簿ノ總テノ方法、此名簿ニ關スル公示過テテ名簿ニ記載セス又ハ記載シタルニ付キ之レカ加除ヲ請求スルノ權利及ヒ裁判所ニ於テ此請求ニ對スル裁判ハ皆消滅ニ歸シタリ、千八百七十二年ノ法ノ報告者ハ曰ク(孰レノ國ニ於テモ公權ハ裁判權ノ順序及ヒ裁判所ノ構成ヲ規定シ而シ

三四七



テ其目的トナスヘキ所ハ唯一アルノミ、即チ可及的善良ナル裁判ノ支配ヲ得ンコト是レナリ  
 則チ公權カ自カラ任スル所ノ第一ノ條件ハ裁判官ノ職務ニ付キ其智識ト其固守トニヨリ此  
 職務ヲ充タスノ能力アル所ノ人ニアラサレハ敢テ任セサルナリ、若シ人アリ自カラ此職務  
 ニ任スルノ權利アリト主張スル所ノ一個ノ權利ヲ尊敬センカ爲メニ苟クモ裁判官ニシテ此  
 條件ニ欠クル者アルキハ此權利ヨリモ尙一層確實ニシテ尙一層尊崇スヘキ權利即チ社會ノ  
 權利、裁判ヲ受グル者ノ權利ヲ破壞スルナリト

(一九八九號) 一般ノ條件ハ共和紀元第四年二月ノ法律以來定メテタル年齡即チ滿三十歲  
 ノ年齡ヲ有スルコト、及ヒ政權民權并ニ親屬權ヲ有スルコト(千八百五十三年ノ法第一條ヲ觀ル  
 ヘシ)是レナリ、我國ニ於テハ夫ノ英吉利ニ於ルカ如ク外國人ノ被告ニ付キ内國人ト外國人  
 トノ各半分ヨリ成リタル陪審ヲ用ヰス、

其他第二條第三條第四條及ヒ第五條ニ於テ無能力ヲ惹起スヘキ數多ノ理由不合格ノ理由  
 擯斥ノ理由、及ヒ免許ノ理由ヲ注目セサルヘカラス、又新法ニ從ヘハ(第一條)無能力又ハ不合  
 格ニ關スル規則ニ違ヒタルキハ單ニ其無能力又ハ不合格ナル陪審ノ關與シタル所ノ有罪ノ  
 宣告ノ無効ニ屬スルコトヲ注目スヘシ、之ニ反シテ無罪ノ宣告ナルキハ被告人ハ既得ノ權ヲ  
 リトス

以上ノ條件具備シタルキハ、管轄官署ハ法律上陪審トナルヲ得ル人ニ付キ其適當ナリト思  
 料スル者ヲ陪審ノ職務ニ任スヘシ、而シテ其任セラレサル者ハ如何ナル請求ノ權利ヲモ有  
 セサルナリ、

實際ノ裁判例ハ法律上ノ無能力ノ理由ニ附加スルニ、証明セラレタル聾者又ハ全盲者ノ如  
 キ自然ノ無能力ノ數理由ヲ以テセリ

#### 陪審ノ組織

一九九〇號)陪審ヲ組織スル爲メニ必要ナル陪審員ノ數ハ十二ニ定メラレ、是レヨリ多キコ  
 トヲ得ス又是レヨリ少ナキコトヲ得ス、(治罪法第二百九十四條)是レヨリ以下相繼キテ舉示スル  
 所ノ陪審組織ノ諸手段ハ皆此十二ノ陪審ノ結果ニ達スル爲メニ過キス、即チ各事件毎ニ其  
 事件中ニ包含シタル一人又ハ數人ノ被告ニ付キ陪審員十二人ヲ撰擇スルコト是レナリ、夫レ  
 陪審ナル者ハ既ニ被告人ノ在ル有リテ之レカ判決ヲ爲ス爲メニ定メタル一個ノ委員ナルカ  
 故ニ其緊要ナル擔保ハ此撰擇ヲ爲スノ方法中ニ存スルコトヲ看ルヘシ、此撰擇ハ一個ノ或ル  
 方法ヲ以テ之ヲ爲セハ則チ人ヲ斬ルノ器具トナルヲ得ヘク又他ノ一個ノ方法ヲ以テ之ヲ爲  
 セハ則チ一個ノ裁判トナリヌベシ、但其瑕瑾ヲ有スルハ疑ヒヲ容レスト雖モ充分ニ善良ナ  
 ル性質ヲ有シ邦國自カラヨリ出テタル裁判ナルコトヲ看ル、是故ニ人ノ喜ンテ茲ニ安堵スル



所ノモノナリ

三五〇

(一九九一號)千八百八八年ノ治罪法ノ方法ハ甚タ期望スヘキ担保ヲ具備セザリキ、即チ開期ノ十五日前語ヲ換ヘテ之ヲ言ヘハ充分ニ裁判スヘキ事件及ヒ被告人ノ決定シタル上ニテ府縣知事ハ法律上ノ條件ヲ具備スル者六十名ノ名簿ヲ編製シ重罪院裁判長ハ又自カラ之ヲ三十六名ニ減シ而シテ此三十六名ニ付キ抽籤ヲ以テ十二名ノ陪審員ヲ定メタリキ(舊第三百八十七條參觀)是ノ如キニ於テハ國事ニ關スル訴訟ニ關シテ被告人ノ爲メニ如何ナル安寧アリシヤ

(一九九二號)現時ノ方法ハ之ヲ舊時ノ方法ニ比スレハ太タ優等ニシテ千八百二十七年五月二日ノ法ニヨリテ設置セラレ、千八百四十八年八月七日ノ布令ト千八百五十三年六月四日ノ法トニヨリ數多ノ點ニ於テ改良セラレ、竟ニ千八百七十二年ノ法ニヨリテ現時ノ位置ニ變更セラル、ニ至リタリ

(一九九三號)此方法ノ一般ノ要旨ハ左ノ如シ

一年間ノ用務ノ爲メニスル第一名簿ハ各縣ニ於テ種々ノ元素ヨリ組織セラレタル委員會ノ注意シテ編製セル所ニ係リ終ニ控訴院ノ第一裁判長又ハ重罪院開設ノ首地ニアル裁判所ノ裁判長ニヨリテ編製セラル(一)是レ毎年ノ名簿ナリトス、抑々是レハ一年中ノ爲メニ編製

セラレ數多ノ氏名ヲ合蕃シ種々ノ官廳(二)ノ繼續シテ處辨シタルヨリ出タル結果ナリトス、是ヲ以テ此名簿ハ千八百八八年ノ治罪法ニアルカ如キ府縣ニ於テ成ル所ノ名簿ノ危險ヲ具ヘサルナリ

(一)此法官ハ千八百七十二年ノ法ノ第六條ニ因リ府縣知事ニ代リタリ

(二)三個ノ委員アリテ其一ハ他ノ一ノ處辨シタル所ヲ再閱スルモノトス即チ第一段ニハ郡ノ治安裁判官及ヒ邑長第二段ニハ區ノ裁判所ノ裁判長府縣會議員及ヒ治安裁判官(千八百七十二年ノ法第八條以下參觀)是レナリ

此第一ノ名簿ニ付キ公廷ニ於テ各開期ノ近ツキタル時ニ抽籤ノ法ニ因リ總テノ開期中用務ヲナスヘキ所ノ三十六名ノ第二ノ名簿ヲ組織ス、是レ即チ開期ノ名簿ナリトス

最終ニ此第二ノ名簿ニ付キ各事件ノ辨論ノ開始ノ爲メ定メラレタル日ニ於テ抽籤ノ法ニ因リ事件ヲ裁判スル所ノ陪審員十二名ノ名簿ヲ組織ス、而シテ此抽籤ハ理由ヲ與フルコトナクシテ忌避ノ權ノ之ニ隨フモノトス、此忌避ハ尙ホ抽籤ノ偶然ニ出ルコトヲ矯正スルヲ得ルモノニシテ、且ツ檢察官ト被告人トハ同シク此忌避ヲ行フコトヲ得、此名簿ハ我治罪法ニ於テ時ニ或ハ陪審員ノ表ト稱呼スルモノニテ、辭ヲ換ヘテ之ヲ言ヘハ裁判ノ陪審即チ是レナリ是故ニ繼續シタル三個ノ名簿アリトス即チ其一ハ一年中ノ用務ノ爲メニシ、其他ノ一ハ各

三五二



開期ノ用務ノ爲メニシ、其二ハ各事件ノ用務ノ爲メニスルモノトス、此最終ノ名簿ハ繼續シテ行フ所ノ二個ノ抽籤ニ因テ成リ且ツ之ニ忌避ノ權利ヲ附加ス

(二九九四號)右三個ノ重モナル手續ノ細目ハ千八百七十二年ノ法ノ諸條ト治罪法ノ諸條トノ中ニ付キ涉獵相照シテ之ヲ講習セサルヘカラス

第一ノ手續、即チ毎年ノ名簿ノ組織ハ千八百七十二年ノ法第二章(第六條ヨリ第十七條ニ至ル)ニヨリ規定セラレタル純然タル行政上ノ手續ニシテ、其結局ハ之ヲ編製シタル議長ヨリ各區ニ於テ控訴院ノ書記局又ハ府縣ニ於テ重罪院ノ開設ヲ任セラレタル裁判所ノ書記局ニ此名簿ヲ送付スルニアリ、而シテ此送付ハ毎年十二月一日前ニ之ヲナサ、ルヘカラサルモノトス(第十四條)

(二九九五號)第二ノ手續即チ開期ニ付キテノ名簿ノ組織ヨリシテ裁判上ノ手續始マル、此名簿ハ千八百七十二年ノ法第三章中ノ重モニ第十八條ト治罪法ノ諸條トニ因テ規定セラレ、法律ハ一旦開期ノ名簿ノ成ルヤ、之ニ記載セラレタル所ノ各人ニ對シ此公務ノ爲メニ指定シタル場所及ヒ日子ニ出頭スヘキコトヲ命令シ且ツ之レト共ニナス所ノ召喚ノ通知ヲ確實ニスル爲メニ其注意ヲナシタリ、此通知ハ少ナクモ名簿ヲ用ヰル日ヨリ八日前ニ之ヲナサ、ルヘカラス(治罪法第二百八十九條)

法律ハ又各被告人ニ開期ノ陪審員ノ全名簿ヲ通知スルコトヲ規定シタリ、是レ陪審員ノ中ニ付キ若シ被告人カ抽籤ニ因テ裁判官トナル者ニ對シ請求スヘキコトアルヤ又ハ忌避スヘキモノアルヤヲ判斷シ得シカ爲メナリ、此通知ハ各被告人ニ關係ノ事件ニ付キ陪審員ノ抽籤ノ爲メ即チ治罪法カ表ノ組織ト呼フ所ノモノ、爲メニ定メタル日ノ前日ニ之ヲナサ、ルヘカラス、而シテ法律ハ二十四時前ト云ハスシテ單ニ前日ト云ヒタリ、故ニ送達ノ有効ニ爲シ得ル時間ニアル以上ハ前日ノ如何ナル時ニ於テスルヲ問ハサルナリ、法律ハ此時間ヲ以テ被告人ヲシテ陪審員ニ對シ自カラ施行スルヲ得ル權利ノアルコトヲ明知スルノ位置ニアラシムルニ充分ナリト判斷シタリ、法律カ此ノ如ク此時間ヲ制限シタルハ被告人ヲシテ陪審員ニ對シテ或ル事ヲ求メシメ又ハ或ル勢力ヲ行ハシムルノ位置ヲ被告人ニ與ヘサラシカ爲メナリ、故ニ治罪法(第二百九十五條)ハ若シ右時刻ヨリ早ク又ハ遅ク通知ヲ爲シタルハ無効タルヘシト附加シタリ、此無効ハ若シ右時刻ヨリ早ク通知ヲ爲シタルハ千八百七十二年ノ法律以來既ニ其要用ヲ有セサルコトヲ注目セサルヘカラス、何トナレハ開期ノ名簿ハ公庭ニ於テ抽籤シ新聞紙ニ因テ公示スルカ故ニ初メヨリ被告人及ヒ其親族若クハ其朋友ノ之ヲ知レハナリ、但シ右時刻ヨリ遅ク通知ヲ爲シタル場合ニ付キテハ其無効ハ全ク力アリトス、何トナレハ此無効ハ被告人ノ緊要ナル一權利ニ付キ之レカ制裁タルモノナレハナリ、或ル陪



審員一名ノ氏名ノ脱漏又ハ混淆若クハ迷謬ヲ生スヘキ指名ノ錯誤ハ此無効ノ充分ナル理由ナルヘシ、然レモ縦令指名ニシテ或ル點ニ於テ瑕瑾アルモ人ニ付キ其迷謬若クハ混淆ヲ生スルヲ得サル如クナルモ前ノ如ク無効ノ理由ト論スヘカラスト常ニ判決セラレタリ(一)

(二)治罪法(第三百八十八條)(此條ハ既ニ第九百八十八號挿註ニ舉ケタル千八百七十二

年ノ法第十八條ヲ以テ之ニ代ヘラレタリ)

(第三百八十九條) 姓名表ヲ組成スル各人ニ其姓名表ノ全部ヲ送ルコトナシ然レモ州長ハ其各人ノ姓名ヲ右姓名表ニ記載シアル旨ヲ證明スル所ノ其拔書ヲ右ノ各人ニ送付ス可キモノトス○其送付姓名表ヲ用フ可キ日ヨリ少クモ八日以前ニ之ヲ右ノ各人ニ爲ス可シ其姓名表ヲ用フ可キ日ハ右ノ送付書中ニ之ヲ記載ス可シ而シテ又其送付書ニハ指示セラレタル日ニ出席ス可キ旨ノ催促ト若シ其日ニ出席セサル時ハ此法典ニ載スル刑ニ處セラ

ル可キ旨トヲ記ス可キモノトス

若シ本人ニ送付セサル於テハ其住所并ニ其地ノ邑長又ハ副職ノ住所ニ送付ヲ爲ス可シ但シ邑長又ハ副職ハ本人ニ之レカ通知ヲ爲ス可キモノトス)

(第三百九十條) 若シ抽籤ニ依リ指定セラレタル四十名ノ人員中ニ於テ第三百八十七條ニ據リ終了シタル姓名表ノ組成以後ニ死去シ又ハ陪審員ノ職務ヲ執行スルニ必要ナリト

定メタル能力ヲ法律上ニテ剝奪セラレ又ハ其職務ト兼テ有スヘカラサル役務ヲ受諾シタル者一名又ハ數名アル時ハ裁判所ニ於テ檢事長ノ意見ヲ聽キタル後其會席ニ於テ之ニ代ハル可キ者ヲ定ム可シ

其代ハル可キ者ヲ定ムルニ付キテハ第三百八十八條ニ定メタル法式ニ從フ可キモノトス(千八百七十二年十一月二十一日ノ法律第十八條ヲ看ル可シ)

(第三百九十一條) 陪審員ノ姓名表ハ之ヲ作りタル用務ノ後ハ無効ノモノタル可シ

臨時重罪院ヲ開ク場合ノ外ハ第三百八十九條ニ定メタル要求ニ應シタル各陪審員ハ同年内ニ一回ヨリ更ニ多ク第三百八十七條ニ據リ作りタル姓名表ニ記載セラル、コトナカル可シ

臨時重罪院ヲ開ク場合ニ於テハ右ノ各陪審員ハ同年内ニ二回ヨリ更ニ多ク右ノ姓名表ニ記載セラル、コトナカル可シ(此項ハ前項ト共ニ千八百七十二年ノ法第五條ニヨリテ斯ノ如ク變更セラレタリ)

重罪院ノ會議ヲ開始スル前ニ其院ニ於テ一時ノ原由ナリト裁判シタル宥恕ヲ許容セシメタル各員ハ右ノ要求ニ應シタルモノト看做スヘカラス

右各員ノ姓名及ヒ一回若クハ二回罰金ヲ言渡サレタルハ陪審員ノ姓名ハ會議ノ後直チ



ニ控訴院ノ第一裁判長ニ之ヲ通知シ其第一裁判長ハ第三百八十七條ニ據リ作りタル姓名表ニ右ノ姓名ヲ移シ記ス可キモノトス而シテ若シ同年ノ爲メニ爲ス可キ抽籤ノ存セサル時ハ右ノ姓名ヲ翌年ノ姓名表ニ加フ可シ

(第二百九十五條) 陪審員ノ姓名表ハ陪審員十二名ノ表ヲ組成スル爲メニ定メタル日ノ前日ニ之ヲ各個ノ重罪被告人ニ送付ス可シ若シ更ニ早ク(千八百七十二年以来此早クノ語ニ付キテハ既ニ其要用ナシ)又ハ更ニ遅ク之ヲ送付シタル時ハ其送付並ニ其後ニ爲シタル諸件ヲ無効ナリトス

(一九九六號) 第三ノ手續即チ各事件ニ付キテノ名簿ノ組織、辭ヲ換ヘテ之ヲ言ヘハ裁判ノ陪審ノ組織ハ、各事件ノ爲メ定メタル日ニ會議局ニテ檢察官ト辨護人及ヒ辨護人ニ補助セラル、被告人トノ面前ニ於テ書記陪席ノ上重罪院裁判長之ヲ爲ス、(治罪法第三百九十九條及ヒ千八百七十二年ノ法第十九條參觀)法律ハ茲ニ尙ホ陪席裁判官ノ陪席ヲ要求セハ一層適當ナリシナラン、但シ此陪席ハ實際上常ニ行フ所ナリ、何トナレハ此陪席官ノ参加スルハ右ニ付キ起リタル手續上ノ爭論ニ對シテ裁判スル爲メニ必要ナレハナリ、總テノ場合ニ於テ此陪席官ハ遠處ニアラスシテ同シ裁判所内ニアルカ故ニ、其必要ナル場合ニ於テハ常ニ之ヲ集合スルヲ得

法律ハ左ノ事件ヲ規定シタリ、即チ 欠席シタル陪審員ニ對シテ宣告スヘキ處罰、及ヒ此欠席ニ付キ認可セラレサルヘカラス又ハ認可セラレ得ヘキ宥恕 忌避 徵集セラレタル或ル陪審員ガ特別ナル事件ニ於テ陪審トナリ得ルニ付キ妨害トナル所ノ特別ナル不合格 是レナリ(一)

(一)治罪法(第三百九十二條) 何人ニ限ラス司法警察官証人通辨人鑑定人又ハ關係人タル者ハ其同一ノ事件ニ於テ陪審員タルヲ得ス若シ之ニ違フ時ハ無効ナリトス)

第二節陪審ヲ組成シ及ヒ之ヲ徵集スルノ方法(第三百九十三條)(此條ハ既ニ第千九百八十八號插註ニ舉ケタル千八百七十二年ノ法第十九條ヲ以テ代ヘテレタリ)

(第二百九十四條) 陪審ヲ組成スルニハ陪審員十二名ノ員數ヲ必要トス

若シ重罪ノ訴カ長キ辨論ヲ要ス可キ性質ノモノト思ハル、時ハ重罪院ニ於テ陪審員ノ姓名表抽籤ノ前ニ十二名ノ陪審員定數ノ外更ニ其辨論ニ立會フ可キ陪審院一名又ハ二名ヲ抽籤ス可キ旨ヲ命令スルヲ得可シ

若シ陪審院員十二名中ノ一名又ハ二名カ陪審ノ確定ノ決斷ニ至ル迄辨論ヲ繼續スルニ差支アル場合ニ於テハ陪審補員ヲ以テ之ニ代ハラシム可シ

其引易ハ陪審補員ノ抽籤ニ依リ招喚セラレタル順序ニ隨ヒテ之ヲ爲ス可シ



(第三百九十六條 凡ソ己レニ送付セラレタル呼出狀ニ應シテ其詰所ニ赴カサル陪審員ハ重罪院ヨリ罰金ヲ言渡サル可シ但シ其罰金ハ左ノ如クナリトス

第一回ニ付キテハ五百フラン

第二回ニ付キテハ一千フラン

第三回ニ付キテハ一千五百フラン

其第三回ノ場合ニ於テハ其陪審員ハ右ノ外將來陪審員タルノ職務ヲ執行スルヲ能ハサル旨ヲ宣告セラル可シ○其裁判書ハ右陪審員ノ費用ヲ以テ之ヲ印刷シ及ヒ貼付ス可シ)

(第三百九十七條 指示セラレタル日ニ於テ出席スルヲ能ハサリシ旨ヲ証明シタル陪審員ハ右ノ例外ナリトス

重罪院ハ右辨解ノ理由ノ有效ナルヤ否ニ付キ宣告ヲ爲ス可シ)

(第三百九十八條 第三百九十六條ニ載セタル刑ハ一旦其詰所ニ赴キタリト雖モ有效ナル辨解ノ理由ナクシテ其職務ノ終ラサル前ニ引退キタル各陪審員ニ適用ス可シ但シ其辨解ノ理由ノ有效ナルヤ否ハ亦重罪院ニ於テ之ヲ裁判ス可キモノトス

(第三百九十九條 各箇ノ事件ニ付キ其指示セラレタル日ニ至リ審問席ヲ開始スル前ニ陪審員並ニ重罪被告人及ヒ檢事長ノ面前ニ於テ辨解ノ理由ナキ各陪審員及ヒ免セラレサ

ル各陪審員ノ姓名ヲ呼上ク可シ

其呼上ニ答フル各陪審員ノ姓名票ヲ壺中ニ入ル可シ

各陪審員姓名票ノ壺中ヨリ出ツルニ隨ヒ最初ニ重罪被告人又ハ其代辨人ヨリ其相當ト思考スル所ノ陪審員ヲ忌避シ然ル後檢事長ヨリ之ヲ忌避ス可シ但シ以下ニ明示シタル制限ニ從フ可キモノトス

重罪被告人又ハ其代辨人ニ於テモ又檢事長ニ於テモ其忌避ノ理由ヲ説明スルヲ得ス忌避セラレサル陪審員十二名ノ姓名票ノ壺中ヨリ出テタル時ニ至リ決斷ヲ爲ス陪審員組成スルモノトス)

(第四百條 重罪被告人及ヒ檢事長ヨリ爲シ得ル所ノ忌避ハ陪審員十二名ノ姓名票ノミノ殘ル時ニ至リテ之ヲ止ム可シ)

(第四百一條 重罪被告人及ヒ檢事長ハ互ニ同數ノ忌避ヲ行フヲ得可シ然レモ若シ陪審員ノ數ノ奇數ナル時ハ重罪被告人ニ於テ檢事長ヨリモ更ニ一名多數ノ忌避ヲ行フヲ得可キモノトス)

(第四百二條 若シ重罪被告人ノ數名アル時ハ其忌避ヲ行フ爲メ相協議スルヲ得可ク又其忌避ヲ各自別々ニ行フヲ得可シ



右ノ中何レノ場合ニ於テモ其數名ノ重罪被告人ハ前數條ニ依リ重罪被告人一名ノ爲メニ定メタル忌避ノ數ニ過クルコトヲ得サルモノトス

(第四百三條) 若シ重罪被告人ノ忌避ヲ爲ス爲メ相協議セサル時ハ抽籤ヲ以テ各自其忌避ヲ爲ス可キ順序ヲ定ム可シ○此場合ニ於テ右ノ順序ニ從ヒ重罪被告人中ノ一名ヨリ忌避セラレタル陪審員ハ其重罪被告人全員ノ爲メニ忌避セラレタルモノトシテ其忌避ノ定數ノ盡クルニ至リテ之ヲ止ム可シ

(第四百四條) 重罪被告人ハ忌避ノ一部分ヲ行フ爲メ相協議スルコトヲ得可シ但シ其餘ノ一部分ニ付キテハ抽籤ニ依リ定マリタル順序ニ從ヒ之ヲ行フ可キモノトス

(第四百五條) 重罪被告人ノ訊問ハ陪審員十二名ノ表ヲ組成シタル後直チニ之ヲ始ム可シ

(第四百六條) 若シ或ル事故ニ依リ一箇又ハ數箇ノ重罪公訴狀中ニ包含シタル犯罪ニ付キ又ハ其犯罪中ノ或者ニ付キ其重罪被告人ノ訊問ヲ次キノ會議ニ移送シタル時ハ更ニ他ノ姓名表ヲ作ル可ク而シテ又前ニ定メタル規則ニ從ヒ更ニ忌避ヲ爲シ及ヒ更ニ新ニナル陪審員十二名ノ表ヲ組成ス可シ若シ之ニ違フ時ハ無効ナリトス

(一九九七號) 宣告スヘキ處罰ハ第一回ニ於テハ五百「フラン」ノ罰金ナリトス、此場合ハ千八

百七十二年ノ法第二十條ニ依リ二百「フラン」ニ減スルコトヲ得ヘシ、第二回ニ於テハ千「フラン」第三回ニ於テハ千五百「フラン」ノ罰金ナリトス、此第三回ニ於テハ欠席シタル陪審員ハ尙ホ將來陪審ノ職務ヲ施行スルニ付キ無能力ナリト宣告セラルヘク、其裁判ハ其陪審員ノ費用ヲ以テ印刷セラレ貼付セラルヘシ(治罪法第三百九十六條) 陪審員ハ通知ヲ受ケタル呼出ニ付キ詰所ニ出頭セサルハ、又其詰所ニ出頭スト雖モ未タ其職務ノ終ラサル前ニ退去シ而シテ重罪院ニ於テ有效ナリト判決セラレタル宥恕ナキハ、共ニ之ヲ欠席者ナリトス(治罪法第三百九十六條及ヒ第三百九十八條) 其宥恕ハ指定セラレタル日ニ出頭スル能ハサルコト又ハ陪審員ノ職務ヲ充タス能ハサルコトヨリ出タル事實上ノ宥恕ナルコトヲ得ヘク、又僕婢並ニ佛蘭西語ヲ讀ミ及ヒ書スルコトヲ知ラサル者ニ於テ主張シ得ル所ノ宥恕、又ハ其當年若クハ前年間陪審ノ職務ヲ行ヒタル者ノ主張シ得ル宥恕ノ如キ法律上ノ宥恕ナルコトヲ得ヘシ(國會議員ノ身分ハ千八百五十三年ニ於テハ一箇ノ宥恕ニ過キサリシカ、現時ニ於テハ千八百七十二年ノ法第三條ノ正文ニ因リ不合格ノ一理由トナリタリ) 年齢七十歳以上ノ者及ヒ日々ノ勞力ヲ以テ生計ヲ營ムノ要用アル者ニ與ヘラレタル免除ハ尙ホ宥恕ノ方法トナシテ之ヲ提出スルコトヲ得ヘシ、以上總テノ場合ニ於テ宥恕ノ有効ナルコトヲ宣告スルモノハ重罪院ナリトス(治罪法第三百九十一條第三百九十七條第三百九十八條及ヒ千八百七十二年ノ



法第四條第五條參觀)

(一九九八號) 忌避ノ方法ハ左ノ如ク規定セラレタリ、即チ姓名カ籤函ニ投入セラレタル所ノ現在ノ陪審員ノ總數ノ上ニ付キ、陪審ノ表ヲ組成スルニ避クヘカラサル數タル十二名ノアルハ其他ハ全ク被告人又ハ檢察官ニ於テ之ヲ忌避スルコトヲ得ヘシ、是故ニ現在ノ陪審員ノ數ハ三十六名ナリトセハ二十四名ノ忌避ヲ爲スコトヲ得ヘク三十五名ナリトセハ二十三名ノ忌避ヲ爲スコトヲ得ヘシ、以下皆此數ニ准ス、而シテ少ナキ數カ三十名ナル時ハ許スヘキ忌避ノ數ハ十八ヨリ下ルコトヲ得ス、此忌避スルコトヲ得ルノ數ハ被告人ト檢察官トノ間ニ同様ニ相分タル、モノトス、而シテ若シ奇數トナルハ被告人ハ檢察官ヨリ一個多ク忌避ヲ爲スコトヲ得、右ノ規則ニ依リ陪審員ノ姓名カ籤函ヨリ出ルニ隨ヒ先ツ被告人若クハ辨護人又其忌避セサルハ檢察官左ノ如ク云フコトヲ得ヘシ、曰ク(予ハ之ヲ忌避ス)又ハ單ニ(忌避ス)ト而シテ忌避ヲ爲スコト付キテハ如何ナル理由ヲモ説明スルコトヲ得ス、被告人又ハ檢察官ニ於テ互ニ其爲シ得ル所ノ忌避ノ數ヲ行ヒタル上ハ最早之ヲ爲スコトヲ得ス、陪審員ノ十二ノ姓名カ忌避セラル、コナク籤函ヨリ出タルヤ陪審ノ表ハ直チニ組成セラル、種々ノ忌避ノ結果ヨリシテ最早十二名ノ陪審員ヨリ外殘ラサルヤ忌避ハ直チニ停止シ陪審ノ表ハ此十二名ノ陪審員ヲ以テ組成セラル(治罪法第三百九十九條第四百條及ヒ第四百一條參

觀

法律ハ被告人數名アル場合ニ付キ其各々爲シ得ル所ノ忌避ハ如何ニ其間ニ分配セラル、ヤ、即チ普通ニナサ、ルヤ又ハ各個ニナサ、ルヤヲ定メタリ(治罪法第四百二條第四百三條及ヒ第四百四條參觀)

(一九九九號) 特別ノ不合格ニ關シテハ法律ハ何人ニ限ラス司法警察官、証人、通辨人、鑑定人又ハ關係人タル者ハ其同一ノ事件ニ於テ陪審員タルコトヲ得ス、若シ之ニ違フ時ハ無効ナリトスト公言シタリ(治罪法第三百九十二條)

(二〇〇〇號) 立法者ハ二個ノ場合ヲ豫防セサルヲ得サリキ、其場合ハ即チ左ノ如シ

第一ハ各事件ニ付キ陪審ノ組成ノ爲メニ定メタル日ニ於テ、開明ノ用務ノ爲メニ徵集シタル人民中ニ欠席者アリテ抽籤ヲ以テ被告人及ヒ社會ニ期望スヘキ保証ヲ與フルニ充分ナル數ノ存セサルカ如キ點ニ至リタル場合はレナリ其必要ナル數ハ法律ニ於テ少ナクモ三十二定メラレタリ、各訴訟ノ十二名ノ陪審員ノ抽籤ハ籤函ニ投入セラレタル姓名三十ヨリ少ナキ時ハ之ヲナスコトヲ得ス、故ニ若シ徵集セラレタル三十六名ノ陪審員中ニ欠席ヲ爲ス者六名ヨリ多キ時ハ其殘餘ノ數ハ則チ不充分ナリトス、是レ即チ立法者ニ於テ豫見セサルヘカラサリシ第一ノ場合ナリ



第二ニハ既二十二名ノ陪審員ヲ指定シ公廷ヲ開キタル上其中ノ一名若クハ數名カ死去疾病又ハ其他ノ事故ニヨリ訴訟ノ終局前ニ欠員ヲ生シタル場合はレナリ、

(二〇〇一號)立法者ハ第一ノ場合ニ付キテハ三十ノ數ヲ満足セシメンカ爲メニ重罪院ノ開設セラル、所ノ市街ニ住居シ隨ヒテ最モ容易ニ召喚シ得ル所ノ陪審トナルヘキ資格ヲ有スル人民ヲ以テ之ヲ補足シ以テ之ヲ豫防シタリ、

故ニ一年間各開期ニ付キ陪審ノ用務ニ對シ抽籤ノ偶然ノ運命ニ服スル人民ノ毎年ノ名簿ニ附加スルニ同様ニ毎年ノ他ノ名簿ヲ以テ、即チ重罪院ノ開設セラル、市街ニ於テ徵取セラレ、補助陪審員ノ年々ノ特別ノ名簿ナリトス、而シテ是レ場合ニ隨ヒ必要ナルニ過キササルモノナルカ故ニ甚タ少數ノ姓名ヲ含蓄スル所ノ名簿ナリ(千八百七十二年ノ法第十五條及ヒ第十六條參觀)

次キニ各開期ニ於ル名簿ノ組成ニ於テ開期ノ用務ノ重モナル任ヲ有スル所ノ三十六名ノ陪審員ノ抽籤ニ關スルコトナク、常ニ附加即チ必要ノ場合ノ爲メニ特別ニ名簿中ニ補助陪審員四名ノ抽籤ヲ爲ス(千八百七十二年ノ法第十八條)此補助陪審員ヲハ各事件ニ付陪審ヲ組成スル爲メニ抽籤ヲ行フキ必要ナル場合ニ於テ三十ノ數ヲ完全センカ爲メニ出席スルノ義務アリトス、此陪審員ハ開期ノ名簿ニ記載セラレタル順序ニ隨ヒ此補足ヲナス爲メニ召喚セラ

ルヘシ若シ欠席者ノ數多クシテ補助陪審員ニ依ルモ尙ホ三十ノ數ノ完全スルヲ得サルハ其年ノ特別ノ名簿又次キニ一般ノ毎年ノ名簿ニ記載シタル市街ノ陪審中ニ付キ抽籤ヲ行フモノトス(千八百七十二年ノ法第十九條)

(二〇〇二號)第二ノ場合ニ付キテハ若シ訴訟カ永キ辨論ヲ要スヘキ性質ヲ有スト見ユルハ重罪院ニ與フルニ、其事件ヲ判決スルカ如ク訴訟ノ總テノ辨論及ヒ總テノ手續ニ出席スル所ノ一名又ハ二名ノ陪審員ノ増加ヲ命スルノ能權ヲ以テ之ヲ豫防シタリ(治罪法第三百九十四條)

(二〇〇三號)此偶然ノ負擔ノミヲ科スベキ各種ノ陪審員ニ與フヘキ稱呼ニ付キテハ別ニ定マリタルモノ毫モアラサルナリ、事實上抽籤ニ付キ三十名ノ陪審員ノ數ニ達セサルヲ以テ之ヲ完全ニスル爲メニ召喚セラル、モノニシテ隨ヒテ其姓名ハ籤函ニ投入セラル、所ノ陪審ハ普通之ヲ追加陪審員ト稱呼セラル、其他毎年ノ名簿若クハ開期ノ名簿ニ記載セラレ又ハ全ク他ノ一個ノ場合ニ係ルモノ即チ永キ辨論ヲ要スルカ如ク見ユル場合ノ爲メニスル陪審ハ法律ノ正文ニ於テハ各々其區別ナリ、或ハ補充陪審員又ハ不足ヲ補フ陪審員ト云フ名稱ヲ以テ指示セラル

(二〇〇三號第二)陪審ナルモノハ各事件ニ付キ組成シタル一個ノ委員ニ過キササルカ故ニ



其權限ハ其事件カ他ノ開期ニ送ラル、キト雖モ尙ホ現時ノ訴訟ト共ニ終ルモノトス(治罪法第四百六條)

他ノ一方ニ於テハ陪審ノ委任即チ被告人ノ訊問ハ原則上、陪審員ノ表ノ組成ノ後ニ始マラサルヘカラス(治罪法第四百五條)但シ我輩カ茲ニ原則上ト云フ所以ハ、大審院ノ裁判例ニ依レハ此正文ハ無効ノ制裁ヲ附セルモノトシテ解釋セラル、コヲ得サレハナリ、是レ開廷ノ日ノ初メニ於テ一時ニ繼續シテ抽籤ヲ行ヒ以テ其全日ノ爲メニ定メタル種々ノ事件ニ付キ陪審ヲ組成スルコヲ取扱フニ出タル所ノ簡略ナル原由ヨリ生シタル慣例ヲ認可セント欲シタルモノナリ、是ヲ以テ其訴訟ノ長短ト手續ノ特ニ他路ニ入ルヘキ性質トニ隨ヒ、破毀スヘキモノナルヤ否ヤヲ考定スルハ一ニ大審院ニアリトス、

第五節 豫審裁判權

(第二千四號) 裁判ノ單一ナルコトハ常ニ茲ニ於テ顯ハル、豫審裁判權ハ區裁判所及ヒ控訴院ニ存在ス、即チ豫審裁判官及ヒ、或ハ重罪取調局ニ於テシ或ハ合併ノ二局ニ於テシ或ハ諸局集合ニ於テスル控訴院ニ存在スルナリ(治罪法ニヨリテ設定セラレタル會議局ハ千八百五十六年七月十七日及ヒ三十一日ノ法ニヨリテ廢止セラレタル豫審裁判權ノ一機關ナリトス)但シ豫審裁判權ノ職務ハ我輩ノ既ニ知ル所ナリトス(第千九百四十一號參觀)

(第二千五號) 豫審裁判官ハ二個ノ名義ヲ以テ裁判構成法中ニ顯ハル、即チ第一ニハ搜索差押、証憑ノ豫備ノ集合ニ付キ運動ノ作業ヲ任セラレタル官吏ノ名義ヲ以テ顯ハレ、第二ニハ豫審ノ或ル枝訴ニ付キテモ又ハ千八百五十六年ノ法ニ從ヒ此豫審ニ與フヘキ結果即チ將來ノ指揮ニ付キテモ判決ヲ與フルノ權ヲ任セラレタル裁判官ノ名義ヲ以テ顯ハル、モノトス、而シテ我輩カ茲ニ豫審裁判官ヲ豫審裁判權ノ中ニ列記スルハ此第二ノ名義ニ從ヒテナリ

(第二千六號) 其現時ノ組織及ヒ其有スル所ノ名ハ千八百八十年ノ治罪法及ヒ千八百十年ノ法ヨリ來ル

區裁判所ノ一裁判官ハ國家ノ首長ヨリ三年間豫審判事ノ職務ヲ命セラル、但シ之レカ爲メニ毎年ノ更代ニヨリテ附屬スル所ノ裁判所ノ局員タルコトヲ妨ケス、而シテ此豫審判事ハ可及的民事局ニ屬ス、蓋シ前ニ豫審判事ノ資格ヲ以テ任シタル所ノ事件ニ付キ刑事局ノ一員ノ資格ヲ以テ之ヲ裁判スルニ至ラサランカ爲メナリ、而シテ法律ハ此注意ニ付キ不合格ナル一箇ノ命令ノ規則トナシタルニアラス然レモ是レ事實上相當ノ規則ナリトス(第千九百四十七號參觀)三年ノ期限滿ルキハ更ニ新ナル任命ニヨリテ仍ホ其職務ヲ繼續スルコトヲ得千八百五十二年ノ規則ハ千八百五十八年ノ法ニヨリテ治罪法ノ新第五十六條中ニ移轉セラ



ル而シテ此布令ニ據レハ判事試補ハ此職務ニ任セラル、イヲ得、

各區裁判所中ニ其人員事件ノ多少ニ隨ヒ一人又ハ多數ノ豫審判事アリ、其數タルパリニ於テハ二十ト爲シタリ(千八百四十一年四月二十三日ノ法參觀)而シテ事件ノ數カ殆ント皆何レノ裁判所ニ於テモ大ニ増加シタルヲ以テ千八百五十六年ノ法ハ豫審判事ニ附加スルニ臨時ニ且ツ豫審判事ト共ニ同一ノ職務ヲ任セラル、所ノ一判事試補ヲ以テスルヲ許シタリ(一)

(一)治罪法ノ數多ノ規則ヲ改正スルヲ以テ目的ト爲シタル千八百五十六年七月十七日及三十一日ノ法(單條 治罪法第五十五條第五十六條第六十一條第百四條第百四條第百二十七條第百二十八條第百二十九條第百三十條第百三十二條第百三十三條第百三十四條第百三十五條第百三十八條第百三十九條第百二十九條第百二十九條第百三十條第百三十一條第百三十二條第百三十三條第百三十九條ハ廢止セラル此諸條ハ左ノ諸條ニヨリテ換ヘラル)

(第五十五條 各郡ニ於テ皇帝(共和國大統領)ノ告令ヲ以テ三年間選任シタル豫審裁判官一名ヲ置ク可シ而シテ其豫審裁判官ハ更ニ長ク其職ヲ繼續セシムルヲ得可クシテ且ツ其就任ノ順序ニ從ヒ民事訴訟ノ裁判ニ列席スルノ權利ヲ保存ス可シ

事務ノ需要ノ爲メニ已ムコトヲ得サル所ノ各郡ニ於テハ豫審裁判官數名ヲ設置スルヲ得可シ)

(第五十六條 豫審裁判官ハ本官ノ裁判官中ヨリ之ヲ撰擇ス可ク又裁判官ノ補役中ヨリモ之ヲ撰擇スルヲ得可シ(此最終ノ規則ハ千八百五十二年及ヒ千八百二十五年ノ二個ノ命令ニヨリテ既ニセーヌノ裁判所ニ立テラレ次キニ千八百五十二年三月一日ノ布令ニヨリテ一般ニ擴充シ終ニ此法ノ正文ニ移リタリ)

事務ノ需要ノ爲メニ已ムコトヲ得サル所ノ裁判所ニ於テハ皇帝(共和國大統領)ノ告令ヲ以テ裁判官ノ補役ニ本官ノ豫審裁判官ト相並的ニ一時豫審ヲ委任スルヲ得可シ)

(此法律ニヨリテ改正セラレタル他ノ諸條ハ我輩之ヲ本書ノ順序ニ於テ置クヘキ處ニ舉クヘシ)

治罪法(第五十八條 豫審裁判官ノ唯一名ノミタル都府ニ於テ若シ其裁判官ノ不在ナル時又ハ病ニ罹リタル時又ハ其他ノ方法ニテ差支アル時ハ始審裁判所ヨリ之ニ代ハラシムル爲メ其裁判所ノ裁判官一名ヲ指定ス可シ)

千八百十年四月二十日ノ法(第四十二條 陪審官ノ指揮役及ヒ安寧ノ法官ハ廢止ス其職務ハ治罪法ニ從ヒ豫審裁判官及ヒ檢事又ハ檢事補ニ於テ之ヲ行フヘシ)



千八百十年八月十八日ノ布令第二章豫審裁判官(第十一條 一個又ハ二個ノ局ヲ以テ組織スル各始審裁判所ニハ豫審裁判官一名アルヘシ 三局ニ分別スル裁判所ニハ二名アルヘシ)ハリニ於テハ六名アルヘシ(此數ハ布令法律又ハ命令ニヨリテ漸次ニ増加シ當今ニ於テハ二十ニ至リタリ)

(第二十六條 輕罪事件ヲ擔任スル局ハ休暇ヲ有セサルヘシ豫審裁判官ニ付キテモ亦同シ 若シ豫審裁判官休暇ヲ有スル局ニ屬スルモハ其報告ハ休暇中事務ヲ執ル局ニ爲ス可シ(這ハ新法ニヨリテ廢止セラレタリ))

(第二十七號) 千八百五十六年ノ法以來消滅ニ歸シタル所ノ會議局ナル者ハ故サラニ組成シタル特別ノ局ニハアラサリシナリ、即チ此局ハ豫審裁判官ノ屬スル所ニシテ、之レカ一員トナリ且ツ投票ニ關係スル所ノ豫審裁判官ト共ニ少ナクモ三名ノ裁判官ニテ豫審裁判官ノ報告ヲ聽キ且ツ判決ヲナス爲メニ會議室ニ集合スル所ノ局ニ外ナラサリシナリ、千八百五十六年ノ新法ニ從ヘハ豫審裁判官ハ最早報告ヲナスコトナク獨リ自カラ判決ヲナス豫審裁判官ト會議局トニ於テ其一ハ他ノ一ノ下ニ置カル、二個ノ裁判權アリタルニアラス、即チ同一ノ階級ニ於テ並行シテ置カレ二者皆同一ノ區裁判所ノ部分ヲ成シ控訴ニ付キテハ共ニ重罪取調局ニ隸屬スル所ノ二個ノ裁判權ナリシナリ、千八百五十六年ノ法ハ會議

局ノ機關ヲ廢シタリ、而シテ其目的ハ構成上ニハ最モ大ニ簡單ヲ與ヘ訴訟手續上ニハ大ニ迅速ヲ與ヘ以テ大ニ未決拘留ノ期限ヲ減縮スルニ至ルニアリタリ(一)

(二)會議局ノ制度ハ被告人ニ對シテハ此局カ豫審裁判官ト相關セスシテ獨立ナル一個ノ裁判權ヲ構成スルニアラサル以上、一ノ担保トナルコトヲ得ヌ埃太利新法(第九十二條)ニ於テ豫審裁判官ハ其事件ヲ會議局ニ提出シ辯論ニ關係スト雖モ然レモ判定ニ關係セサルハ之レカ爲メナリ、但シ治罪法舊第百三十三條ハ其正文ニ從ヘハ裁判官一人ノ投票即チ慣習上豫審裁判官ノ投票ハ重罪控訴局ニ送付ヲ來スモノトス此方法ハ被告人ノ爲メニ如何ナル利益モアルコトナク唯遲滯ヲ來セリ、是レ千八百五十六年ニ於テ此條ノ廢止ノ理由トナリタルモノナリ

(第二十八號) 重罪取調局ハ豫審裁判權ニ於テ第一級即チ無上ノ級ニ在リテ控訴院ノ特別ナル一部分ニシテ之ヲ以テ公訴陪審ニ換ヘタル所ノモノナリ(第千九百六十七號參觀)此局ハ少ナクモ裁判官五名ニアラサレハ裁判スルコトヲ得ス、此局ハ隸屬ヨリシテハ其管轄内ノ豫審裁判官ノ上ニ置カル、即チ第一ニハ控訴アルモハ豫審裁判官ノ判決ニ對スル控訴ノ裁判權ニシテ、第二ニハ豫審裁判官ハ輕罪若クハ違警罪ニ過キサル事件ハ其豫審ヲ終結スルニ付キ自カラ之ヲ判決スルノ權ヲ有スト雖モ、事件カ重罪ノ外形ヲ有スルモハ之レカ宣告ヲ



ナス所ノ重罪取調局ニ送付ヲ命セサル可ラサルカ故ナリ(一)

(一)治罪法(第二百十八條)千八百五十六年ノ法ニ從ヒ之レカ爲メ特ニ組成シタル控訴院ノ一課ハ其必要ナル度毎ニ檢事長ノ報告ヲ聽キ且ツ其請求ニ付キ裁定スル爲メ檢事長ノ求メニ依リ其課長ノ招集ニ從ヒ集會ヲ爲ス可キモノトス

檢事長ノ別段ノ求メアラサルニ於テハ右ノ課ハ少クモ毎週一回集會ヲ爲ス可シ)

千八百十年七月六日ノ布令第二條及ヒ第二十九條(第九百七十號挿註參觀)

(第二十九號)千八百八年及ヒ千八百十年ノ構成法ノ精神ハ、控訴院ニ豫審裁判ノ全權ヲ無上ノ度ニ集合スルニアリタリ、此權限ハ普通ノ場合ニアリテハ該院ノ一局ニ過キサル重罪取調局即チ控訴院ニ於テ之ヲ施行ス、但シ此權ハ情狀ノ重大ナルニ當リテハ他ノ二個ノ方法ヲ以テ之ヲ施行スルコトヲ得、即チ公訴ニ附スルニ付キ輕罪控訴局ト重罪取調局ト相合シテ會議ヲ爲ス爲メニ此二局ノ集合ニヨリ(一)又ハ諸局ノ總集合ニヨリテ此權ヲ施行スルコト是レナリ

(二)千八百十年七月六日ノ布令(第三條) 我控訴院檢事長カ一事件ノ顯ハレ來リタル所ノ情狀ノ重大ナル理由又ハ被告人ノ多衆ナル理由ヨリシテ治罪法第二百十八條ニ從ヒ爲スヘキ所ノ報告カ多シ重罪取調局アル控訴院ニ於テハ二個ノ集合シタル重罪取調局ニ提出

シ又一個ノ重罪取調局アルニ過キサル控訴院ニ於テハ輕罪ノ控訴ヲ管轄スル所ノ局ニ集合シタル重罪取調局ニ提出スルヲ適當ナリト認ムルキハ右ノ諸局ハ我檢事長ノ爲ス所ノ招集ニ從ヒ第一裁判長ト共ニ之レカ協議ヲ爲シタル後集合スルノ義務アリトス此諸局ハ報告ヲ聽キ且ツ重罪院ニ送付スルコトニ付キ會議ヲ爲ス可シ但シ總テ治罪法第二百十九條ニ規定シタル期限内ニ之ヲ爲ス可シ)

(第二十號)豫審事件ニ於テ控訴院ノ此高等權ノ顯ハル、ハ、特ニ控訴院カ第一ノ裁判官ニ於テ着手シタル豫審ノ有無ニ拘ハラズ公訴ヲ命シ證據ヲ提出セシメ搜查ヲ爲シ又ハ爲サシメ次キニ豫審裁判官ノ爲スヘキ所ノモノニ付キ判決スル時ニアリトス、此場合ニ於テハ控訴院ハ人ノ見ル如ク事件ヲ受ケ又ハ受ケサルヘカラサリシ所ノ豫審裁判官ヨリ其事件ヲ剝奪シ其事件ニ付キ豫審ノ下級ノ機關ヲ超過シ豫審裁判官ノ宜ク爲スヘキ所ノ作業ヲ爲スコトヲ以テ其役員ノ一人ニ任シ且ツ自ラ直接ニ宣告スルノ權ヲ有ス、此場合ニ於テハ人呼ンテ控訴院カ事件ノ管轄權ヲ剝奪シタリ(ユウカケ)ト云フ又此權ヲ呼ンテ管轄權ヲ剝奪スルノ威權(アウカワール、デ、ウカシヨ)ト云フ是レ舊時ノ(パル、マン)ノ權利ノ一紀念ナリトス抑々此威權ハ二個ノ條ヨリ出ツ即チ治罪法ノ一箇條ニシテ第二百三十五條及ヒ千八百十年ノ法ノ一箇條ニシテ第十一條是レナリ此點ニ付キ疑義ノ生スルアルニ拘ハラズ治罪法



ノ條ハ此威權ヲ重罪取調局ニ與フ、然レモ單ニ此局カ受ケタル事件ノ經過中ニ顯ハレ來リタルモノニシテ此處分ヲ執ルヲ以テ必要ナリト見ユル所ノ事件ニ付キテノミ與ヘタル威權ナリト決セサルヘカラス、之ニ反シテ千八百十年ノ法ノ條ハ控訴院ニ諸局集合シ且ツ前段ノ制限ナク此威權ヲ與ヘタリト決セサルヘカラス(一)

(二)治罪法(第二百三十五條) 總テノ事件ニ於テ控訴院ハ重罪院ニ移ス旨ヲ宣告ス可キヤ否ヤヲ決セサル間ハ初メノ裁判官ニ於テ豫審ヲ始メタルト否ヤト問ハス職權上ニテ犯罪ノ起訴ヲ命令シ證據書類ヲ差出サシメ豫審ヲ爲シ又ハ爲サシメ然ル後其相當ノ裁定ヲ爲スコトヲ得可シ)

千八百十年四月二十日ノ法(第十一條) 王國裁判院ハ總テノ局ヲ集合シ重罪輕罪ニ付キ其役員ノ一人ニ於テ爲ス所ノ告發ヲ聽クコトヲ得ヘシ該院ハ此事件ノ理由ヨリシテ公訴ヲ起スコトヲ命スル爲メ又ハ檢事長カ既ニ始マリタル公訴ニ付キテノ報告ヲ聽ク爲メニ檢事長ヲ呼出スコトヲ得可シ(千八百十年ノ布令ノ第六十一條第六十四條及ヒ次條ヲ參照スヘシ)

重罪院カ控訴院ニ屬スル此權限ヲ有シ、即チ我輩カ既ニ第千八百二十六號以下ニ於テ論シタル場合ニ於テ辨論中顯ハレタル重罪ノ理由ヨリシテ公訴ヲ命スル所ノ權ヲ茲ニ參照セサルヘカラス

第六節 大審院

(第二千十一號) 我輩カ前ニ(第千九百五十一號)示シタル所ノ高等裁判權ノ職務ハ舊王政ノ時ニアリテハ總テノ裁判ハ王ヨリ出ツトノ諺ニ從ヒ且ツ王ノ裁判ニ向ヒ最上ノ上訴トシテ王ノ會議即チ關係人ノ會議(コンセーユ、デ、パルチー)又ハ私人ノ會議(コンセーユ、プリヴエ)ト云ハレタル一局ニ於テ之ヲ行ヒタリ、人尙ホ民事ニ於テ大法官アギユッソー及ヒ其二子ノ編成ニ係ル千七百三十八年六月二十八日制定ノ「會議ニ於ル訴訟手續ニ關スル規則」ト稱シタル有名ナル一規則ノ諸條例ヲ遵奉ス

立憲議院ハ裁判上ノ隸屬ノ極點ニ置クニ千七百九十年十一月二十七日及ヒ十二月一日ノ布令ニヨリテ破毀ノ裁判所ヲ以テセリ、而シテ此裁判所ハ新ニ共和紀元第八年六月二十七日ノ法ニヨリテ組織セラレ、且ツ既ニ第千九百七十號挿註ニ於テ舉ケタル共和紀元第十二年八月二十八日ノ「セナチユスコンシユルト」ニヨリテ大審院(譯者曰ク原語之ヲ「クールドカツサシヨン」ト云フ破毀院ノ義ナリ)ト稱セラレタリ

(第二千十二號) 大審院ハパリニ所在シ、三局ヲ以テ組成ス即チ請願局民事局及ヒ刑事ニ付キテハ刑事局是レナリ、



此各局ハ少クモ十二人ノ員數ニアラサレハ裁判スルヲ得ス

此ノ如ク分離シタル局ノ區別アルニモ拘ハラズ、民事ニ付キテモ又刑事ニ付キテモ裁判單一ノ原則ハ尙ホ茲ニ顯ハル、即チ總テノ評定官カ投票ノ半數ニ分レタル場合ニ於テ、之ヲ決スル爲メナルト差支ニ補充スル爲メナルトヲ問ハス、皆各局相互ニ補助トナルヲ得ル所ノ權ニヨリテ顯ハレ、又刑事局カ休暇中至急ヲ要スル民事ニ付キテハ局トシテ裁判スルヲ得ルノ權ニヨリテ顯ハレ、最終ニハ或ル場合ニ於テ公式ノ公廷ニ於テ民事刑事ヲ問ハス事件ヲ裁判スルニ付キ總テノ局ノ集合ニヨリテ顯ハル、モノトス(一)

(二)共和紀元第八年六月二十七日ノ法第六章破毀ノ裁判所(第五十八條 破毀ノ裁判所ハ政府ノ定メタル場所ニ於テパリーニ所在スヘシ 此裁判所ハ裁判官四十八名ヨリ組織スヘシ)(當今ニアリテハ第一裁判長及ヒ各局ノ三裁判長ヲ合セテ二十九人ナリトス是レ千八百十五年二月十五日ノ命令ニ依ル)

(第六十條 裁判所ハ三局ニ區別シ各裁判官十六名ヲ有スヘシ第一ノ局ハ破毀又ハ裁判官ニ對スル不正裁判請願ノ受理又ハ棄却ニ付キ裁判ヲ爲シ且ツ終極權ヲ以テ裁判管轄ニ付キテノ訴又ハ一裁判所ヨリ他ノ裁判所ニ送付スルノ訴ニ付キ裁判ヲ爲スヘシ 第二ノ局ハ請願ノ受理セラレタル并終極權ヲ以テ破毀ノ請願及ヒ不正ノ裁判ニ對スル請願ニ付

キ宣告スヘシ 第三ノ局ハ豫メ受理不受理ノ裁判ヲ要スルヲナク重罪輕罪及ヒ違警罪事件ニ係ル破毀ノ請願ニ付キ其裁判ヲ爲ス可シ)

(第六十三條 各局ハ少クモ十一人ノ員數ニアラサレハ裁判スルヲ得ス而シテ裁判ハ總テ投票ノ多數ニヨリテ與フヘシ)

(第六十四條 意見ノ分レタル場合ニ於テハ之ヲ決スル爲メニ裁判官五名ヲ呼フヘシ此五名ノ裁判官ハ先ツ意見ノ分レタル所ノ事件ノ議論ニ出席セサル局員ノ中ヨリ取り次キニ他ノ局員ノ中ヨリ抽籤ヲ以テ取ルヘシ)(前ニ舉ケタル千八百二十六年ノ命令第五條ニヨリテ變更セラレタリ)

(第七十八條 破毀ノ後仍ホ本案ニ關スル第二ノ裁判カ第一ノ裁判ト同一ノ方法ヲ以テ抗擊セラル、并ハ其問題ハ破毀裁判所ノ諸局集合シテ之ヲ決スヘシ)(此條ト我輩カ大審院上告ヲ論スル并舉ケル所ノ千八百三十七年四月一日ノ法ヲ參照スヘシ)

共和紀元第十年十一月十六日ノ憲法ニ關スル「セナチ」スコシユルト(第二十八條 掌璽官ニ於テ上席スル破毀裁判所(此掌璽官ノ議長トナルヲハ當今ニアリテハ既ニ存セス其裁判官懲戒ニ關スル并モ亦同シ)ハ控訴裁判所及ヒ始審裁判所ニ付キ監督懲戒ノ權ヲ有ス又此裁判所ハ重大ノ事件ニ付キテハ裁判官ノ職務ヲ中止シ其行狀ニ付キ辨明ノ爲メ之



ヲ大法官ノ面前ニ呼出スヲ得  
千八百二十六年一月十五日及ヒ十九日ノ命令(第一條大審院ハ三局ニ分タル即チ請願局  
民事局及ヒ刑事局ナリ)

(第二條 諸局ハ法律ニヨリテ定メラレタル管轄ノ規則ニ從ヒ各々分離シテ所在シ又ハ  
一般ノ會議及ヒ公式ノ公廷ニ集合ス)

(第三條 千八百八年三月十八日(共和紀元第八年六月二十八日)ノ法第六十三條ニ從ヒ諸  
局ハ少クモ十一名ノ員數ニアラサレハ裁判ヲ與ヘス)

(第四條 若シ差支又ハ不在ノ結果ヨリシテ現在ノ評定官ノ員數前條ニ記載シタル員數  
ヨリ少キ時ハ任官ノ順序ニ從ヒ公廷ヲ開カサル所ノ局ニ附屬スル評定官ヲ呼ヒテ之ヲ補  
充スヘシ)

(第五條 千八百八年三月十八日(共和紀元第八年六月二十八日)ノ法第六十四條ニ從ヒ投  
票ノ半數ニ分レタル場合ニ於テハ之ヲ決スル爲メニ五名ノ評定官ヲ呼フヘシ 此五名ノ  
評定官ハ先ツ事件ノ議論ニ出席セサル所ノ局員ノ中ヨリ取り次キニ任官ノ順序ニ從ヒ他  
ノ局員ノ中ヨリ取ルヘシ)

(第六十二號第二) 我輩ハ裁判權ニ關スルモノヲ終ル爲メニ總テノ刑事裁判權ニ普通ナル

一規則ヲ舉示スヘシ、即チ刑事裁判權ハ休暇ヲ有セサルコト是レナリ、抑々休暇ハ被告人ニ對  
シテハ不確實痛心ヲ與ヘ且ツ屢々未決拘留ノ遷延トナルヘク、刑罰ノ社會ノ要用ニ對シテ  
ハ一害トナルヘシ

違警罪裁判所ニ付キテハ毫モ困難ヲ生スルコトナシ、何トナレハ治安裁判官ハ其補助官ヲシ  
テ代理セシムルヲ得ルノ外、休暇ヲ有セサレハナリ他ノ裁判權ニ付キテハ構成ニ關スル各  
種規則ヲ利用シテ間斷ナク職務ヲ執ルコトヲ得ヘシ(一)

(二)大審院ノ職務ニ於ル規則ニ關スル千八百二十六年一月十五日ノ命令(第六十四條 刑  
事局ハ休暇ヲ有セス 刑事局ヲ組織スル法官ニ漸次與フル所ノ賜休ニヨリテ之ヲ補フ)  
(第六十六條 刑事局ハ普通ノ職務ノ外ニ尙ホ休暇中ノ事務ヲ任セラル)

帝國裁判院及ヒ重罪院ノ構成及ヒ事務ニ關スル千八百十年七月六日ノ布令(第二十九條  
帝國裁判院ノ刑事局ハ休暇ヲ有セス)

(第三十條 休暇ハ重罪院ノ事務ヲ妨止シ若クハ遲延シ又ハ中斷スルコトヲ得ス)

始審裁判所及ヒ違警罪裁判所ノ構成ニ於ル規則ニ關スル千八百十年八月十八日ノ布令  
(第三十六條 輕罪事件ニ於ル事務ヲ執ルノ局ハ休暇ヲ有セス豫審裁判官ニ付キテモ亦  
同シ)



第七節 司法警察官吏

(第二千十三號) 豫審ノ諸種ノ作業(第九百二十九號參觀)ハ共和紀元第四年二月ノ法典以來司法警察官吏(オフィシエ、ド、ポリス、ジュディシエール)ト稱スル數多ノ役員ニ任セラル、治罪法ハ其第九條ニ於テ、少クモ重要ノ者ニ付キ此官吏ノ列記ヲ爲シタリ(一)此官吏ハ總テ同一ノ職務ヲ有スルニアラス、又同一ノ範圍ナル權限ヲ有スルニアラス、我輩ハ此官吏ノ中ニ付キ舉示スルコト左ノ如シ

(一)治罪法(第九條) 司法警察ハ以下ニ設定スル所ノ差別ニ從ヒ控訴裁判所ノ威力ノ下ニ於テ左ノ各員之ヲ執行ス可シ

田野監守人及ヒ森林監守人

警部

邑長及ヒ邑長ノ副職

檢事及ヒ其代職

治安裁判官

憲法ノ士官

警部長

豫審裁判官

(第十條) 各州ノ州長及ヒ巴里府ノ警察總長ハ前第八條ニ從ヒ重罪輕罪違警罪ヲ證明シテ其犯人ヲ罰ス可キノ任ヲ受ケタル裁判所ニ之ヲ引渡ス爲メニ必要ナル總テノ所爲ヲ己レ自カラ行フコトヲ得可ク又ハ各個ノ司法警察官吏ニ關スル事ニ付キ右ノ必要ナル所爲ヲ行フコトヲ其司法警察官吏ニ請求スルコトヲ得可シ

(第二千十四號) 豫審裁判官ハ司法警察官吏中最モ主要ノ者ニシテ、司法警察ノ完全ナル職務ヲ有シ、且ツ此職務ニ加フルニ更ニ裁判權ノ一權限ヲ有スル所ノモノナリ(第二千五號參觀)

第二千十五號) 府縣知事及ヒ巴里ニ於ル警視總監(第六百二十九號及ヒ第六百三十五號并ニ其挿註ヲ參觀ス可シ) 府縣知事ハ其縣ニ於テ行政警察ノ高等官吏ニシテ且ツ格外ノ司法警察官吏ナリトス、治罪法第十條ノ正文及ヒ參事院ニ於テ草案審査ノ時ノ議論ヨリシテ此立法ノ精神ハ明カニ左ノ如クナルコトヲ看ル、即チ府縣知事ニ與フルニ裁判權ノ所爲ヲ除クノ外ハ豫審裁判官カ爲シ得ル所ノ諸種ノ所爲ハ種々ノ令狀ヲ發スルト雖モ亦自ラ之ヲ爲スノ威權ヲ以テスルニアリ、而シテ府縣知事ハ唯國事ニ關スル重罪輕罪ニ對スルノミナラス、尙ホ普通法ノ重罪輕罪ニ對シテモ此職權ヲ有スルコト是レナリ、既ニ此ノ如ク明瞭ナリ、



而シテ敢テ之ヲ掩蔽シ又ハ論争スルハ益ナキナリ、然レモ又右ノ正文及ヒ議論ヨリシテ府縣知事ハ證據ノ湮滅又ハ犯罪者ノ逃走ヲ防止スルカ爲メニ至急ノ必要アルニアラサレハ此隨時ノ威權ヲ使用スヘカラサルヲ、及ヒ可及的速ニ其事件ヲ相當管轄ノ司法官憲ニ送付シ而シテ之ヲ裁判所ノ規則ニ從ヒテ行フ所ノ手續中ニ屬セシムルノ義務ヲ生ス、但シ其他毫モ正文ヲ以テ其職務ヲ現行ノ重罪又ハ輕罪ノ單ナル場合ニ限リタルニアラス、茲ニ論スル所ノ府縣知事ノ此威權ノ必要ハ非現行ノ重罪又ハ輕罪事件ニ係ル時ト雖モ不時ニ或ル證據又ハ或ル逮捕ニ付キ生スル所ノモノナリ、

第二千十六號) 始裁審判所檢事及ヒ其代職 我法律ハ原則トシテ、起訴ノ職務即チ求刑ノ職務ト司法警察ノ職務トノ間ニハ我輩カ前ニ(第九百四十五號) 擧ケタル所ノ擔保上ノ不兩立アルヲ定メタリ、但シ我法律ハ例外トシテ、且ツ單ニ現行重罪及ヒ之ニ准スル或ル他ノ重罪ニ付キ始審裁判所檢事及ヒ其代職ヲ以テ必要ナル豫審ノ第一ノ所爲ヲ至急ニ爲シ得ル爲メニ司法警察官吏ト爲シタリ(治罪法第三十二條以下參觀) 此職務ヲ司ラシムルハ特ニ此檢事ト此代職トニアリテ他ノ官吏ハ高等ノ檢察官ト雖モ尙ホ之ヲナスコトヲ得ス是ヲ以テ控訴院ノ檢事長及ヒ檢事又ハ其代職ハ司法警察官吏ニアラス、檢事長ハ此官吏ノ監督ヲ任セラレモ自カラ其所爲ヲ行フコトヲ得サルナリ、千八百六十三年五月二十日ノ法ハ現行

輕罪ノ場合ニ於テ始審裁判所檢事ニ同一ノ職務ヲ與ヘタリ

(第二千十七號) 司法警察官吏ノ中ニ就キ始審裁判所檢事ノ補助官ノ名稱ヲ有スル者アリ、即チ治安裁判官、憲兵ノ士官、邑長、其副職、及ヒ警部是レナリ(治罪法第四十八條及ヒ第五十條參觀)(一)是等ノ官吏ハ始審裁判所檢事ト同一ノ場合ニ於テ現行重罪事件ニ付キ、其檢事ノ不在ナルキ之ニ代リテ自カラ着手シタルト檢事ヨリ任セラレタルトヲ問ハス、檢事ノ管轄ニ屬スル司法警察ノ所爲ヲ行フコトヲ得

(第四十八條以下參觀)

(一)警部ニ關スルモノニ付キテハ左ノ三個ノ布令ヲ參觀スヘシ即チ 警部ニ關スル千八百五十二年三月二十八日ノ布令 郡區警察ノ警察署ノ創設ニ關スル千八百五十三年十一月十七日ノ布令 縣警察ノ警察署ノ設置ヲ許シ警察ノ一般又ハ特別ノ監督ヲ廢スル所ノ千八百五十三年三月五日ノ布令是レナリ

(第二千十八號) 司法警察ハ治罪法第九條ニ從ヒ控訴院ノ職權ノ下ニ施行セラル、而シテ總テノ司法警察官吏(府縣知事ヲ除ク)ハ此資格ヲ以テ檢事長ノ監督ノ下ニアルモノトス(治罪法第二百七十九條) 治罪法第二百八十條以下ハ檢事長ノ此監督ノ權利又ハ控訴院ノ此威權ニ伴隨スル所ノ懲戒上ノ權限ハ如何ナル者ナルヤヲ示ス(一)此控訴院ノ職權ニ關シテ



ハ我輩カ既ニ(第二千十一號參觀)重罪取調局又ハ諸局ノ集合スル控訴院ニ屬スルモノトシテ示シタル所ノ威權又特ニ管轄剝奪ノ威權ノ中ニ於テ尙ホ尤モ高度ナル方法ヲ以テ顯ハル、モノトス

(一)治罪法(第十七條) 田野監守人及ヒ森林監守人ハ司法警察官吏トシテハ檢事ノ監視ヲ受クルモノトス但シ行政上ニ於ル其長官ニ對スル從屬ト相觸ル、コナカル可シ)

(第五十七條) 豫審裁判官ハ司法警察官タルノ職務ニ付キテハ控訴裁判所檢事長ノ監視ヲ受クヘキモノトス)

(第二百七十九條) 總テノ司法警察官吏ハ勿論豫審裁判官ト雖モ檢事長ノ監視ヲ受クルモノトス

此法典第九條ニ從ヒ假令行政上ノモノタリ此職務ノ爲メ法律上ニテ司法警察ノ或ル所爲ヲ行フコニ招喚セラレタル各人ハ此關係ノミニ付キ右ニ同シキ監視ヲ受クル者トス)

(第二百八十條) 司法警察官吏及ヒ豫審裁判官ノ懈怠ノ場合ニ於テハ檢事長ヨリ之ニ告戒ヲ爲ス可シ但シ其告戒ハ檢事長特設ノ簿冊ニ之ヲ記載スヘキモノトス)

(第二百八十一條) 再犯ノ場合ニ於テハ檢事長ヨリ右ノ各員ヲ裁判所ニ告發ス可シ)

(第二百八十二條) 若シ右ノ官吏カ如何ナル事件ノ爲メタルヲ問ハス簿冊ニ記載シタル告戒ノ日ヨリ起算シテ一年ヲ經サル前ニ更ニ再ヒ譴責セラレ、時ハ再犯ナリトス)

(第二千九號) 豫審ノ職務ハ又左ノ官吏ニ委任セラレ、即チ管轄剝奪ノ結果ヨリシテ控訴院カ其役員ノ一人ヲシテ取調ヲナサシムルコニ決シタルト時ニ控訴院自カラ指定スル所ノ評定官ニ任セラレ、

又重罪公訴ニ附シタル以來辯論前迄ヲ限り、必要ナル所ノ追加ノ豫審ニ付キ、規則上當然重罪院ノ裁判長又ハ之ニ代ハル所ノ裁判官ニ任セラレ(一)是レヨリシテ最初ノ豫審ニ關與シタル豫審裁判官ニ對シテ設ケタル保護上ノ不合格(第九百七十九號參觀)ハ此追加ノ豫審ニ於テハ重罪院ノ裁判長又ハ之ニ代ル所ノ裁判官ニ適用セラレサルノ結果ヲ生スルモノトス

(二)治罪法(第三百一條) 無効ニ於ル訟求ニ拘ハラヌ豫審ハ辯論ヲ除キテ其前ノ手續ニ至ルマテ之ヲ繼續ス可シ

然レモ若シ第二百九十六條ニ定メタル法式ヲ履行シ及ヒ其期限ノ終リシ後ニ右ノ訟求ヲ爲シタル時ハ辯論ノ開始及ヒ裁判ニ取掛ル可シ○其無効ニ於ケル訟求及ヒ其訟求ヲ起スノ基本タル證據ハ重罪裁判所ノ確定ノ裁判アリシ後ニ非サレハ大審院ニ之ヲ附ス可カラズノ理由ノ如何ヲ問ハス法律上ノ期限ノ終リシ後若クハ陪審抽籤ノ後其期限ノ經過中ニ爲シ